

# ネタの供養場

火桜 葵

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

没にしたネタの供養場です  
タグは全て保険

# 目次

中二病でも恋がしたい	1
Re:ゼロから始める異世界生活	5
オリジナル①	7
ダーウィنزゲーム	11
らき☆すた	14
ハイスクールD×D	19
東方project	21
僕のヒーローアカデミア	25
オリジナル②	27
とある魔術の禁書目録	31
ToLoveる	43
深夜廻	51
ポケットモンスター ソード・シールド	55
オリジナル③	57
オリジナル④	72
転生杯 ネタ	81
メイドインアビス二次	86
結城友奈は勇者である二次	94
ダンまち×FGO 二次	109
クロスオーバー杯没ネタ	131
クロスオーバー杯没ネタ②	138
神様転生杯作品 汚物	143
転スラ×帝都聖杯奇譚	160
東方Project 二次 ②	187

## 中二病でも恋がしたい

学校に居たある日のこと

「我が名はダークフレイムマスター！闇の炎に抱かれて死ぬ！」

俺は見てしまった。それを。

こんな物を見てしまった俺の心境は言わずもなだらう。

うわあ、痛い。これは見なかったことにした方が良いでしょうか？

わからねえ。うわあ、うわあ。

うわあしか言えねえよ。

こんな朝っぱらから学校のベランダでそんなことを言うのはどうかと思うけどなー。

「ダークフレイムマスターねえ？闇の炎か、俺も黒炎なら出せるけどなあ、闇の炎なあ？いかにもだなあ」

面白い物を見せてもらったしこの面白さが薄れないうちにとりあえず家帰ろうかな。

入学式なんて物は知らない！

先程録った録音データはちゃんと持っておいとう。モリサマーのデータもプリントアウトしているのだ。

ダークフレイムマスターはここに居るみたいだ、さらにモリサマーとかいう奴もここに居るらしい。

ふふふ！これでからかう材料が増えたぞ！ふはは！！首を洗って待っているよ！元・中二病供め！！

面白くなつて来たぞお！

「ふはははははははッ！！」

俺は高笑いする。

高笑いする俺とダークフレイムマスターを影から見ている人が居るとは知らずに。

「ダークフレイムマスター！！カッコいい！！」

家にて

「うくん？なんかお隣さんうるさいな」

「――!!――!」

「クッ！うるせえ！あー!!うるさいなあ！」

うるさい！もう、これ以上は我慢できん！

俺は家の扉を勢い良く開けてお隣さんのインターホンを鳴らす。

ピンポン

お隣のドアが開く。

「すみません、うるさいんですけど。ちょっと静かにしてくださいませんか？」

「す、すみません！すぐ静かにしますんで！」

ん？んんん??あれれー?こいつつてもしかして今朝の

「ダークフレイムマスターか？」

「な！な、なななな!!ど、どうしてそれをお!!だ、誰だ!?誰に教えてもらったあ!!」

スゴい驚いてる。まあ、だろうな。

「ふふふ！闇の炎に抱かれて消えろ!!」

「止めろお!!それは聞きたくない!!」

「どうしたの？勇太」

「あ、お前は来るな！話がややこしくなる！」

「今、共鳴を感じた！」

お？こいつもまさか中二病か？しかし、元じゃないのが悔やまれるぞ！クッ！

「俺も感じるぞ！その力！貴様は何者だ！もしや貴様は闇の炎の使い手か！」

「闇の炎の使い手はそのダークフレイムマスターがそう。私は邪王心眼の使い手！」

「止めろ！それを言うなあ!!」

やっぱり中二病だったか！

「ふふふ、俺の力が知りたければ明日、魔の学園の中央にて待っているぞ！」

俺は適当なことを言っておいてとりあえず家に帰る。

そしてすぐに時間がたった。

翌日

「ふふふ、よくきたな、ダークフレイムマスター& a m p・邪王心眼よ！我が力見せてやろう！」

俺は肩に木刀をかつぎさういう。

「さあ、勝負だ！」

「すぐ戦闘形態に入る。凸森！」

「ハイ！マスター！」

相手は折り畳み式の傘のみ。

そしてもう一人は自身のツインテールの先に何かよく分からない物を取り付け振り回す中学生。

これは勝てさうだ。

「爆ぜろリアル！弾けろシナプス！バニッシュメントデイス・ワールド！！」

邪王心眼達はさう叫ぶ。そして警戒して待ってみるも

魔力、霊力共に動く気配無し。ふむ、やはり只の中二病か？

少しか俺と同じ力を持っている奴等かと思っていたのだが筋違いだっただか。

「おい、止めろ。あんたも木刀なんて持ってきたら危ないだろ？」

何やらダークフレイムマスターがこちらを注意してくる。

何故だ？木刀は確かに当たれば危ないが敵になるであろうものに油断なんて出来ないんだからな。

「さうか、ダークフレイムマスターは俺と戦う意志がないということの間違いないな？」

「あ、ああ、さうだ。そもそも俺はさういうのは卒業したんだ！」

さうか、さうか、まだこいつは俺のことを同類だと思っっているらしい。

「ふふふ、俺の力は卒業なんて出来る物じゃない！見せてやろう！俺の力をな！」

周りの空気が一気に重くなる。

「こ、これはスゴい、デス。何か、重い雰囲気があるデス」

「ゆ、勇太あ」

「あ、ああ、これは本当にヤバいかも知れない」

「確かお前達が戦闘体制に入るための術式はこうだったか？」

「爆ぜろリアル！弾けろシナプス！バニツシユメント・デイス・ワールド！！」

周りの景色が黒く塗りつぶされていく。

「う、嘘だろ!？」

景色はさしずめ魔界といった所だろう。

そして俺は自身の力を解放し木刀を一降りの黒い刀に帰る。

「さて、どうしてくれようか？」

## Re：ゼロから始める異世界生活

俺は……死んだ、文字通り死んだ。御臨終である。日本我が家にサヨナラバイバイである

まあ、旅立つのは俺だけなんですけどね

何で死んだのかというと、新幹線のホームで足をひっかけてそのままブチツとされたわけであります

死んだら転生とか、まああるはずもないよなあとか考えてると

まさかの異世界召喚が来たあ!?

って感じに今なってる

この場合、異世界召喚かと聞かれると少し、大分疑ってしまうけど容姿は美女、スタイルは抜群、髪は透き通るような白いような銀色のような髪、手足は長く、声は高く綺麗な音を奏でる、その顔はいつも笑顔でにこやかだ

そして、空っぽな空虚な心

まあ、この条件だけでわかる人もいらっしやるだろう

ああ、俺もわかってる。これは……この姿はっ!!

「FGOの長尾 影虎じゃないですかーっ!!」

まあ、容姿とか体型はもろにFGOのかげつちちゃんだけど、別に無感情とか別にそういうわけではないのでありますよ?

何を考えてこの姿にさせたのかまったくもって俺にはわからないけども

まあ、良いと思うよ?

強いし、可愛いし、面白いし

俺も愛用してるしね、初めては影虎でした

スキルマにレベルマ、絆までマックス、夢火まで渡している

まあ、普通に配布ながらに随分とお世話になっているサーヴァントの1人ではある

「はあ、これから一体どうしましょうか」

顔を両手で覆って、道のと真ん中でため息を吐く



すると後ろから肩をチョンチョンと小突かれる  
何だろうと、後ろを振り向くと

銀髪のいやに耳が尖った、白色の服を着た女の子が……ふあ!?

「Re:ゼロじゃないですか」

「え?りぜろ? 一体なんのこと?」

「あつ、ああ気にしないでください。どうやら迷惑をかけてしまった  
みたいですね。それじゃあ私はこれで……」

主役キャラなんかと一緒に居てたまるか、Re:ゼロとか死亡フラ  
グしかねえよ、バーカ!!

やってられつか!!

即座に前を向き、立ちあがりその場から退散しようとした。そのと  
き、グイツと日本特有の和装の服を引つ張られる

何事かとまた後ろを向けば、何か機嫌が悪そうなエミリアとガンと  
ばしてるパックが、パックさん止めて俺、死んじゃう

「困ってるなら言いなさい、一人で無理してたらダメなんですからね  
!」

「いや、別に困ってる訳じゃ……くそつ、これじゃ拉致があきません  
ね。あつ!!あそこで泣いてる女の子が!!」

「え!?!?!?!」

「隙あり!!さらばつ!!」

颯爽と隙を突き、その場から一目散に待避する  
後でワーワー騒いでるけど気にしないことにする

そのあとは、夕焼けに街が赤く染まるまで1つ高い塔の上でボーと  
していた。色々ありすぎて思考が纏まらないのだ

「本当にこれから、どうしようか うぐつ!」

急に心臓を締め付けられるような痛みにふるえ、目を閉じると  
私が居たのは最初の街中だった

ああ、嫌でもわかってしまった。つまりこれは……

「連動しちやってるじゃないですかー!!!」

## オリジナル①

家には、代々不思議な生物と過ごしてきた人達が多い

例えば、俺の母は豆腐小僧だったし

俺の父はリトルドラゴンだった

祖父はゲイザーだったかな、メンタマのやつね

祖母は座敷わらしだった。可愛かったなあ、祖母の家に幾度にお姉ちゃんぶつているんなことを教えてきたりとか

ゲイザーも案外人懐っこくて沢山遊んだ

豆腐小僧も豆腐を分けてくれたりした

リトルドラゴンはあるまりあったことないんだよな、親父は海外と  
かに行ったりすることが多いし

因みに先祖代々の中でも一番のやつはヤマタノオロチとかキュウ  
ビとかだったな

この2匹は普通の狐と蛇から育ったみたいだけど

あとは、ミノタウロスとか

まあ、そんな訳で俺も何かしら不思議生物と会っても可笑しくない  
のだ

だから大学から家に帰ってみれば、家のなかに妖精とか居てもおか  
しくなかったり

しかし、しかしだ。俺はずっと考えてきた

皆、いつも会えば仲良くしてくれた

相方が死んでしまった不思議生物たちも生きてるやつは多い  
会いに行けば仲良くしてくれる

だから俺のパートナーは仲良くしてくれる、性格のいいやつが良い  
と思っていた

だが、誰が考えようか……一番性格がマシそうに見える妖精が

……

「あつ、おかえり……早速だけどヤらない？」

……ビッチなんて!!



現在、我が家の中央

家に出没した野生の妖精をつまみ上げている

「出ていけ」

「なんでよ」

「うるさい、さっさと出ていけ。チェンジだよ、お前は出ていってしまえ」

「ちよつと失礼じゃないの!?!これでも妖精よ!?!一応格の高い方の血筋なのよ!?!わたし!?!」

「知らねえよそんなこと。初の出会いで、初の開口が何? 性行為を求めろ? 頭沸いてんのか、このクソビッチが」

「なつ!!なんてことを!?!誰がビッチよ!!これはねえ!!大変とてつもなく大切な行為なのよ!?!」

何か喚いとるなこやつ、つまみ出してやろうか

なんか話を聞いているだけでイライラしてきたぞ?

「ほう? 確かにそうだな、大切なことだな」

「そうよ、そうよね!!わかっているじゃない」

ふふんとたいしてない胸を張ってどや顔で、一タイライラすることを喋るビッチ妖精

トイレに流してやろうか

「んで、因みに何でそれが大切なのか教えてくれないか?」

「そんなの勿論、自分の中を他の人に埋められるって、とっても興奮するじゃない、うふふ……ハアハア♥?」

「ビッチじゃねえか!!」

「はあ!?!わたしは処女です!!ヤリマンと一緒にしないでください」

「どうでもいいわ!!」

しかしコイツひでえ、処女ビッチの上にドMの変態とか

手を浸けられんぞ

「はあ、仕方ないか。つまりはお前が俺のパートナーだったってだけ、運が悪かったんだろ」

「少し、いえ、大分失礼じゃないかしら？」

チツ、何か段々イライラしてきたな

少し意地悪しといてやるか

「失礼なもんか、まあ今お前を追い出したら何が起きるか分からん。変なやつに捕まえられてリンチされるかもしれないし、研究者になんて捕まれば勿論、生きたまま死を味わうことになりそうだ」

「ふえ!？」

「そうだったら、お前の仲間も同じようにされるかもなあ？」

「ふええええーっ!??!」

「あーあ」

「ふえ、ふええ。ううええええんっ!!」

おっと、泣き出してしまった

思ったより弱かったな。さてコイツどうしようか

とりあえず妹と母さんに電話しとくか

スマホはつと、あったあった

「もしもし?」

『わあ!!おにいっげホンゲホン、何?どうしたの?兄さん』

『お前、隠さなくていいって言ってるのに、そっちの方が可愛いし』

『ひやうっ!!べ、べつに隠してなんかないし、可愛いとかそんな軽々しく言わないでっ!!』

「急に大声だすなよく、ああそうだお前って何に会った?もう会っててもおかしくないだろ?」

『う、え?ああ、あああ会ったよ。私は何かスツゴいデカイ猫みたいなふさふさしてるの、スツゴいよモフモフしてていっつも寝る前はモフモフしてる、何かね?水とか操れるみたい』

「んお?水系統の猫?ミシピユシユか?もしかして、そうだとしたらマイナーなすごいやつを引き当てたな。今度会ってみたい」

『え!?!そ、それって、おにいちゃんが私の家に来るってこと!?!どうしよう、部屋のなか散らかってるよお!!』

通話してる向こうで騒ぎになってる、少し大変そう

『あつ、お兄ちゃんは誰と会ったの?』

「あゝ、ごめんやっぱいいや。切るな」  
『え!?ちよ、おにい——』

この調子だと母さんにも伝えられんな  
妖精の方を見ると未だに泣いて、あつコイツ嘘泣きだ!!  
「お前——!!!」

## ダーウィنزゲーム

「チツ!! ああックソツ!! お前、マジでふざけんよ、いっつもいっつも!!」

「だって、仕方ないでしょ。私、貴方のことが……………」

「……………嫌いなもの」

「そんなことで殺されてたまるかよ!! この鎖女の子が!!」

連続で迫りくる鎖を何とか避け続ける

「ああ、クソっ!! 揉むぞその胸!!」

「なあっ?! そういうところだって言ってるでしょ?! この変態!!」

「知るか!! お前がそんな格好してるからだろ!」

「別に普通でしょ!」

「俺の性癖にドストライクなんだよっ」

「それこそ知らないわよ!!」

「ああ!! 攻撃するぞ!?! いいのか!?! 本当に!!」

「しなくていい!!」

「おつま!?! マジでふざけるなよお!!」

「ハアハア、こうやってお前に付き合ってる俺も優しいと思うのだが、いい加減ポイントを与えるだけのATMになりたくないのだが」

「はあ、はあ。貴方がちよこまかと逃げ回るからでしょ……………いい加減死んだらどうなの」

「嫌だよ!! くそっ!! 今回はじゃんけんで決着つけるぞ」

「わかった、それじゃあ」

「じゃ〜んけ〜ん、ポン!!」

俺はグーをだし、シユカはチョキを出した……………つまり?

「つしやあああああつ!!俺の勝ちいいいつ!!ほらあ?さつさと降参してくださーい」

「チツ、言われなくてもするわよ」

「ほら〜早く早く〜」

「ぐっ」

「はやく〜」

ブチツ

「ふざけるなああああつ!!!」

「ふあ!?怒ったの!?!」

鎖が自身の手前まで迫るが、ギリギリ鼻と目の先で止まる

「ギリギリセーフだな」

「ほんつとに、貴方のシグルだいつきらい」

「自分でもチートだと思っけど、さて、どうするっ?」

「チツ、はいはい降参降参」

「はい、ポイント御馳走様〜」

「うがあ〜っ!!腹立つうっ!!」

「はっは、ざまあつ!!じゃーなー!!」

「くっそ!!あのガキーっ!!」



「レイン〜?ただいーまー」

「うるさいですよ。今日もあの女王とたたかってきたのですか?」

「まあ、戦ってきただけってわけじゃないけどな」

「いつもの追いかけてっここですか」

「そんな感じって、げえ、お前またそんなゲテモノ食べてるのかよ」

「失礼ですね、美味しいですよこれ」

「いや、納豆味とか口のなかネバネバしそう」

「そこまでじゃありませんよ。ところでですが、期待の新人とやらが現れましたよ」

「ほーん、あの気違いを倒したのか。名前はスドウカナメ、か。面白そ

うだな、ちよっかいかけようかな」

「止めておいた方がいいと思いますが、それこそアナタは有名なので  
すから」

「それなら少しの間はコンタクトは取れない、か。まあ、イベントがあ  
れば話す機会も在るだろ、相手が戦闘凶でもなければ、だけどな」

「それもそうですね。今日はもう寝るのですか？」

「ああ、流石に疲れたから寝る。おやすみ」

「おやすみなさい」



## らき☆すた

「らきすたあっ!!」

「どくした、まなな」

「んや、ただ言ってみただけ。さっさと飯食お、飯」

「あいよく、おろ?今日はお弁当じゃないんだね」

「今日は時間なかったからね、主にゲームのやりすぎ。お前、あそこの周回面倒だわ、他に何かやりみちないの?」

「ああ、あれはまだ無理かな。とりあえずレベル上げしといたら?」

「うむう、まあそうしとく。うまうま」

「はう、もしやもしや」

「二人ともいつも仲良くしてるよね」

「んむ?ああ、同類だしね」

「ねえ二人とも、チョココロネってどっちから食べる?」

「唐突だなあ」

「私は頭からかな」

「そっか、まななは?」

「俺は太い方から」

「ふうん」

「気のない返事だな」

「ところでさ、頭ってどっち?太い方と細い方」

「私はこっちの細い方かな」

「そっかあ、私は太った方が頭だと思ったよ。でも何で細い方?」

「だって貝みたいじゃない?」

「ふえ?」

「どした?因みに私はあれね、芋虫みたいじゃん」

「えっ!?芋虫」

「まあでもそう考えると貝の方がイメージいいね」

「貝でも頭は太い方なのではと言うべきなのだろうか?」

「何悩んでんの?」

「いや、貝でも頭は太い方なんじゃないかって」  
「ええ？なんで？」  
「だって、食事するとき口は入り口に入らないとダメだろ？それなら頭は入り口のほうの太い方なんじゃないかって」  
「ああ、なるほど。確かにそうだよ」  
「むむう、難しいこといなあ」  
「いや別にたいしたことないし、うまつ」  
「とうかさつきから何食べてんの？」  
「クッキー、前に作ってたの余ってたから持ってきた。普通に菓子パンも買ってるけど。食う？」  
「食うっ!!あゝ」  
「横着するな、ほれ」  
「がふっ、喉に刺さった。クッキー飛ばさないでよ、って、うまつ!!つかさも食べてみ!」  
「ええ、私も？そ、それなら一つ……美味しいっ」  
「でしょ？というかまんなそんな料理上手かったの？」  
「お菓子だけね」  
「ほへ、はぐ…んむ?!ふぐ…むむ？」  
「お前、何してんの」  
「あの、余ったチョコを付けながら食べると言う手も」  
「ん？」  
「んぐんぐんぐ、ぷは。流石だ、頭いいね」  
「流石に女の子三人集まると喋れん、パン食べよ。うまつ」  
「割り込みにくかったから聞くけど、いきなり何で焼き鳥屋とか焼肉屋の話に？花の女子高生が花のない話してるなあ」  
「まあ、現実の女子高生なんてそんなもんだよ」  
「そんなもんだな」



「ふむ、萌の波動と天然の波動を感じるぞ」



「え？インフルエンザと風邪の違い？」ですか？」

「ふんふんっ」

「違いも何も全然別物だよアレ」

「そうなの？」

「だって、インフルエンザはウイルス性で病気に認定されるけど、風邪は症状性のものであつて病気じゃないしね

だから風邪薬くなんてものは存在しないし、そんなことを薬屋で言つてもわからないんじゃないかなあ？

風邪の主な症状は、熱、喉の痛み、鼻水くしゃみとかが合わさつたやつね

だから的確に風邪つて言われても要領を掴めかねるし。だから医師に相談してもどの症状なんだ？つてなるし」

「お詳しいんですね」

「前に婆ちゃんから聞いた、看護師なんだ」

「それはすごいですね」

「なるほど……」

「そんなに悩むなら普通に、病気とそうじゃないと簡単に区別したら？」

「……………」

「……………まあ一緒にいたいなもんだよ」

「なるほど!!」

「コイツ……………」



「どうだった身長伸びた？」

「伸びてないっ」

「一緒に、俺も伸びてなかったよ」

「同士!!」

「おうよ!!我が同士よ!!」

「あんたら何してんのよ」

「友情の確認!!」

△▼△▼

「おーす、来たよー」

「あつ、かがみ。この前は御見舞い行けなくてすまなかったら、流石に女子の家に男単身で行けるほどまだ肝は座っておらん」

「いいっていいって気にしなくても」

「ふと思っただけけど、かがみって良く此処に遊びに来るけどクラスに友達居ないの?」

「あんたらと一緒にすんな喧嘩売ってんのか?」

「なあんだ、てつきりハブられてるのかと」

「何で俺まで巻き添えくらってんですかね」

「人の心配するより、社交性ゼロの自分を心配しなさいよ」

「無視か」

「心配しないでいいよ、こう見えて友達沢山いるし社交性、取引のレベル高いし」

「パーティーには毎晩参加してるし」

「はあ?」

「ぶふっ!!それゲームの話だろ」

「ゲームの話かよ!!」

「ネタばらししないでよ、そういえばさ最近あの人見ないよね?」

「あの人、ああ、あの武人系の戦闘能力高い引きこもり?」

「そうそう」

「てか、あの人何してんの?」

「なんか、戦闘の特訓するとかでどつかのダンジョンに籠りっぱなしらしいよ」

「あれ以上強くなってどうするつもりなんだアイツ」

「ゲーム内で閉じ籠り?」

「リアルログイン状況から察するにずっとログインしてるらしい

よ

「やっぱり引きこもりじゃねえか」

「まあ、同じ人間のすることだし」

「というかまた焼肉の話してるよコイツ」

## ハイスクールD×D

「お主、本当にそれで良いのか?」

「は? 最高すぎて涙出ますよ」

「いや、別に本人が良いなら別にいいんじゃないやが。それじゃあ転生させるぞ?」

「ええ、ドンと来てください!!」

空から落ちてきた、白黒の仮面と共に

突然空いた黒い穴に吸い込まれ、落ちていく俺……………

これはハイスクールD×Dの世界に、このすばのバニルの力を持った青年が産まれ落ち世界を面白おかしく過ごす物語である



「それじゃあ、行ってくるな、黒歌よ留守番は頼むぞ」

「にやゝ、少し暇だけど任されたにやん!!」

「姉さん、余計なことしたらダメですからね」

「白音!? 流石にそれはお姉ちゃん傷ついちゃうにやゝ、て?」

黒歌の言葉を無視してスタスタと、家の玄関から外へ出ていく白音  
いつも通りの日常である

「酷いにやゝ。ご主人様へ慰めてにやゝ」

気崩された着物から飛び出る大きなそれを押し付けられ、朝から刺  
激が強いが

慰めてくれというならば、それは主の務め

頭と喉を撫でてやる

「よしよし、落ち込むな落ち込むな」

「ふにやあく、やつぱりご主人様の手は落ち着くにやん」

スリスリとさらに寄ってくる黒歌にドキドキとしつつも、その潰れる  
大きなものに目が行かないようにする

「姉さん!? だ、ダメです!! ごしゅじ…カゲ君は私のです!!」

何時までたっても家から出てこない俺を心配したのか、家まで戻っ

てきた白音に腕をグイグイと引つ張られる

「うにやゝ、残念にやん。ご主人様には今夜、たつぷりと可愛がってもらうしにやゝ?」

「な!?ぐう、行きますよ!!」

「あいよゝ」

白音はすつかり機嫌が悪くなつてしまったようで、学校に着く間、着いてもずっと俺の腕を自身の腕で絡みとり手を恋人繋ぎにしていた

こんな風に美少女二人に好かれて、生徒からは妬ましい感情をぶつけられる。……フハハ、フハハハっ!!その悪感情、美味である!!

ふむ、実にいい、これだから人をからかうのは止められない

別に人をからかうために、白音 黒歌にこういう関係を強要している訳じゃない

気付いたら勝手に懐いていた

バナルの力を貰ってからと言うものの俺の人生はバラ色に輝いていた

俺は転生特典を貰えると言われたときに、即座に選んだのはバナルだった

王の財宝?無敵の力?スマフォ?

そんなものは要らん!!

俺が大好きなキャラナンバーワンはバナルだった

いつもバナルが出ているときは興奮しながら見ていたし、笑った

だからこそ、俺はバナルの力を願った

悪感情を食らうだけで生きていけるとか最高じゃないか!!

だって苛められても、それは俺にとって食物を与えているに過ぎないこと!!

そう、思うだけで…ハアハア。興奮するじゃないか!!

こんな変態が、過ごす物語

それが、この記録である

## 東方 Project

人間とは不思議なことに、というか凄い個人の主観が入るんだけど死ぬときって案外恐怖がないんだよね

そりゃ、ジワジワ死んでいくんだったら別だろうけど……

実際、自身の目の前に迫り来る暴走トラックに今にもピチユるとかじゃなくて、物理的にピチユりそうになってるんだけど、思ったよりも冷静なわけよ

何だろう死ぬから？身体的な能力とか脳のステータスが上がったの？

みたいな感じでスローモーションでトラックが動いてるんですね、本当なら走馬灯とか見る時間なんだろうけどね、ココ

いやいや、ちゃんと信号守ったよ？

でも周りを見てなかったんだなあこれが

これを機に、周りの人達は俺を反面教師として、安全確認が出来るような素晴らしい人達になってくれることを願うばかりですよ

まあ、そんなこんなでもう既に鼻と目の先に迫ってきたトラックに今から逃げろと言われても時既にお寿司

俺の今回の寿命は15年でした

両親よ、ごめんなさい

中3で人生終わってしまった

高校受かったのに、何てことだ

さよなら日本……………

……………した筈だったのに

目を開くと、どこか暗い地下のような場所

辺りから匂う鉄臭い臭い

なにこれ幽閉された？

別に手足を縛られてる様子はない



それにしても体に違和感を感じる  
確実に死んだと思っていたけど、案外生きてて手術済み……そんな  
ことないか

それならここは一体何処なんだと言いたい、声を大にして叫びたい  
どこかでーすかー!? そんな感じで……

もしや転生物ではあるまいな?

スライムとか蜘蛛とか、卵とかに転生してたりしない?

おすすめはスライムね、蜘蛛も良いよ

手を見てみるがしつかりとついている

可愛らしい柔らかかそうなぷにぷにでおてが……あれえ? おかし  
いぞおう?!

俺の手ってこんなに子供みたいな手だったかしら?

ありや、言語駕馬愚ツ照蔵?

ふう、落ち着け我が魂よ。何故そこまで荒ぶるか!!

目が覚めたら幼女になってたりとかしてるからだよ!? バカタレが

!!

予想できるか!!

………出来るな、戦記の人とか前例あるし

『もお、うるさいなあ』

ふあ!?

こいつ、直接俺の脳内に!?

『はあ? 何言って……あれ? 何これ私の体が勝手に動いてる』

ネタを拾ってもらえなくて悲しいとかないし、別に悲しくなんてな  
い

それはそれとして、まさかの憑依物だったか………これには流石の  
宇宙の帝王もビックリ!!

シュロロロロドリアンさん、綺麗な花火ですよお!!

おっと別のが混じった

『案外、冷静だね』

ってか、他の人の体に入り込んで

勝手に人生歩むとか俺にはそんな辛いこと出来るわけがないよお

『私、居るよ。ここに居るよ〜?』

え?マジで?憑依合体、子の場合同居か

そんなの聞いたこと……あるな、こういう設定って案外あるな

実際に作者同じようなキャラ作ってるしな

それにしても幼女と合体とかないわあ〜

俺も同じ状況の訳だけどね

そんなことは置いといて、貴女の名前を聞かせてください。コミュ

ニケーション大事

まあ産まれてこのかた、人とコミュニケーションなんて親と親友以外ないんだけどね!!

『何か変な人。人に名前を聞くときは自分から名前を言うって咲夜が言ってたもん』

え?マジで?今、咲夜って言った?

『ん〜?言ったよ?それがなに?』

おっと、まさかの原作アリアかあ〜

オリジナルだと良かったのに、何て考えても仕方なしこれもまた運命

ああ〜、それで名前だったか

ええーと、名前はそうだなあ〜、ん〜

ん〜?ん〜??ん〜???

おっと、このパターンね……

『ん?どういうこと?』

大変相手側も困ってる様子

実は名前を覚えてないって言ったら怒ったりする?

『私、そこまで怒りんぼじゃないもん』

怒りんぼじゃないと言ってる傍から若干苛立ってるな、この幼女

『私、多分貴方よりも年上だと思っようよ』

だろうね、知ってる

だから敬えと言われても困るわけで、こんなのも一応戸惑ってるわけですね?

ええ………

『ふーん、まっ良いわ。私の名前を教えてあげる、フランドール・スカーレットよ。覚えておいてね?』

おうふ、想像していたとはいえ本当だとは………貴女が悪魔か!!  
『間違っていないけど』

吸血鬼ですしね、地域に寄っては悪魔に分類されますもの

『あれ?私が吸血鬼だって言ったけ?』

別に言っていないけれど、それはともかく

今の状況を教えてクレメンス

ちよつと本気で不安で死にそう、ネタに走ってなきや発狂してそう  
なくらいには

『そう、それもいいんじゃない?』

いや、よくないから。早く話してどうぞ

『わかったわかったあく、えくとね?私がいつもみたいここに居た  
の』

ほうほう、それで?

『暇だから壁に向けて攻撃してたら急に頭が痛くなってね?』

それはそれは、デストロイな暇潰しだな

『ですとろい?』

ごめんごめん、続けて

『うん、それでね。急に前が真っ白になって。なんにも見えなくなって、  
目が覚めたらこうなってたの』

ははあん?意味が分からん

何で俺がここに居るのか、解決しなかったぜよ

## 僕のヒーローアカデミア

「さて、良いでしょう。私と戦いたい、ええ結構です。私は強さを、鍛えぬかれた強さを!!絆を!!そんなチャレンジャーを待っています!!いつもならばチャンピオンと戦うならば四天王達精鋭と戦うのが定石。ですが今回は特別です、私と戦いたいと言うならば……………」

「その強さを信念を、見せてみる!!」

今、このヒーロー社会に

あるまじき戦いが始まろうとしていた

「まずは俺からだ……………」

「良いでしょう、なら私はこの子です。行きますよ、エルレイド」

「エルツ」

「俺はアイツと戦いたかったんだが……………」

「エンブオーは今日はお休みです、私はパートナーが多い、それならばいつも戦わせるわけにはいかない、他の子達も戦わないと。それでは先手いただきます、エルレイド!!はどうだん!!」

「エル、レイツ!!」

「チツ!!」

はどうだんを氷の壁を作り防ぐ少年

しかしエルレイドのはどうだんも負けていない、何層もの氷の壁をドンドン突き破り少年の手前で止まる

「やはり防ぎますか、ならドンドン攻めますよ私は攻めるのが大好きです。分かりましたね?」

「ならこっちも攻めらしてもらっ」

ゴウツと炎がエルレイドに向けて迫りくる

しかしエルレイドには届かず難なく避けられる

「いいですよ、いいですよ!!そのままシャドーボール!!」  
「くっ」

「またもや炎で防御に入るが、氷とは違いシャドーボールが炎を突き抜けて少年に当たる」

「いいダメージです、今のうちですもう一つ積んでおきましょう」

「エル」

「くそっ」

少年のこおりのつぶてと言える攻撃をエルレイドに当てようとするがそれも避けられる

少年の攻撃が1つもロクに当たらないことに周りは少しザワザワと騒ぎ始める

「少し鬱陶しいでしょうかエルレイド、じならし」

「レイツ!!」

エルレイドが地面を蹴りつけると

地面を鳴らすだけとは思えないほどの爆音と共に地割れが起き、少年が立っていた場所の地面を凹ませる

「おおっと、やりすぎた。まあ後で直せば良いですか、エルレイドとどめの一撃、はどうだん!!」

流石に少年もただでは受けまいと、氷で防御に移るが

「無意味です、先程と同じ威力だとは思わないことですね」

最初に撃ったはどうだんよりも高威力な攻撃に氷は砕かれ少年に当たる

もろに受けてしまった攻撃に少年は戦闘を続行できない

ここで勝負は少女の勝ちだ

「さて、次の相手はどちらですか?」

にやりと挑戦的な蠱惑な笑みを浮かべる少女にゾクリとした恐怖と高揚感で体を震わし

次々と挑戦していく

これはある偶然からポケモンと共に転生を果たした少女の物語だ

## オリジナル②

昔見た、よくあるオカルト番組

超能力や幽霊、UMAや宇宙人

そして平面世界 俗に言うパラレルワールド

何か1つの些細な行動で運命が変わり

今の自分とはまた違う自分が生きている

私は今ほど昔、頭は柔らかくなかった

どちらかと言うと、擦れていた時期で

なんだそれ みたいな気持ちでそれを観ていた

今ではあればいいなんて思ったりする

私は友達が居ない、彼氏だって居たことないし、幼馴染なんてもつての他

今は好きな人なんて一番居ない、好きな人は推しだけです

何が言いたいのかと言うと

そんな私に、そんな世界に私がもう一人居るのなら

私に……友達をください

それだけのことだ

そんなことを思つて1年が経ちました

私は現在、引きこもりボツチ生活を楽しんでいます

いえあ!!

いやー、楽しいね!!

今まででお真面目に学校でとりつくつてたのが馬鹿らしく思える

なあく!!

え?早くしろ?次の狩に行く?

待つて待つて、あともう少しで終わるから……よっしゃ!一式揃つた!!

はえり、流石にもう眠い  
今日はもう寝る  
おつかれー っと

「……………寝るか」

ずっとイスに座ってやっていたために体が痛い  
首を横に倒したり、思いつきり体を伸ばして弓なりに反らしたりす  
る

身体中からバキバキと音がなる  
こうやって身体の何処かで音を鳴らすのは私の癖だ  
指も良くポキポキ鳴らしてるし

「ふわあ〜」

急に出てきたあくびが身体が睡眠を欲しているのを感じた  
そのまま着替えもせずにもふもふとぬいぐるみや抱き枕が並ぶ混  
沌な状態のベットに潜り込む  
このもふもふ達が私を睡眠の奥のそこまでいざなっ「ぐう〜」

おやすみ世界



何度か観た。今でも興味本意で観る  
超能力や宇宙人。そんなものが特集されるオカルト番組  
そういうのを観るだけでワクワクするしドキドキする  
本当に超能力が自分にあつたら、宇宙人が居たら  
そんなことを考えて妄想して想像して  
でも、本当はそんなことある筈ないと分かってて  
でも、夢見た。不思議な力に——現象に

だって仕方ない、男だし知ってしまえば  
そう願ってしまう。そんな力が欲しいな  
そんな現象があればいいな…なんて

所詮、それは全部紛い物だし物語の創作でしかない

そう思ってしまうのも仕方ないんだ

仕方ない筈だった

この目の前で寝ている女の子を見るまでは

………へ？え？あ？ちよ？うえ？なんで？

おーん？えと、これはまさかジャパニーズ夜這？

いや、自分日本人ですけど。何か、いやいやいや、そもそもモテない自分にこんなことする女子が居るわけないというわけで

し、しかし同じベットに寝ている訳だから、す、少しくらい触ってもバレない………いやいやいや、ダメダメ犯罪者になるきか!?そんなこと言ったらこの女の子だってそうだけだ!?

あぁっ!!なに、なんなの!?

マジで意味がわからん、フ○○キューー!

朝、目が覚めたら目の前で可愛い女の子が寝てました。これ何てラノベ？

うっそ、遂に主人公になりました？

それでも流石に、だがだが？これは？来てしまったのでは？おっおっおっ？

それにしても良い匂い、クンクン。ゲへへ嬢ちゃん良い匂いしてますなあ

………いや、本当に触ったら駄目？



いや、ここまで来たらもう触ってもよくない？

だって意味が分からないけど、可愛い女の子が目の前で寝てたら仕方ない。うん、これは仕方ないことなんだっ!!

ということに触らせていただきます!!

サワサワ、サワサワ。あつ、すごい手触り

これだけで快楽を得てしまいそう

すごいサラサラしてる

何を触っているかって？

髪の毛だよ、髪の毛だよ

大事なことなので2回考えましたあ!!

べ、べつに!?戸惑って手を引つ込めたりしたわけじゃないしい!?

童貞ちやうわい!!

ごめんなさい見栄張りしました。童貞です

「んうっ」

ビクウツ!!

ふわあっ!?び、ビツクリしたあ

起きたのかと………あつ、目が開いて此方を見て

「……え、あ?うえ?ふあ?」

「キヤーーーーーッ!!変態ーーーー!!ビツチに襲われるーーーーッ!!」

「……ふあ!?ちよ、ちよちよちよ!!それって此方の台詞でしょ!」

「知らんわボケッ!!此方だつて戸惑ってんだわ!!起きたら女の子が目  
の前で寝てました!?どんなラノベだよ!!最高だな!!」

「分かるけども!?だけど落ち着け、落ち、落ち着けやアホがっ!!」

「おふっ!!」

目の前の少女の放った蹴りが見事に腹に直撃、そのままベットから  
落とされ頭を強打

意識途絶える

良い、夢だった

「がふっ」

## とある魔術の禁書目録

てちてちとそんな効果音が合うような歩き方で、小さいからだを必死に動かして都市内を歩いている

ここは学園都市、住人のほとんどが学生で占められているという珍しい都市である

そんななか、歩いているこの少女は超能力者である

この学園都市では珍しいことではない。誰もかしもが何かしらの力を持っている、それが弱いものか強いものかは人それぞれではあるが……

しかし、この少女。都市内に数人しか居ないとされる、最高峰の力の所有者、レベル5の一人である

見た目とは裏腹に強力な力を持っているが、周りの人間がそんなことに気付くわけもない

年齢故に順位は8位と一番下だが、上位のレベル5に負けず劣らずの力である

しかし、そんな少女が1人何処へ向かっているのかというところ？

ジャッジメントと呼ばれる、学生の能力者で構成された組織。漢字で表すと風紀委員、こう聞けば学生がしていることが顕著になる

その、組織の基地である支部へと少女は足を運んでいた

ドアの前まで来ると、コンコンコンと三回礼儀正しくノックして、中からの返事を待つ

「はい、今開けまーす」

ガチャリと音を出しながら、開いたドアから顔を覗かせるのは少女にとっては見慣れてしまったが、頭に花を咲かせているのかと見間違えうばかりの花の装飾をした黒髪の少女だ

少女といっても、訪問者である少女よりは年上だ。中学生といったところだろうか。

対して訪問者である少女は小学低学年かどうかという幼さである

花の少女は、すぐに訪問者である少女に気がついたのか下を見てにこりと笑う

「どうやら、いつものことのように慣れてしている様子だ

「今日も来たんですか？今は白井さんは居ませんよ？」

白井さんなる人物の名前を出し少女に居ないことを伝えると少し残念そうな顔をするものの、少し悩んだ末に可愛らしく笑い中で白井さんなる人を待つということを伝える少女

「うくん、まっ大丈夫ですね。もしものときは白井さんのせいにしときましょ」

中々に酷い扱いを受けた白井さんなるひとは可哀想ではあるが、少女の意思を聞いた花の少女は少女を中へと入れる

少女は見慣れてしまったものだが、あっちこつちを見て首を忙しく動かしている

その光景に花の少女は微笑ましく思ったのかくすりと笑う

少女も見ることに満足したのか、いつもの自身の定位置に座る

そこで座ると、花の少女がリンゴジュースをコップに入れて持つてくる

少女は少しゲテモノの自販機の怪物共が出てこないかと心配したが杞憂であったようだ

少女は安心してそのコップに入っているリンゴジュースをクピクピと少しづつ口に流し込み飲み込んでいく

「美味しいですか？」

にこにこしながら聞いてくる花の少女に少女は短く返事する

「どうやら、ジュースに夢中のようなのである」

その光景にまた花の少女はくすりと笑ってその場から退く

「どうやら、自身の仕事をするようです。幾つもの画面のあるパソコンの前に向き合い座る」

この全てを花の少女が使いこなしているのを見るといつも少女は驚愕する

同時に、何故ここまで出来るのに能力は下位のままなのだろうとも思う

リンゴジュースをある程度飲み終わると、今度は机の上に置いてあった茶請けの菓子を手に取り梱包を取り除き食べる

どうやらチョコ菓子のようで少しリンゴジュースとは合わなかった

口直しに飴を手に取り口の中で転がす

コロコロと転がしていると不意にガチャリとドアが開く

「あつ、お帰りなさい白井さん」

「ただいまですの。って初春、何でまた入れてるんですの……」

「いやあ、流星に外で放置は可哀想ですし。ここまで歩いてきたのに帰すのも」

「はあ、仕方ないですわね。それで貴女また来たんですの？ここに来ても何も楽しいことなんて……な、なんですの？」

少女は頬を膨らませて、いかにも怒った風に白井さんなる人の手を両手でギュツと握る

テシテシと叩いてみたかと思えば次は抱きついてくる

ギューと抱きついて少しすると、顔を上に向けて何かを懇願する目流石の白井さんなる人もそこで罪悪感を感じる。何をしてほしいのか、彼女にはいまいち分からなかった為、その小さな頭を撫でてやると、少女は花が咲いたようにニパツと笑い更にギューと抱きついた「可愛いですね〜」

「はあ、それなら変わってくださいまし」

「変わりたくても私には懐いてくれないんですもん。風紀委員の中で唯一白井さんだけですよ？懐かれてるの、いつも他の支部の人が羨ましく羨ましくって言うてるんですから」

「げっ、そんなことになってるんですの？……はあ、道理で最近目線が厳しくなっていたと」

二人の思いなぞ関係ないとばかりに未だに抱きしめ続ける少女

そのあとも少しの間抱きついていたが、満足したのか体から離れて、バイバイと手を振ってドアから出ていった

「いつもいつも、なんなんですかの？」

「さあ？」

二人の少女は意味不明な行動に少し頭を悩ませていた



次に少女が向かう場所はいったい何処へ？

今度は明らかに怪しい路地裏へと足を運ぶ少女

不釣り合いな場所を歩く少女。そんな危ないところを子供一人で歩いていると……

「へへっ、お嬢ちゃんちよっとお兄さんと一緒に来ようか？」

「お菓子もあげるよ〜？」

「ゲームで遊ぼうよ」

……案の定、怪しい奴等に捕まる

歩いているときに急に後ろに引っ張られたものだから後ろに尻餅をついてしまう

急いで腰を上げると、時すでに遅く友達から貰ったお気に入りの服が汚れてしまっている

その事に、涙を浮かべ頬を膨らませていかにも怒っていますとアピールする

しかし、そんなことでどうにかなるわけではなく。余計に3人組に燃料を注ぐ形となってしまう

とうとう少女を能力を出して脅しにかかる

きつと誘拐目的だろうと検討をつける少女は能力を使っても問題なしと判断

相手側の能力もたいしたことはない

今日初めて少女が口を開く

「かぜ」

たった一言、それだけで男が1人壁に打ち付けられる

他の二人がその光景を呆然とし、少ししてハッとしたのか少女に怒り狂う

そこで逃げていれば良かったものの、少し知能が足りていなかった  
「でんき」

次に少女がそういうと、男がビクビクと痙攣を初めて地に倒れる

まだ1人男が残っている。次に少女が口にするのは 「ひ」

たった一文字だけだった

それだけで残り1人が燃えて悶える。少女はそれを冷たい目で見

て、その場から歩いて消える

男についた火もそのあと数秒で消え、たいした怪我もなく済んだようだった

△▼△▼

少女の目の前にあるのは1つの集合住宅

ある学校に通っている生徒のだいたいがここで住んでいる

少女の小さい体には少しキツイものの、歩いて階段を登る

目的の場所までつくつと、いつも使ってる台に登ってインターホンを鳴らす

しかし、いくら押ししても鳴る様子がない

どうしたことかと思っていた少女だが、そういえばと1つ思い当たることがあった

先日巨大な落雷があったのだとか

きつとそれのせいだろうと、台から飛び降りて、先程同様ドアを叩く

しかし、応答がない。仕方なくきつきより強めにドアを叩く

しかし、まだ応答がない。本当にどうしたものだろうか？

流石の少女もここまで反応がないと苛立ちを感じる

仕方ないとまた言葉を1つ紡ぐ「かんそく」すると少女の見える世界が変わる

変わる、というよりも。少女の目が一度消え、また現れた

ドアの方向を睨むと案の定、住人は中に居る

そのくせ出てこないのだから、これは仕方ないと、今度は蹴りを入れる：と同時にまた言葉を1つ「かぜ」と言うと少女の体に合わない力が出来、面白いように鉄製のドアが飛ぶ

中の住人にぶち当たったのか、蛙が潰れたかのような声を出してドアに潰されていた

少しその様子を見てスッキリする少女

部屋の中にもう1人、人が居たことに少女は気付いた

だが、人脈が広い少女でも都市内で見ただけで人間であったため

少し困惑する

訪問者であろうか？とも考えるが、やはりそれでもおかしいと考える

今は大覇星祭でもないのと思う

見た目は明らかに教会のような人、俗にいうシスターという人だろう

そう、思えるのは辛うじて頭に被っている帽子のようなものがあるからだ

それでもシスターにしては幼すぎる見た目だ、少女と変わらない、1つ2つ上だろうか？そのくらいにしか見えない

シスターもシスターで急に現れた少女に困惑する。まさか追っ手が既に来たのかと思っただが、昨日の追っ手とは全然違う風貌である

しかもこんな自身より小さい子が追っ手な訳がないと判断する

チクチクと安全ピンで自身の修道服を生成しなおそうと努力していたため、安全ピンが指にチクリと刺さる

安全といっても刺さると痛いわけで、声を洩らしてしまう

少女はその様子を見て大丈夫だろうと、ドアに潰れた住人の上にあるドアから足をどけて少女はシスターの前に立つと、少女が持っている布を貸してと言わんばかりに手を差し出す

流石のシスターも、壊れてしまったとは言え大事なものを少女に渡したくはない

そのため、ぐいっと自身の背中に隠す

少女は仕方ないと、あとどれくらいかと考えて、余裕があったためにいつもの容認言葉を紡ぐ「かぜ」

そうすると、毎度の如く風が起きて、少女が持っていた布が少女の手の中に落ちる

あつ、とシスターが声を出すすがそれはすぐに黙らせることになる  
「しゅうふく」少女がそういうとシスターの服が元の形にへと戻っていく

時間が戻るようにシユルシユルと音を出して、何とか形だけはシスター服へと戻った

何故か面倒なことに、すごい編み方をされていたため、少しだけ集中力を要したが

それでも服は元通りとはいかずも直った

その服をシスターへと手渡す少女。ポカんと呆けた顔をしているシスター

少し混沌としているが、ようやく意識を取り戻したのか、住人が何とか起き上がる

「うっ、をおっ、不幸だあっ」

住人のソレを子供らしからぬ冷たい目で見ると。やはり少女もレベル5の一員ということだろう

床に落ちていた住人の携帯を拾うと、補習ですとのこと

せっかくご飯でも誘おうと思っていた少女はどうしようかと悩む。少女の年齢では店を追い出させられることがあるかもしれないからと思索していたのだ

ふと、目に入ったシスターを見て、この際誰でもいいやとシスターの手を引っ張って外へ連れ出そうとする

「えっ？え？な、なに?！」

着のみ着のまま少女に連れ出されるシスター

住人の家に自身のフードを落として

△▼△▼

現在、少女とシスターが居るのは1つのファミレス

二人が座っている席は、小さな体の二人が見えなくなるほど積み上げられた空皿

その小さな体のどこに入るんだと言わんばかりに周りの客たちは二人を見ていた

ファミレスの店員たちも少し涙目である

シスターの動きが止まり、もう終わりかと安心していただけ店員たちは次の言葉に更に泣き叫ぶことになる

「うーん、まだお腹いっぱいじゃないかな」

少女のほうもシスターに同意するようにうんうんと首を縦に振るファミレスの客たちも何時しかどれくらい食べられるんだとドン



ドン野次馬が出来ていった

ファミレスの店員も 流石の光景に頭がイカれてしまったのか闘志を燃やし

次々料理を作りは出しを繰り返していく

少女とシスターの進撃が止まったのはファミレスから食材が無くなったそのときであった

「ふう、貴女のお陰でお腹一杯なんだよ」

そのシスターの言葉に良かったと言わんばかりにニコニコと笑う少女

因みにお金はキチンと少女が全額一括払いで払ってある

勿論現金で、少女の懐から束が3つも出てきたときは客も店員も度肝を抜いた

すっかり仲良くなってしまった二人

少女は喋らないものの、シスターは何とか意図を汲み取り話を続けている

少女が喋らない理由は既に何とか身ぶり手振りでシスターに伝えてある

「貴女も苦勞してるんだね。喋っただけで力が発動するなんて、魔術にも似たようなものがあるけど、そこまで強力なものじゃない」

へーと、少し興味を持ちつつ話を聞く少女

魔術云々は既に聞いた話だが、少し半信半疑

それでも魔術の一端に触れていたことは確実なのだ。シスターの持つ少女が直した修道服は来ているだけで絶対的な結界を張ることが出来る魔術的な防御結界らしい

そのくらいなら自分にも出来ないことはないからと、そのため半信半疑だ

「うん、そろそろ私は逃げることにするんだよ。ご飯ありがとうなんだよ!!」

バイバイと手を振ってその場から走ってどこかへ行くシスター

その走りを少女が止める理由は特にはないためそのまま見逃す

しかし、待てよと少女は考える。シスターが被っていたはずの帽子

は一体何処へ？と考える、一度ファミレスへ戻り探すがどこにも見当たらない

このままではシスターが困ってしまうのではないかと少女は考え、シスターが走っていった方向へと自身も足を進める

△▼△▼

また、少女は1つの路地裏へと足を運んでいた

今朝の路地裏とはまた、違う場所

違う路地裏と言えど路地裏の景色などよつぽどのがなければ変わらないだろう

そして、この路地裏は、よつぽどのがあつたんだろう

大きく何かに斬り割かれたように、薄く細く壁が切られている

少女は何かがおかしいと考えて、またシスターを追いかける

△▼△▼

「チツ、何てことだ。まさか結界が破られていようとは……何があつてあんなこと」

ジーンズの片方を、自身の足を見せびらかせたいのかと思うほどバツサリと切り、わざわざ服を結びお腹を露出する変態チツクな格好をしている彼女は、シスターを襲った張本人である

「はあ、仕方ありませんね。今はこんなことをしている場合ではありません、怪我なら治せばいい」

先に行ったあの神父と合流しようとする今すぐにその場から移動しようとした。そのときだった

「ひかり」

眼前で強い光が焚かれる

唐突なことで避けきれず目を焼かれてしまう

「ぐうっ、チツ。誰だ!!」

少女は喋らない。能力が使われてしまうからではない、少女自身が怒っているからだ

きつと少女は産まれてここまで怒ったことが一度もないだろう

何故、ここまで怒っているのか

それは一重に『友人』を傷つけられたからだろう

ご飯と一緒に食べて、話せばそれはきつと友人だ。そうやって少女は教わった

あの友人であるシスターも既に見つけてある。今は正義のヒーローが彼女を助けていることだ

「くっ、姑息な真似をしやがって!!」

「きよっこう」

少女の周りから白い光が光線となって女へと襲いかかる

それを目を焼かれながらも、全て避け続ける女に少女は驚愕する  
するはものの、攻撃の手は止まらない

次へ次へと、光が襲う

全て何なく避け、女はその腰につける刀へと手にかける

少女は抜けるはずもないと思惑から刀を追いやっていたため、まさかの不意打ちに

動きが止まる、瞬間少女の右側に空気を切り裂く音と共に少女の腕が宙を舞う

「ぐっ、うっあっ……ふー、ふーふーっ!!」

声を大きく叫ぶ筈だったであろうところを、寸のところでギリツと噛みしめ

叫ぶのをどうにか止める、飛んでいった腕を拾いに行く暇はない、このまま迎撃しなければ死ぬと、幼いながらも分かっている少女は冷静に息を荒げながらも敵対する相手を見る

「目を潰すとはやりますね。だが、そんなものは関係ない、あとそろそろ目も治ってきたところです」

「……………いどう」

少女は即座に逃げることを選んだ

瞬時に別の場所へとテレポートし、その場で座り込む

腕があつた場所から大量の血液が零れ落ちて少女の服を濡らす

額から汗を滴、目もどこか虚ろ

少女はとにかく傷口を塞ごうと、そう思っていたがここで傷口を塞げば腕が再生不可能になる

「……おわり」

少女はとりあえず応急処置として傷口を凍らす

このままでは壊死する可能性があるため、早く腕を回収しに行かなければならないと考えて、すぐに立ちあがり歩き始める

次は絶対に勝てるという意思を持って

その顔は狂喜的に笑っていた

△▼△▼

コツ、コツと暗闇から足音が聞こえる

正体は、少女だ

先程の女を見つけてニタリと笑う、すぐにもう1人誰かが居ることに気がつく

住人だった、お人好しな住人は敵と敵対している

だがしかしと、その女を自身の獲物だと

住人を無視して女の前まで歩いていく

「ビツクリですね。まさか私と戦っていたのが貴女のような子供だったとは」

「……………」

聞きようによっては煽りにも聞こえるその台詞を少女はあえて聞  
く

「ちようど良かった。私とて、ずっと人の手を持っているのは苦痛で  
す」

女が投げ渡したのは少女の斬られた腕だった

斬られていない腕でそれを受け取り、すぐに自身の傷口の氷を溶かし、腕を本来あるところにくつつける

「しゅうふく」

「ツ!? 貴女、人間ではないですね」

ピクリと少女はその言葉に反応するものの、それ以上の反応は見せ

ない

それは自分自身が良く分かっていることだからだ

「かぜ、ひ」

轟ツと炎が女へと当たるが、鋭い音が聞こえたと思うと、炎がかき  
けされ無傷の女がそこに立っていた

「子供と言えど油断は出来ませぬ……」

「みず……たいりよう」

大津波かと思えるほど、少女の背後から大量の水が女へと襲いかか  
る

「それが何だと言うのです」

「こおり」

少女が一言そう呟くだけで、大量の水が瞬時に凍り、女の四肢を止  
める

「チツ、面倒な」

無理に凍った体を動かそうとしている

それを少女が許すはずもなく追撃をかける

「みず」

先程よりは量が少ないものの、突如現れた水は女へと直撃する

「チマチマと小癩な」

「こおり」

女へとかかった水は少女の一言でまた凍り女の動きを確実に制限  
していく

少女の顔は今朝見せた花のような笑顔はなく淡々と物事を運ぶ機  
械のように無表情である

流石に女も、それに寒気を感じる

ただ単に自身の体温が急激に下がったためというのもあるだろう  
が

動けない女を見て少女は一人、暗闇の中でニヤリと笑っていた

## T o L o v e r

昔々、ん？やっぱりそれほど昔じゃなかったな。

在るところに平凡な青年がく居ました。

その青年は特に何かスゴイという訳ではなく。

ん？イヤ、1つだけ不思議な力を持っていました。

その不思議な力を持った青年は17歳で若くして亡くなってしまいました。

不思議な力を持った青年は不思議な力を持っているにも関わらずうっかり、うっかり（大事な事なので二回言いました）死んでしまいました。

何故死んでしまったのか、それは今語るべきでは無いだろう。

え？面倒クサイからだって？またまたくそんな訳あるわけ無いじゃないですか！

今世で自身の命が尽きてしまった青年は不思議なことに他の世界へと産まれ落ちたのです。

え？何番煎じだって？その所は気にするな。

まあね異世界転生だよね？

あるあるだよね、定番だしね。多分。

まあつまりその青年はまた赤ちゃんとして他の世界で産まれることになったのです。

原作知識？それは何処の世界に行くかによってでしょ。

ああ、俺は知らないよ？そこまで面倒見きれないよね？

ってことで頑張ってね？

ここから一人の青年のトラブル続きの物語が今始まる!!

あ、申し遅れました。私転生の神です。  
今回先程の青年を他の世界へ送り出した本人です。  
ここからはあの青年の物語をお楽しみに!!

ある世界線の日本に一人の青年が産まれ落ちた。  
その世界の日本は少し何故か不思議な所であった。  
そしてその青年が産まれ十数年が経った。

どうも俺がその青年です。

イヤア、あの適当な神には1発入れてやりたいね。

俺の名前は東郷 凌久だ。因みに読みはとうごう りく。  
名前等は前世と一緒にだったりする。

今は中学三年生で、受験生である。

そう、受験生である。大事な事なので二回言いました。

こんな自己紹介みたいなことしている暇なんて無いのだ。  
さっさと勉強をしなければいけない。

とらうんども……………

「ハイ！きつさとやる！勉強の終わりまで後十分だぞ！頑張れ！」

「お、おう」

さてさて、何時から俺が勉強すると錯覚していた？

今勉強をしなければいけないのはコイツだ。

俺？俺はそこまで問題は無い。

成績はそこそこ良い方だから問題が無いのだが、この俺の唯一の友人とも言える人物 結城 リト。

コイツが今1番問題なのだ。

中々に偏差値の高い高校に急に進学すると言い出したので現在必死に勉強をしている訳だ。

まあなんでその高校に進学しようとした理由は解るが。

「ハイいしゅーりよー。そこまでだ。お疲れさん」

「ああー、やっと終わったあー」

「今日の勉強が終わったからって復習は怠るなよっ」

「ああ解ってるよ。今日はありがとう」

「俺は一回美柑ちゃんと話をしてから帰るから」

「おい」



「何？」

「家の妹はやらないぞ」

「貰わねえよ！話していくだけだよ！」

このシスコンは、小学生に手を出そうとは思って無いよ。  
確かにTOLoveの内では好きなキャラだけど。

そういえば原作知識はありますよ。

前世の記憶はそこまで無いとかほとんど消えかかっているけど。

「お疲れ〜リクさん。何時もありがと〜」

「この位ヘッチャラだよ。あと、前みたいにリク兄って読んでくれるのも良いんだぞ？」

「ええ？別に良いよ。私ももうそんな年じゃないし」

「ああそう？別に良いけど。美柑気付いてる？たまに俺のことリク兄って読んでるんだぞ？」

「ウソ〜！本当に？」

「本当に。まあ俺はそんな美柑が可愛いし役徳だから止めないけどね」

「ちよつと気持ち悪いから止めてくれない？」

「辛辣!!」

昔はこんなじゃなかったのに。およよ。  
俺の家まで来て遊んでって言って来てたのに。ういうい  
心のなかで泣き真似を試してみる俺氏。

「とりあえず今日は帰るよ。色々俺もしないといけないことある  
し。何かあったらすぐ俺の所に来るんだぞ？」

「うん、わかってるわかってる。またね」

「またな。お邪魔しました〜」

「はーい」

美柑と他愛ない話をした後、結城家を出た。

家を出たって言っても俺の家結城家の隣なんだけどな！

「ただいまー」

俺の声がかのただ虚しく響き渡る。

はあ、家に誰も居ないってやっぱり少し寂しいな。  
やはり家には誰か居てほしいものだ。

因みに俺の両親は仕事の都合上現在別の場所で住んでいる。  
俺は高校生になるのところが気に入ってるのでここで一人暮らし  
している訳だ。

ああ、言い忘れてたけど俺には日課がある。  
日課といってもそこまで体したとじゃない。

俺自身の力の練習というかいつでも万全の体勢で居られるように

するためだ。

今からいくのはこの家の地下なわけだが地下が何故あるのか、そこから辺は能力でパパッと創ったわけなので気にしないでね？

地下に着いたので早速始めましょう!!

まずは俺の力の説明から!!

俺の力は何と! ななな何と!

自分が想像した通りに物を想像したりできるのだく!

ね? 便利でしょ?

デメリット? デメリットかく、精神がスゴく安定してないと使えないくらいかな?

今のテンションはまだ大丈夫、というかこれくらいじゃないと上手く扱えない節まである。

力については両親には言っていない。

妹には言ってるけどね。

今回することは創造した武器がちゃんと使えるかだ。

あ、俺のメイン武器は無いけど最近は銃もしくは弓矢とか使ってる。。

俺にも妹が居るんだけどソイツも銃の使い方が上手い。

え? お前の脳内の妹じゃないかって? ちゃんと居ますとも!!

え、居るよね作者さん?

『メタいから止めてくれない? ちゃんと居るから』

あ、ほら! ね? ちゃんと居るから!

ご、ごほん。今はそんな事言ってる場合じゃなかった。

とりあえず武器を生成。

そして的も生成。

玉はちゃんと入ってるね。

OKOK。

ほい、射撃用意。

始め！

パパパパパパパパパパパパパパパッ!!

ほうう良いね。このサブマシンガン特有の連続音!!

しかも相手に撃てば下手でも当たるんだからそこも良い感じ。

次はゴーレムで試すか、俺の場合力が強いだけで体は他の人と同じ強度なのだ。

なので戦法はヒット&amp;アウェイだけ?それかゴリ押し。

この2択に限る。後はメツチャ固い壁だして少し穴あけてそこから銃で撃つとかね?

他にも色々あるよ?ハメ殺しとか。

まあ今は気にしない気にしない。

さあ行くぞー!!覚悟しろーゴーレムめー!!

ムハハハ!!

数時間後

「ふう、やりすぎちまったじえー!!」

さて、今日はここで終わりにして寝よう。

だって時間が無いんだもん。  
作者が

## 深夜廻

暗く何もかもを食べ尽くしてしまうような

真っ黒な世界

そこは 何もなく 人は居らず ただ醜くあがき 生にすがろう  
とする者たち

一つ一つ 思い思いの 自分を持ち 暗闇を跋扈する

その身が黒く染まる鳥でさえも

食べてしまう

キリキリキリ きつと何か 見つけられる

ガリガリガリ きつと全て 忘れられる

ここへ来れば きつと きつと きつと

だから ここは溢れる

溢れてしまうのだから それは消えてしまう

喉が乾く その実を砕けばいい

腹が疼く その実を喰らえばいい

仕方ない しかたない

バキバキバキ 全てがおかしい

ポリポリポリ 全てが狂う

狂って 何も見えなくなる 真っ黒な世界は道さえも喰らってしま  
う

何故 ここにいる なぜ ここにきた

なん度も なんども 何 んども

おじさん きよう ノ ちようしは どうだい

おねえさん きようは どうした

ねずみ も はしる

ちりも つもれば やまとなる

あた あたまたが おかしい

わらってしまふ なぜ わらって しまふ

おかしい きつと おかしい  
みずが たれてる

あめ が ふった

ひとは ぶつかる おおきな かべ

いたい どうして いたい

ぶつかる から だから いたい

なんで いたい どうして いたい

かべ は ほんとうに かべ

わらって しまう あきれた わらえ

おおきく おおきく わらえ

ここ は しずか に

はしって は だめ

おこられる なんて おこられる

おこられる いや なんて

きえる いたい あふれた ものは

まもれ るーる

ぴかぴか ねむれ れいは ねむれ

また あした

おんな ノ こ はしる

くつ ヲ ならす

なんで はしる どうして はしって

でも はしって やっぱり はしれ

おかしい でも おかしい

まわれ まわる

きこえる おと

きえる あふれた もの ハ しぬ

あふれて ない もの

あばれ あばれろ

しぬ しぬぬ

しぬヌヌヌヌヌヌヌヌ ねえ しぬ

しね きえろ ころ せ

わらえ わらえ おおきく わらえ

ほえろ わんわん ほえって

ないて にやんにやん なえて

ば ばか バカ みた い

おかしい きつと おかしい

おんな ノ こ はしる

また はしる なんて

なんで はしる？

おかしい おかしい おかしい？

おかしい でも おかしい だけど

おかしい!!

ハハハハは おおきく わらえ おおおお き く

わら

えない わらい たく ない

わたし ハ おれ おれおれ わたし？

わたし でも おれ

おれ おれ はしってる

おんな ノ 子 はしってる

なんで なんて みんな はしってる？

おいかけっこ おいかけっこ おに ごっこ

おれ おに おれ おに？

おに おれ？ はし る？

え は しるるるる？

るるるる?? わらえ

るるる わらえ

る わらえ

わらえ

わらつえら わ

「ききききききききききききッ!!」



「やめて ——— に ——— され たくない ハーを 探さ  
なきや いけないんだから」  
る？ るるるるる？ ルル？  
ハル？ さがす ハル さがす どうする さがする  
くだく きる ちぎる なげふ わる えらぶ  
たべる はる たべる??  
女の子 食べる？？  
喉の 乾きは 消えた  
腹の 疼きは 消えた  
また あめが ふった

## ポケットモンスター ソード・シールド

「今回のチャレンジャーさんは見応えありそう。ねえヤタさん」  
「ガア」

スマホロトムで今回のチャレンジャー達を閲覧して、自身の相棒のヤタさんことアーマーガアに話しかける。

「おっと、お客様すみません。こちらで盛り上がってしまつて」

「いえ、大丈夫です……しかし、ここには他の人は居ないのですから他人行儀でもなくてもいいのでは？」

「いえいえ、私は仕事中の身ですので」

「そうですか……いえ、貴方らしいですね」

「ええ、まあ。私もヤタさんもこの仕事に誇りを持っていますので、ああ勿論そちらも頑張つてやりますとも、私は今回メジャーじゃなくて、マイナークラスに落ちてしまったので、マイナー組のオニオンくと傷の嘗めあいでもしながらお客様を応援していますよ」

早口で捲し立てるように喋る。

それを聞いているお客様は些か呆れているような顔をしている気がする。

というより、呆れてますねこれ。

「……落ち込んでますか？」

「……別に」

「グアー……」

「な、なんですか!?!そのため息を吐いているような声はっ!?!」

「貴方自身より、よっぽど相棒のほうが素直ですよ……?」

「あう……悔しいですよ。悔しいに決まってるでしょう!?!」

「それにしても、貴方がマイナー落ちするとは考えにくいのですが……どうした理由が？」

「え、えくとそれは」

額からつう、と汗が流れ落ちてくる。

「まさか……?」

「べ、別にタクシーの仕事が楽しくて忙しくてメジャー決めの戦いを

ほったらかしてた訳じゃないですけどお!!」

「はぁー、全部言ってますよ」

「だって……」

むしやくしやする。イライラする

確かに？私が悪いですけど？

でもでも、だってですよ？タクシーの仕事が楽しいんですもん。ポケモンバトルもそりや楽しいですよ？

でも、私の戦いかたには華がないですし、知略も少ない。

主にゴリ押し、それでもヤタさん達が強いからどうにかなってますけど……勿論こんな戦いかたでは観客の支持は得られません。

圧倒的な力で押し伏せる、そんなものは何れは飽きられるのだ。

「あゝ、お客様ももうそろそろ目的地ですよ」

「何を拗ねているのですか……そうですね、明日は私は用事がありますせんし久しぶりに二人で甘いものでも食べにいきましょうか？」

「マジですか!?明日は……仕事……です……そんなバカな!?!」

「どう、しましょうか？予定をずらしますか？」

「いえ、有休を取ります。まだまだ、有休は余ってますし」

「そこまですることですか……?」

「だって、久しぶりに二人で遊びにいけるんですよ?楽しみですよ」

「それは……とか言いながら、甘いものが楽しみなだけでしょう?」

「バレましたか……でも、楽しみなのは本当ですよ」

「はあ、貴方って人は……」

「さて、着きましたよ。今回もご利用ありがとうございました。お代はこれほどになります」

「はい、それでは……御釣りは要りませんチップとして受け取ってください」

「うちではチップは受け取らないようにしてるのですが……仕方ないお客様ですね」

「それではまた明日」

「ええ、また明日」

## オリジナル③

—— 死んだ、死んでしまった。

—— 後悔しかない、こんなにも死が早く訪れるなんて思ってもみなかった。

神様、本当に神様が居るなら。どうか、どうか……生き返らせてください。

あの人と、まだ一緒に……生きていたい

短い命だけれど、それでも……その命の灯火が消えるまでずっとずっと……一緒に生きたかった。

ああ、ごめんなさい。きつと、自分のせいだ。ごめんなさい……あのままで巻き込んでしまった。

ああ……なんて最後なんだろう。



朝は早めに起きて、朝食を食べる。

自炊なんて出来ないから、長持ちするパンを買っておき、それを口に啜えながら服を着替える。

パンを食い終われば、荷物を持って家を出て近くの井戸で水を汲み、顔を洗い口をゆすぐ。

そのあとはギルドへと小走りで走っていく。

これが、俺の新しくなった日常だ。

なんて、前世では異世界こんにちはと言わんばかりのトラックに轢かれてしまったが。こうして見事に異世界へと転生を果たした。

ギルドの中へ入ると、クエストが貼られる掲示板を覗く。

正直、俺は強くない。なんで、簡単なクエストを探してそれを受ける。クエスト報酬は少ないが仕方ないだろう。

「薬草回収にキノコ狩り、それに小児の面倒。この3つは全部一緒に受けられるか……すみませーん！このクエスト受けたいんですけどー！」

さあ、ここから俺の冒険が始まっていくのだっ！



まずは森へと入り、地道に薬草とキノコの回収。

毒キノコ以外の食用キノコと、出来るだけ品質のいい薬草を手にする。品質が上がれば上がるほど後の報酬金も高くしてくれるみたいだし、採れば採るほど儲かるとは実にいい仕事だ。

それでも、元々が安いんからたいして儲かりはしないのが事実なんだけど。

「もっとお金が欲しい。あー、強くなりたい。異世界転生したならもっとチートとか？特典とか？俺に渡してくれてもいいんじゃないんですかねえー？」

くそつたれがっ!!誰が嬉しくて草とキノコを回収せにやならんの

だ」

「ブツブツとまあ、俺自身も口が良く回るものだ。

はあ、異世界に転生したらまずはチートとか秘められし力とかか。そんなので活躍してハーレムとか作れるはずじゃないのかよ……あーあ、ガツカリだよ。

「はあ……今日はこれで終わりにして帰ろ。なんか虚しくなってきた。泣きそう……はあ」

ギルドの受付へと薬草とキノコを渡し、身体を綺麗にすれば今日最後の仕事だ。幼児の面倒という非常に面倒な仕事なのだが……ああ、報酬金が高いからって受けなきや良かったか。

目的地に着くまでも、陰鬱とした気持ちで歩いていく。

まあ、着いたら着いたで更に気分が沈むのだが……。

「なにこれ、金持ちかよ。金持ちが冒険者ギルドに子供の面倒をクエストとして張り出すなよ……マジクソ」

鎧を来た護衛らしき人に、クエストの張り紙を見せて中へと入れてもらう。

しかし、この装飾品を持って帰って売ればお金がどれだけ入ってくるのだろうか。俺の一月の稼ぎより倍ではあるだろうな。

「失礼します。クエストを受けた冒険者ですが、依頼人様はいらっしゃいますでしょうか？」

うーん、シーンとしている。えっ？居ないの？人柄居ないの？呼び

出しておいて？クエスト出しておいて？依頼人が？居ないの？メン  
ドクセエー!!

「はあ、帰ろかなあ。家に帰って寝たいよ。」

あー美味しいものでも沢山食いたいなあ……俺の稼ぎじやあの  
カツタイパンくらいしか一生食えないか。

はあ、世界は理不尽だな。」

そのあとは勿論ノコノコと帰り、家で寝た。

途中護衛の人が睨んでいたけど……依頼人がいない状態で依頼が  
遂行出来るかっての。

勿論後日、依頼人はギルドへと来てクエストを受けた俺を怒鳴り付  
けた。知らねえよバカ、それなら居ろよ。内容くらい言ってから用  
事へ迎えよ、子供と顔合わせくらいさせてくれよ。誰も居なかった  
じゃねえかよ。

依頼人の子供は依頼人と一緒にいた何てそんなことはなく、普通に  
家の中に居ただけど人見知りが出てこなかっただけらしい。

つまりは、なんだ俺自身の確認不足だったらしい。俺は罰としてク  
エストが一週間ほど受けられなくなったとき。

「受けられなくなったとき……じゃねえよクソがつ!!ギルドなんてク  
ソツタレだよ!!ああもおおつ!!嫌だあああつ!!こんな仕事や  
だああつ!!」

「はいはい、泣き言言つてないで……俺もやだあああつ!!こんな仕事  
俺もしたくねええよおつ!!」

「わかるうつ、本当に共感する」

「同士よ……」

ギルドへの鬱憤で、昼間から酒をよく遊ぶ友人と飲みながら二人で傷の舐めあいをしている。

ギルドのあれが嫌だ、それが嫌だ、これが嫌だなどと口を開けば悪口ばかりである。

途中、冷静になって何を言ってるんだと落ち込んだりするのだが……。

だがそこは酒の酔いで無理矢理テンションを上げる。

「はあ、本当にさ。こんな筈じゃなかったんだよ。」

チートでハーレムとか作ったりとかしたかったんだよ、なに？最近どっかで勇者様が魔王を倒すなんて言ってるらしいじゃないですか？どうせアイツだって転生者なんだよお……。へっ、俺とは違う人生で羨ましいよな本当にさ……クソメ」

「そうだそうだ、お前が何を言ってるのかサツパリだがその通りだな。どうせ毎晩毎晩、仲間の女抱いてるぜ？羨ましいなあ、俺も美女の嫁が欲しい」

「わかる、本当にそれな」

「だよなだよなー、って、もうこんな時間か。流石にこれ以上は明日に響くな……」

「うえー？もっと俺の遊んでくれよー、明日から暇なんだよークエスト受けられないんだよー。死ぬなコレ、俺餓死して死んじゃうや、チクショウが」

「俺も余裕ないから。お前のこと養う暇ないから。じゃーな。今度会うときはお前の墓かもな」

「冗談になってねえからなあーっ!!……はあ、俺も帰るか。マスター、お会計ー!」



「あー、気持ち悪い。飲みすぎた、吐く。吐いちゃう、うぷっこれはヤ



「おい、外に出ないと。家で吐瀉物撒き散らしたくない……あつ、ヤバ  
い来る……っ!!」

「おっ、おええ『大変画面が乱れております。少しの間綺麗な花畑をご  
想像ください』」

「うえ、死ぬかと思った。結局家の中で吐いた……ヤバいもう限界来  
てる。寝よ、もう寝る……」



「ご主人様、ご主人、主様、主、飼い主?だ、旦那様なんて……。こ  
れはダメだ恥ずかしい……」

「何て呼べば良いだろう……ずっとあの人だったから、なんて呼べば  
いいか、わからないや。」

「うーん。ドキドキしてきた、大丈夫かな?怖がられないかな?気  
持ち悪がられないかな?不安になってきた……」

「いやでも、優しいしきつと受け止めてくれる……答

「……、かな。すみません、誰か居ますか?」

「コンコンとノックをして家の中に誰か居る尋ねてみる。」

「返事がない……誰もいない?留守?そんな訳はないと思う……け  
ど。」

「あつ、鍵開いてる。無用心……でも、今は好都合？失礼しまーああつすうつ!？」

何か液状のものを踏んづけて、そのまま尻餅をついてしまう。

な、なにコレ。スンスン、わあつ!?!ゲロだつ!!

さ、最悪だ、しかもよく見たら家のなか汚い……た、耐えられない。

家のなかに居るかわからないけど。私がこれを片付けなくちゃっ!



「あ、ー頭痛い。二日酔いだ、飲みすぎた。気分悪い、また吐きそう、死ぬコレは死ぬ。一週間たたなくても一日で死ぬ、死んだ」

痛む頭を押さえつつ、とりあえず何か食わなければ吐こうにも何も出てこない。

うちに何があったか……遠方から取り寄せた米があつたな。使わずに起きっぱだつたが炊いてみるか？

いや、無理だなこんな状態でしたら米に吐く。その自信がある。

「あれ？何か家のなかからいい匂いがする。何故？しかも家のなか綺麗？なんで？なんで？空き巣？俺が居るのに？盗むものもないのに？は？」

とにかく匂いの元凶の元へと、匂いを頼りにして向かう。

クンクンと、目的地に近付いていくたびに匂いが増していく。

こんな、いい匂いが家するのは何時ぶりだろうか？

いや、初めてだわ。初だった。

どうやら、この一室からするようだ。この部屋は、そういえばついでに使うことはなかった、キッチンだったか。

チラリと覗いてみ……覗いてみ……見てない。俺は見えてない。キッチンの前に犬が倒れてるのなんて見てないし、しかもその犬が前世で飼ってた犬に似てるなんてことあり得るんでしようねそうなんでしょうねわかりますよ。

覚悟を決めて、犬のもとへ。確実にうちで飼ってた犬じゃん。顔とか体型とか全く一緒じゃん。

なんで、ここにいるんだとか。全くわからん、名前呼んでみるか？

「フウ？フーウ？起きろく、ご飯だぞく」

『ご飯』の部分に反応したのかパチリと目を開けて。ジロリとこちらを見てくる。なんだ、なんかこの犬め。可愛いやつめ……うり、うりうりなんだなんか言ったらどうだ。

愛犬の頬を人差し指で突っついて不細工な表情になっているのを楽しむ。

ハハハハ、日々のストレスが解消されていく気がする。やはり愛玩動物はセラピー効果があるんだなあー

「ガブリ」

「ガブリ？ガブガブ？……いったあつ！おつま!?何してるんだよ!?痛あつ！いつもの甘噛みじゃないガチやつだ。いつもこんなことで怒らなかつた癖に、なんだよ俺がお前になにしたんだよおー」

少し出血している手と二日酔いで痛む頭をを労りながら、犬の様子を見る。

なんか喋ってよ。

「なにしたって、私が入ったらゲロを踏みつけた気持ちかわかる

んなら文句を言ってもいい」

「……………ワツツ?」

おおっと、どうやら日々のストレスと酒の飲みすぎで幻聴が聞こえた気がするぞ?」

わからない英語が飛び出てくるほどの衝撃だね?」

「わからないかな? 罪悪感を感じて只管私は探して探して探したというのに、見つけた先はゲロまみれ? そりゃ温厚な私だって怒りますともガチガブガブしますとも。愛しい愛しい私の飼い主様であろうとも、そりゃガブガブしますよ」

「んー、んー、んー。とりあえず、黙ってくれるかな。どうやら俺の頭はイカれちまったようだ」

「なんか腹立ちますね。そうですか、そーうーですかー! そういう態度とるんですね。ああ、わかりましたよ。じゃあこの姿でも見せれば納得するんですかあ?」

うちの喋る愛犬(仮)が光を纏っていく。進化でもすんのかな?

「ふう、これでどうですか。少しは話しやすくなったでしょ」

「知らない人がうちにいるうっ!! 変態不審者の痴女だあっ!!」

「そ、そんなわけないでしょ! ほ、ほら、貴方の忠実な可愛らしい愛犬のフウですよ? ほらどこからどう見てもそうでしょ?」

「あーっ、大声出さないで頭に響く……………」

「自分でも散々騒いでおいて!?!」

「それが俺だ…………痛たた、本当に痛い。」

んで、本当にフウさんですかね? うちの犬は擬人化したり喋ったりするファンタジーギミックなんて搭載してないんですけどそこんところ詳しく話してください。

出来れば手短にお願ひします」

「ほんとに本当に、貴方のフウさんです。証拠言うならば、私の人間の姿になったのを妄想してトイレでじかはつで「ぎやあああああつ!!」……自家発電していたこととか」

「なんで?! ねえなんで?! 人が遮つたのに普通に言い直すの?! 殺したいの? ねえ俺のこと殺したいの? このおにちくうつ!」

「……正直、あれはさすがの私でもないわーと思いました。だってねえ? 飼い犬の擬人化状態の妄想で抜くとか……あらやだ、うちの飼い主ヤバい人だったのでは?」

「止めてくれ、それ以上は止めてくれ……わかったわかったよ。認めるからもうそこらへんの話をするのは止めてくれ」

「やったです。ところで飼い主」

「はいはいなんでしよう飼い犬」

「ご飯作ってるんですけど。食べます?」

「食べます」

疑惑とか困惑とか、そんなものより食欲だった。

「こんなに暖かくて美味しいご飯は何時ぶりだろうか。うみや、うみやうみや」

「私も……もぐもぐ……久しぶりに……まぐまぐ。暖かいご飯を……もしゃもしゃ……食べます……くちやくちや……ね。」

「喋るか食べるかどっちかにしろよ! クチャラーかよ、うるさいなつ!?!」

「コレは失敬。ほら、私つてば元が犬ですし、食べ方が汚くても仕方ないと思いませんか?」

「それもそうだと言うと思ったかバカめ。飯くらいちゃんと食べよ」

「家のなかでゲロ吐いてなに言ってるんですか」  
「すみませんでした」

飼い主は飼い犬には勝てないことが、今現在証明された。証明されてほしくなかった案件である。

「んぐつ、ところで家を綺麗に片付けてくれたのって？」

「勿論私ですよ。前から飼い主は掃除するのが苦手でしたよね、部屋のなかは散らかりっぱなし……と思えば自分が大事なものは綺麗に整頓、典型的なクズでは？」

「クズは家をゴミ屋敷にするのが得意だったんだね。初めて知ったや」

「なに言ってるんですか。殴りますよ」

「やだ、うちの飼い犬ってば暴力的？こわーい」

「本当に殴ってやりましょうかねコイツ」

「まま、落ち着いて」

「誰が……そうですね落ち着きましょうか」

「よろしい。それでは今から質問することに手短かに答えよ。いいかね？」

「はいっ、わかりました」

「いい返事だね。それじゃあ1つ目の質問、なんで君はキッチンの前で倒れていたんだい？」

「お腹が空いたからですっ」

「そうかね。いつものことじゃないか……次の質問だ、何故君はこの家がわかったんだい？」

「探し人を見つけてくれる不思議な石で地道に探しました。12年ほどかかりました」

「それはぐ苦勞様。そこまでの執念、気持ちが悪いですね。次の質問、なんで人間になれてるんですか?」

「はい、私と飼い主が死んだあと私は神様に転生させてもらえることになりました。その際に転生特典として何がいいと聞かれたので、じゃあ飼い主も一緒に転生させて欲しいと言いました。後悔しかしてません」

「ふあ?え?なに?俺ってば、俺自身が転生させられたんじゃないんで、俺が飼い犬の転生特典として転生させられたの?意味がわからないんですけど」

「因みに私は、他にも身体能力上昇に、人化スキル。全魔法属性適正、体が丈夫になる、神様からの特別な武器の神器を貰いました」

「チートかよっ!!俺って言う素晴らしい特典を貰ってるのに!?それでも更に特典貰ってんのかよ、死ぬ!!ファツ『大変画面が乱れております』……はあはあ、全部言い尽くしてやったわ」

ゼエゼエと息を切らしながら、うちの愛犬改めチートクソ犬を睨む。

「そんな眼で睨まれても。フツ、雑魚め」

「あああああああつ!うあああああああつ!!死ぬええええ!!クソガアツ!!」

頭をベットの枕へと叩きつけて、鬱憤を晴らす。

そりやお前、チートで最強なフウ様に暴力で挑もうものなら俺が死ぬ。まだ死にたくないんじゃないか。

「マジで世界は理不尽だと、そうは思わないかね?」

「私はこれで正解だと思います」

「どうして……俺にはチートがないんだよ」

「ちよつくら魔王シバいて来ますね」

「そんな気軽に、じゃあコンビ二行ってくるよ。みたいな軽いノリで魔王倒そうとしてんの?!」

「だって私と魔王、友達だし。親友だし、もう言うならレズカップルだし」

「ンンンツ、まさかの新事実。とともにまさかの魔王様が女性」

「勇者様は雑魚そうだったよ」

「うちの飼い犬に負けてらぶぎやあつ!」

「交尾は1日三回はしてた」

「死ね!!リア充とハーレムはもれなく死ね!!非童貞キサマ等に命などないっ!消え去ってしまえ!ヤリチンどもが!」

「ワロス」

「笑ってんじやねえよお……ちくしょう、なんでだよ」

「前世での行いが悪かったからとかじゃない?」

「そ、そんなまさか私みたいな聖人君子ほどこにもいないでしゅしゅ?」

「神様が、『ああ、アイツ?徳が足りんよ。クソ人間、転生はムリ』って言ってたよ」

「お前がクソじやあ、ドクサレ神があつ!!」

「あつ、神様から神託が……」

「すみまつせんでしたあつ!!ごめんなさい、聞こえてないだろうと思つて強気に出ちやいましたあつ!!」

「嘘ですけど」

「はははあつ!!どうだ見たか!!神よ!!俺の勝ちい!!神様の次回作にご期待くださいいっ」

「うるさあああああいつ!!」



「ひよえっ!？」

神々しい、鬱陶しいほどの光と共に現れたのは幼女。わあ、神様つて幼女だあ。神様なんか知らんけど。

「さっきから聞いとれば、ピーチクパーチク文句しか言うたらん。フウ君も少しちゃんとこの愚図にもわかるように説明してあげなさい！」

「なんで俺、見ず知らずの顔も会わせたことない幼女にデイスられないといけないの?」

「これはすみません神様。うちの愚図でクソでカスなバカ飼い主が……」

「んむっ?」

「いや、良いのじゃ。コイツが世界最高レベルでクソなのは分かっている」

「この幼女どうしてくれようか……俺、なんだかんだ言って初めての殺意かもしれない」

「だあつとれえいっ!!いいか!愚図!」

「なんすか幼女」

「舐め腐った態度を取りおつてえっ……いいか、私がフウ君をお前と共に転生させたのは理由があるからじゃ」

「共について、スタート地点バラバラでしたけど」

「黙れ。いいか、この世界はいま危機に瀕しておる」

「魔王のせいだ?」

「違う。どちらかと言うと魔王は強力関係にある。言ってしまうが、敵なのは勇者の方じゃ。お前みたいなドクサレクソ野郎が、神の祝福を得た結果がああ汚物オブ汚物じゃ」

「わあ、酷い言われよう。ざまあ」

「お前も本当に中々にクソじゃな……とにかくじゃ、何故かいまこの世界の魔力が消えかかっている。私達神は、何者かによって魔力を収

集まれ、蓄えられておると考えられておる。星規模の魔力なんぞが一ヶ所に集まれば、世界はボンツじゃ」

「ボンツ、おおう」

「わかったかの？だからお前たちに頼むのじゃ。承諾してくれるな？拒否権はない、はいありがとう。それじゃあ頼んだぞ」

「あの神、人に面倒事押し付けるだけ押し付けて行きやがった……なんと言うか愚痴を言う気力もないや」

「まあ確かに、ビックリすることではありますよね」

「本当に……はあ、考えても仕方ないな。こういうのは……とにかく色々と考えすぎた、今日は寝る。おやすみ」

「えっ、ああ、おやすみなさい」

頭を使いすぎたのか、頭痛がするが気にせず俺は眠るのだった。あつ、違うこれ二日酔いの頭痛だ。

## オリジナル④

仕事帰りの夜、度重なる残業の重労働の末に久しぶりに酒をたらふく飲んだ。

居酒屋、水屋、キャバクラ、酒が飲めるならどこでも良いと店をハシゴした。帰り際はまるで夢心地のような気分です元も覚束無いままフラフラと帰った

ここまではしつかり覚えている、しかし、しかしだ  
今現在のコレは意味不明だ。

俺の隣で幼女が寝ているなど可笑しい

俺は自慢できることでもないが、この歳で未だに童貞だ。

ここまで守り抜いてきた童貞をそこらの風俗やパパ活なんてものに捧げられない程には愛着もわいていた。

そんな俺に子供が居るわけもない、居るわけもないのだがどうしたことか……幼女が隣に寝ていた

しかも俺の腕に抱き付いてだ、ふう落ち着け我が脳よ

まさか、酔ったついでに幼女を誘拐したとでもいうのか？

あり得ない、あり得ない普通にあり得ない。あり得ないが、酔ったしなあ、あり得ちゃったりするのかなあ

俺はロリコンではない筈だ、どうせなら可愛い女子高校生でも……いや止めとこうこれ以上はアウトだ

どうして幼女が俺の家で、ベッドで、腕に抱き付いてるのか分からない

あれ？このままでは俺は犯罪者では？

よくよく考えれば非常にヤバい状況だ

ど、どうする!?!警察に届ける? いや駄目だ、絶対に捕まる

俺の見た目なんてただのオッサンだ、爽やかイケメンでもなければ  
幼女を連れたオッサンを警察が怪しまないわけがない

児童施設に預ける? 知り合いに見つかりでもすれば俺の社会的地位はドン底に落ちることもあり得るが、これが一番の最適解だろう

この幼女が起きる前に何とか場を納めなければ

騒ぎでもすれば近所の人にこれがバレてしまう。そうなれば俺は警察に即逮捕、お縄に頂戴されてしまう

そもそもこんな金髪幼女を一体どこで拾ってきたと言うのか、ここいらに外国人の家族が住んでるなんて聞いたことないし

ふむ、良く見ると可愛らしい。まるで人形のようなだ、透き通るような綺麗な髪、肌は白くまるで誰にも汚されていない初雪のようで………つて何を考えているんだ俺は、これでは本当にロリコンではないか

だがしかし、その柔らかかそうな頬は何とも触り心地が良さそうで

プニプニ、プニプニ

ハッ!?!何をしているんだ俺は!?!

駄目だ駄目だ、止まれ俺の右手人差し指よー!!

「ん、んう〜」

「ヒッ!?!」

や、ヤバい。非常にヤバい、このままでは起きてしまう  
瞼なんて今にも持ち上がりそうで……あつ、眼の色も綺麗

そんな風に眼の色に見とれていた場合ではなく、幼女の瞼は寝起きの為か完全には言えないが朧気に開き、そのまま辺りを見回して、そのまま前に真っ直ぐ目線を固定して、俺にそう言った……

「ばばっ!!」

アウトオオオオオオオオオオオオオオオオオオツ!!

「それで、その金髪幼女を家に置いたまま仕事に来たんですか?」

「仕方ないだろう、遅刻したらあの上司に何言われるかわかったもんじゃない。前に10秒遅刻しただけであることないこと社内にバラ来まくったんだぞ?」

そのせいで俺の社内の立場はどん底である、女性社員からは明らかに避けられてるし、男性社員からは酷いほどに仕事の押し付け等々、悪口なんて日常茶飯事である

そんな中で話し掛けてくる女性社員はこの後輩だけである

「あのときは大変でしたね、今も大変ですけど。それで?その子、どうすることにしたんですか?」

「どうするも何も、考え中だよ。どうしようもないだろ、酔って目を覚ましたら身許も知れない幼女が隣で寝ていましたよ、なんて」

「まるで何かのラノベみたいなお話ですね。中々ありませんよ?」

「こんなことが何度もあつてたまるイデツ!!」

急な頭の衝撃に大声を出してしまうが、こんな目に見えてハッキリと暴力を奮つたりするのはアイツだけだ……

「ねえ〜?中野〜?仕事は終わつてるのかしら〜?貴方が話をしてい  
る余裕なんて……:本当にあるの?」

最後の言葉はそれは肝が冷えるほどの低い声で問いかけてくる、と  
いうか命令だ

早く終わらせろということなんだろう

「ありません」

「そうよね〜?……ならさっさとするツ!!」

「はい」

「今日は何時にも増してイライラしてたね」

後ろからアイツが居なくなつたところを見計らつて隣の後輩がま  
た話し掛けてくる。コイツも叱られていたのに懲りないのだろうか  
?

「だなあ、これは今日も残業コースっぽいな」

「ですね、今日も付き合いますよ先輩」

「それは、頼もしいな後輩」

「ただいま〜つと」

「おかえりぱぱっ!!」

おっと、この幼女のことを忘れていた  
それにしても……………

「こんな遅い時間まで起きてたのか？」

「あつ、ご……………ごめんなさい。ぱぱにおかえりつていいたかったから」  
「はあ、わかったわかった。ともかくだ、腹減ってるだろ、何か作る、  
のは無理だから買ってきてやるから少し待ってろ」  
「いや!!」

「じゃあ行ってくる」

「ま、まって!？」

「……………なんだ」

「また置いていくの?」

うるうると、涙で目を濡らして上目使いでこちらを見てくる幼女  
そう言われると罪悪感がある

「はあ、わかった。その格好じゃ目立つ、これ貸すから着てろ」

俺は自身が来ていた防寒具を幼女に投げ渡して着るように言う

幼女は素直に俺の防寒具を着込んでいくが、大人サイズのためにブ  
カブカで裾を引き摺っている

「ふふふ、ぱぱのにおいがする〜」

本人は至って幸せそうだ

「はあ〜、こっちこい」

「なに〜?」

テトテトと裾を引き摺りながら俺の元まで来る

「そのままじゃ俺の服が汚れて敵わない。ほら抱っこしてやるから  
こっちこい」

「わあ、だっこだ〜」

俺がしゃがむと同時に跳び上がってくる。何とか受け止めて立ち  
上がる

「あったかーい」

「そうかい」



そのまま幼女を抱きながら深夜のコンビニに歩を進める

コンビニに着くと、深夜の為か少し客足が少ない

何時もなら俺と同様に残業終わりのサラリーマンやガラの悪い子供が居たりするのだが、運が良いようだ

「何が食べたい?」

幼女にそう問いかけるが、幼女自身が戸惑っているような困ったような顔をしている

「まさか、コンビニに来たことがないのか?」

「うん」

「はあ、これはとんだ箱入り娘だな。わかったわかった、お前が食べたいものを見つけたら言え」

「うん」

幼女を抱きつつ、俺は明日の朝御飯と今日の晩御飯のおにぎりを2つ手に取る

「何か食べたいものがあったか?」

「あれが食べたい」

幼女が指差したのはコンビニにあるおでんだった

「初めてのコンビニでの食べ物がおでんとは渋いな。わかったそれじゃあ、おでんだな。好きな食材を選べ」

「えらんでばかり」

「そんなもんだ。それでどれがいい?」

「んくとね、これはなに？」

「ん？それは、白滝だなこんによくみたいなもんだ」

「これは？」

「それは大根、いちいち説明するのも面倒だな。勝手に選ぶぞ？」

「うん、ぱぱがとって？」

「はいよ」

トングで適当に定番な具材から取っていき、最後に汁を入れて、最初に取ったおにぎりと一緒にレジに持っていく

「1086円になります」

「これで」

「ちようどで、ありがとうございます」

家に帰ると即座に幼女を降ろす、体重は軽かったが思ったより腕が疲れた。

「俺は風呂に入ってるから先に食べててくれ」

「むう、まりーもいつしよにはいる!!」

幼女と一緒に風呂に入るのは……アウトだな

というか名前、マリーというのか。大層な名前だな

「駄目だ、おでん食べてろ」

「むう」

「ふう、サツパリした。さて幼女は……ッ!？」

リビングに戻ると幼女が机の前で倒れていた

「おい!？大丈夫……うみゆう」……か?」

どうやら倒れていたのではなく寝てしまっただけのようだ

おでんを全部食べ終わっているようでお腹が満たされて眠くなつたみたいだ

「はあ、心配させやがって」

ここにこと眠る幼女を片隅に、俺はこれからあるだろう苦難に頭を悩ませながら幼女をベットに寝かしつけた

## 転生杯 ネタ

真っ白な空間。四角いお部屋

テンプレなテンプルで天婦羅なそんな感じワロス

どうやら俺は異世界への運び人トラックさん(32)に、こんにちは！をくらい死んでしまったようです。朝と昼の曖昧な境い目、おはようでも良かったのかもしれない。ワロス

笑いごとじゃないねこれ。死んでしまったしね

神「お主は死んでしまったのじゃ。じゃから転生してもらおうのじゃ。よいか？」

これはビツクリ、まさかあろうことかクソ爺な神が居られるではありませんか。私はビツクリですなメロス

主「いやですノーです断りますのいやですノー」

ここはラップにヒップ、ホップにクラッパー

さあいこうなんだYO

神「うるさい黙れ。さっさと行けよ、お前に拒否権は一切ない。転生、特典、やるからっさっさと、いてこいYO」

ネタをパクんなクソ爺。転生特典とかマジムリ

異世界は危険だらけだし、マジムリマジ出ワロスメロス

神「じゃあとにかくとりあえず、お前に不老不死全魔法適正身体能力UP無限の剣製王の財宝スマホとか渡しといてやるんだZOI」

だから俺はいきたくねー

そもそも俺には特典は必要ねー

必殺のじいちゃん直伝斜め45度チョップがあればどんなやつもイチコロだぜー。

神「そうかそうか。おめえうぜえなさつさといきやがれひやつはー」

ワロス。マジワロス。メガワロス。ギガワロス。テラワロス。メタグロス。

大きい穴あつ、落ちるう

クソ爺は許さない☆Z☆O☆I☆

なんかどつかに落ちてきた。ここはどこどこ異世界さあ  
さあここから俺の冒険が始まるZE!!

左右確認

上下も確認

ついでに後方確認

よしよしよしよし、俺はこの世界で魔王を倒すんだあ  
やたあゝ（ 〓 ^ ω ^ ）

女「きやーたすけてー（棒）」

男「げへへーおれとこいー（棒）」

むむむ、あれは絶対悪いやつ僕が倒す（。▽。）イクゾー

とりやーなんかすごいけーん（。▽。）ヤルゾー

男「わあーさすがのゆうしゃにはかてーん（棒）」  
女「ゆうしゃさまありがとーだいすきー。ぽ（棒）」

おれ、なんかやつちやいました？

---

魔「勇者よさあこい。私は不老不死全魔法適正身体能力UP無限の  
剣製王の財宝スマホとかを得た。お前には負けんぞー（棒）」

負けるものかー

食らえとにかくすごいばーんち（。▽。）ドリヤー

魔「ぐわあー負けタアー我輩の負けのようだなゆうしゃーめえー  
（棒）」

正義は勝つ

---

『』

「これで、よろしかったのですか？」

「ああ、これでいい。アイツには覚めないままで居てほしいんだ。こ  
んな世界見せられないだろう？」

「そう、ですね。私達だけで、必ず……。」

「そうだ、俺達だけでやってみせる。だから待ってるよ勇者。お前が  
居たから俺達はやってこれたんだ」

「ええ、それでは行きましょう。最終決戦へ……。」

勇者が目覚めたのは、全てが終わったあとだった。  
魔王は倒され、二人の犠牲があったが世界は平和になった。  
勇者は絶望した。自身の輝き称号を奪われたからである。

勇者はその後、国民からも虐げられた。

顔を合わせれば石を投げられ、眠ろうものなら火を付けられた。

ああ、勇者よ可哀想にああ、勇者よ。ああ、ああ、ああ、ああ。

本当に愚かな勇者

「はい、これでクランクアップです。お疲れ様でしたあゝ」

「お疲れ様でした。いやあ、今回の役はキツかったですねえー」

「私もキツかったあでもすごいいい経験になりました！」

「まさかね、あんな風に伏線があつたなんてね思いもしませんでしたよ」

「ハハハハハハ、そうだろうそうだろう」

「さて、その君。この埋まらなかった、そんなピースを君達自身がハメていつてくれ、俺達はここで終わり。それじゃあ皆楽しかったぜ！」

「じゃーねー！」

「じゃーなー！」





## メイドインアビス二次

真夜中に1人、酔っぱらいが居た。

千鳥足に呂律の回っていない舌、顔は赤く染めて手は痙攣を起こしている。

明らかに飲みすぎている。

こんなに暗闇の中、足元も覚束無い人間は危険きわまりない。ならばこのあとどうなるのか？

それはこうだ。

脚を踏み外し、穴に落ちた。



享年48歳、独身童貞、友人はおろか彼女も添い遂げるものも居らず酒に酔い深い落とし穴に落ち死亡。

反省もしているし後悔もした。

そして現在、どこに居るのか。天国か地獄か。どちらもNOだ。今いるのは神様の間、転生窓口だった。

美を体現するかのように綺麗な身体と顔、綺麗だなあと思う。

それだけだ……1人で相手も居らず精を吐き出し続けいつしか虚しくなり性欲は枯れた。

なんとも辛い人生だろうか。

神様は、転生させてあげるし特典もあげるから同じ世界で生き返ってくれと頼まれた。

どうやらあの世界で死んだ人間は、もう2度とあんなところで生きていくのは嫌だと生き返るのを拒否するらしい。気持ちはわかる。俺も嫌だ。

しかし、特典というものがあるならば別な話だろう。特別な力を得て、奈落を踏破したいっ！

ということとで俺の転生特典は、上昇負荷も受け付けられない強靱な肉体と身体能力だ！

神様はソレだけでは杵が埋まらないと言うので、ならば再生力も増強して貰っておこう。

杵がどうやら埋まりきったようなので早速転生の準備を恥じめる。どうやら、門を通るそれだけで良いようだ。

それでは早速、俺の新たな人生に……いざ行かん。

ハロー！ 新なる我が家よ、両親よ……私が戻って……き……た？

あれ、ここって……もしかして。

うん、周りに白い何か泳いでる。

ああ、うん。言わなくても良い言わなくても良い。大丈夫だ、把握している。

うん、つまりはなんだ？ その……受精からのスタートですか？

………コナクソがあっ!! 精子どもおっ! 俺は負けねえぞらあっ!!



精子時代の記憶は薄れかけていたが、それなりの地獄であったことはこの幼い身体でも覚えている。

孟熱と貧弱な身体、よくあのなかを生きれたものだよね。ほんとにね……奈落より恐ろしいところだと思うね。

ははっ、ははは……。



俺もようやく、18になった。俺が産まれたのは日本という島国で、一部アビスの道具が流用されたものもチラホラと見られた。

やはり、アビスの道具は他の国でも高いようだ。ゴミのようだったものでも高値で取引されていた。

さて、18になるまで。俺は何もしていなかったわけではない。

とりあえず元となる為の身体作りに、奈落の底へと舞い戻る為に金とコネも作った。

あちらの言語をほとんど忘れかけていたこともあり、それを一から勉強し直した。

途中で、なんでこんなに必死にやってるんだろうと何度心が折れそうになったことか……っ！

前世がゴミみてえなところで暮らしてた俺だが、今世からは必ず成功してやる……っ！！



記念すべき20歳の誕生日を迎えた、その夜。

俺は奈落の底へアビスへと向かうために、船へと乗り込んでいた。

この船に乗るだけで、溜め込んでおいた金のほとんどが吹っ飛んだが今は気にしない。

両親には感謝しよう、ここまで育ててきてくれてありがとう。そしてすまない。いまから俺は死に行くよ……っ

いや、縁起でもねえな。止めよう。いまから俺は夢と希望と金とあと出来れば運命の相手とか探しに死地へと向かうのだっ！



船酔いで潰れて死になっただが、とりあえず宿を取ることに成功した。

うぷっ……一度トイレに行こう……。

トイレにいった、一度吐いてスッキリした。

しかし、どうするか……奈落に向かうにも探窟家になる必要がある。

いや、ならなくても奈落へと向かえる手段はある……だがしかし、あれを使うとなるってえと自殺するようなものだな……。

よしっ、とりあえず色々試してみるか……っ！

ひとまず、試すことは自身の転生特典の再生力……と思ったのだが、再生を試す前に強靱な肉体を試すことになってしまった。

刃物で腕を少し切りつけようとしたら、刃物が刃こぼれた……ええ……。

ま、まあこれだけ身体が強けりやあ、奈落も楽勝だなっ！

ハハハツ！ ハハハツ！ ハハ……ハハハ……。

人間止めちまったよ……俺。

正規のやり方では奈落へ行けないので、昔の俺たちみたいな底辺のゴミ溜りに住んでいた野郎たちが奈落から盗品するための隠し通路がある。まずはそこから奈落へと挑戦してみようと思う。

それじゃあ、レッツラゴー！ の、前に今日は休もう……二日酔いより酷いな船酔い。

ウツ?! と、トイレっ！



清々しい朝ですね、いま思ったけどよ、此方に来るのも久しぶりだなあ。

昔と言えば窃盗に窃盗を繰り返したごみ溜めのなかで過ごしていた日陰者だったわけだが、日陰者は日陰者らしく、明るいところに出てくるべきじゃない。一度出ればキッチンのGよろしく騒がれるしな。

そんなわけだから、此方にに来るのは本当に久しぶりだ。

少し観光してからでもいいか、旨いものでも食いたいなあ

飯旨島国 日本を越えるものはここにあるのか楽しみだなあつ。



結論から言えばたいしたものはなかった。  
はあー、つつかえマジつつかえ。

そこらへんの売店で適当に買った硬いパンをもしやもしやしながら食い、急激に吸いとられる口内の水分を水筒に入れてある水で潤す。

それなりにある人混みを掻き分けて、あちらこちらをキョロキョロとしながら見る。

こう見ると、些かこちらの方が文化的には日本に劣っているものの、この島国独特の文化を感じる。

「いやー、ずっと裏側に引っ込んでたからわかんなかったけどこうなってたんだなあ」

なんか、寂しいというか虚しいというか……

気持ちを切り替えて今日の計画練っていくぞー、おー！

とにもかくにも、アビスに降りるにも地上とアビス一階層でも距離がある。何も用意せずに上から飛び降りても潰れたトマトになってしまふ、かといってロープで降りるにも長さが足りない……というところで俺が考えた計画は力業でどうにかすることだいくつか釘に巻き付けたロープを持ち、壁にぶっ刺してそのロープで下に降りる。多分上手く行くだろう。

そうと決まれば材料とか用意しないとな。

来たるは夜。人は寝静まり、もはや誰も歩いていない時間。人目を忍んで、怪しく歩きますこと俺である。

俺の目の前には、どこまでも暗く底が見えない大穴。

いまは深夜帯、下っていけば夜が明けるだろう。

サツと言ってサツと帰ってくるでしょう、今回はあくまでも体験だしな。どれくらいのものか、本当に上昇負荷がかからないのかを調べるためだ。

それじゃあ、早速行ってみるとするか……っ!!



## 結城友奈は勇者である二次

あるとき、私は見た。

美しい少女を、綺麗な黄金色のサラリとした髪、大きく穢れを知らないような瞳、何もかもが無垢で、純白で眩しすぎた。

いつしか見た、彼の少女のようだった。

だけど、彼女と違うのはその1つ1つのコロコロと変わる表情だった。にこりと笑っては周りを笑顔にさせる。

見ているだけで、胸の鼓動が速まって顔が熱くなる。

つまり、これは……なんだ所謂一目惚れというものなのだろうか



私は、何度か自身の生を終えてきた。

一度目は日本で、平和なところだった。姉と両親が居て私は女の子として生きた。

二度目は、また同じところで猫として生まれ変わった。少し未練があつたから特別にだと思ふ。

三度目はこの世界に、男として生まれた。

最初は平和だった。でも、突然なにかが起きて見たこともないような化け物が、住んでいた人や私の友人を目の前で殺していった……けど、私がこの世界で死を覚悟したとき、私は時間を移動した。

何年も何十年も何百年かの先の日本へと気が付けば身を1つで放り出されていた。

なんで私だけがそうなったのかわからないけど、少しの間は気を落としていた。

聞けば、残った県は四国の4つの県しかないとか。

他の国や日本がどうなったのかはわからなかったけど、この世界は神樹様なる樹木を崇めているらしい。

そんなわけで、身寄りがありませんでした。

家もなければ食料もない。衣服は着ているものだけ、そんな中で救いの手を伸ばしてくれたのが乃木の家系のお家です。

実はと言うと、私も乃木家である。

自己紹介が遅れましたが、乃木翡翠と言います。

正直、私からすれば、またうさぎをご注文しそうなアレなアニメの姿なのかと戸惑いは隠せませんでした……。それは置いておいてです。

昔の、私が生きていた頃の乃木家と言えば大したこともないただの一般的なところでした……。それが何故か未来では富豪になつていらつしやりやがりますけど。

そんな未来の乃木家に引き取られた私、身寄りもなく戸籍もなし顔が特別いいわけでもない私を乃木家は引き取ってくれたのですが？

もちろん本家の大元なんかには引き取られる訳ありません。分家も分家、末端の末端の、あつ、私たち一応乃木の者ですくくらしいところですよ。

なのでたいしてお金もないようで、私を引き取って大丈夫なのか!? と私自身が心配するほど……。

そんなわけで私がいま住んでいるのは愛媛にある洋風の小さい一軒家。

住んでいる夫婦も仲良く、微笑ましいです。熱々なので触れたくありませんけど。

乃木の本家は香川にあるそうです。今度行くときはうどんを食べたいですね、香川と言えばうどんですし。

前とは全然違うところに住んでいるもので、少しずつその地の方言に私のしゃべり方が侵食されているようなのです。

私自身はそんな気は全くしてないんですが、ふとしたときに無意識に方言が出ているのだから、少し恥ずかしいですね。笑ってしまいう。

そんなこんなで、愛媛にて無事生活していますブイブイ。

あっ、戸籍は本家のほうに頼み込んでみたところどうにかしてくれました。どうにかって何したんですかね。



引き取られて数年……もは経っていませんが。それなりに時間は経ちました。

私は現在小学五年生、まさか覚えている限りの人生で小学生を三度もしないといけないとは……：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：～  
た。

外向きは男の子っぽく少し性格悪い感じでしゃべるようになります。  
わざわざなんで性格悪いようにしゃべるかって？ クソガキばかりだからですよっ！！

ほんつと頭にキますね！

それは置いておいてです。いや、アイツたちはいつか復讐してやりますがね。

体力が足りないから負けてるだけです。

ええ、口で負かしてこそその年上なのです。

そして、漸くこれが来ました。私と言えば引きこもり、私と言えばゲーム、私と言えばパソコンっ！

つまり、これは私の新たなマイパソコンっ！

これからも一心同体の相棒として私と暮らしていくのですよおー？

うへへー頬擦りしちゃおー……ヤバいな。絵面がアウトすぎる。止めとこう……

そんなわけで引きこもり部屋とパソコンを手にいれたので幸せなマイライフをですね、やっていこうと思いますよ。



……また……抜かれた。

現在私は意気消沈中です。

えーと、実はある小説投稿サイトを見つけたのですが、前までは使用したりとかしなかったですけど、案外やっていると面白くて読むこともそうですが自分でも書いたりしているのです。

そこそこの人気と、そこそこーに増えるアクセス数を見て毎日によにやとする日々なのですが……唐突に現れたコイツ、コイツのせいで死にかけてです。

なんか似たような作者名と作風でどんどん私より人気を集めて上

位へのランキングへと食い込んでいったのです。

あー、やる気なくすわー

マジムリだわーこんなのやってらんねーわー

はあ……二次創作しよ。

△▼△▼

どうも、乃木さんちの翡翠です。

漸く自身の名前に違和感を感じなくなった頃……小学六年生になった頃。

今日、今から乃木家の集まりあります

えー、勿論私は行きたくない。駄々を久しぶりに捏ねてみました……ダメでした。

行かないと潰されるらしいです……それが文字通り物理的によるものなのか社会的になのかは知らないけど、行きたくなくても行かないといけない強制イベントらしい。

それじゃ、行ってくるぜっ！

あつ、うどん食わなきや（使命感）

△▼△▼

ひとまず、えーと一言だけ。久しぶりに喋ります……「なんだこれ、

でけえ」

そうです、乃木の家がでけえんです。やべーいですよこりは……私の妹の紗路ちゃんもプルプルしてますし、あら可愛い。

そういえば、私にも妹が出来ました。というより元々私より先にお邪魔したお家にいた女の子なんですけど。

ちゃんと血縁関係はあるらしいです、拾ってきたのかと当初は思ったりもしましたが

因みにまた、ウサギをご注文しそうなアニメの金髪の女の子の姿です。

カフェイン飲ませたらテンション上がったたりしないかな？

私とは2歳差でとても可愛いです。もしうちの妹を嫁に貰おうものなら先ずは私を倒してからにしてもらおうか馬の骨どもっ!!

最初会ったときは警戒されにされまくって嫌われてたんですけど……時間ってすごいですね今では紗路ちゃんから抱っこして言うくらいです。かわわっ！

妹の可愛さで現実から目を話していたけれど、簡単に説明するならば和風のすげえでつけえ屋敷（大富豪）ですね。

出来ればここからすぐに立ち退きたいですけど、無理ですよ。そもそも家みたいなの乃木の残りカスみたいなのも集まらないとダメなんですかね。

私的に言えば本家の方にはお世話になってるところもあるから強くも言えないんですけど。

それじゃあっ行ってみよう！

「し、失礼しまーす」

「おじやつ、お邪魔します……」

私、紗路ちゃんの順で入っていき。紗路ちゃんのお父さんお母さんが後ろから順場に入ってくる。

家のなかも外からみた通り広いですねえ……あはっ！

「お兄ちゃん……現実から目を反らしちゃダメ」

「もう金持ちってわからんよ」

「羨ましいよね。和風なのを除けばスゴく理想的」

「和風も良いと思うんやけどなあ。……四国にこれ以上求めてもね……」

「し、四国だつて……頑張れば都会になるよっ！」

「そっかなあ……愛媛とか松山くらいじゃない都会っぽい。あと四国だけで建築資材とか足りないと思う」

「まあ……そうだろうけど」

はっ!? つい人の家の玄関で長話してしまった!?

「わく楽しそう〜」

急に聞こえた声にビクツと驚いて、後ろを振り返るとふわっとした雰囲気の子が。

「んー? どうしたん〜?」

私より幼いか同じくらいの子身長、見た目は美しいというより可愛らしいという言葉が正しくてどこかポワポワとした雰囲気を求てる、

つまりシャロちゃんと同じくらいかそれ以上くらい可愛いというこ  
と……。

「……何を、ジロジロっ見てるのよっ!」  
「ぐえっ!」

く、首が……ゴキツて。ゴキツてえ!  
くびがつくびがあっ!! あああああっ!

「あがつ、あぐぐぐっ」  
「あ……っ! ぐ、ごめんなさいっ!」

「わー楽しそ〜」  
「これはワイワイしてるわけじゃねえんですけどおっ!? ……いただ  
だだ」

「なに気軽に話してるのよっ!」  
「理不尽すぎないっ!? あふんっ!」

また首をゴキツてやったなシャロオツ!!  
私死んでしまうよ……

そこの女の子、ずっとニコニコポワポワしてないで……お願いなに  
かイベントを起こしてっ!?

このままじゃ話が進まないよ!?

「あっそっから、上がって上がって〜」

「失礼します……」

「お邪魔しますう……」

ほんっと騒がしくしてすみませんっ!





「いいシヤロ？　ここは偉い人のところだからね？　わかってる？」

「う……うん。それくらいわかってるもん」

「それならいいんだけどさあ」

「お兄ちゃん、地が出てる」

「……はやくいこ」

「怒ってる……？」

「逆にあんな風にされて怒ってないって方が不思議だと思っただけ  
ど」

「……ごめんなさい」

さつきまではあんなに元気だったのに……私に少し言われただけでこんなにシユンとして……。

「いいよ別にシヤロに反省の気持ちがあるんだったら。これ以上は怒  
んないよ」

「……うん」

よしよしとシヤロの頭を優しく撫でる。

にへえとするようなだらしない顔を始めたところで撫でるのを  
止める。

もの足りなさそうな目で見てくるが少し無視、鼻唄を歌いながら廊  
下をスタスタと歩いていく女の子のあとを必死についていく。

慣れないものだから、少し歩くのが遅れてしまう。

「なんかいいなー私って兄妹いないからそうやって仲良くしてるの羨  
ましいよ」

ホワホワとこちらに話しかけて来るものだから少しどう接すればいいのかわからない……姉さんと同じような系統で違うような感じがあります。

こつちが反応しなくても気にしないという風でまたフンフンと楽しげに鼻唄を歌う。

少し歩いたあと、ピタリと止まれば隣にあつた襖をスススと開けて、中に入っていく。

話し声が小さくも聞こえたあとでヒョコつと顔だけを出して、にへつと笑いかけてくる。

どうやら私たち兄妹を呼んでいる訳じゃないらしく、後ろにいるシヤロちゃんの両親を呼んでいるらしい。

緊張した面持ちで二人で部屋の中に入っていくのを確認し終わると、女の子は部屋から出てきてチョイチョイと今度は私たちを呼んでいる。

「二人はこつちだよ」

鼻唄と共に今度は体も揺らしながら奥へと歩いていく。不思議に思いながらも私達もあとをついていきます

随分と行き先は奥のようで、漸くついた頃には玄関から物凄く離れて

和風の屋敷に少し似つかわしくない洋風の扉がありました。

「さあ入って入って」

部屋の中から笑いながら部屋の中に呼び込んでくる。

一体なんの部屋なのかと少し困惑しながらも中へと足を踏み入れる。

中へと入るとポカンと呆けてしまった。

人形等の可愛らしい装飾品が部屋の中に綺麗に整理されて置かれており、一目で女の子の部屋だと言えるそんな部屋。

私の部屋との差を垣間見て愕然とするのでした。

女の子らしい部屋に少しソワソワしながらもシャロちゃんと一緒に椅子の上に座る。

シャロちゃん自身も、『ふっ、これが女の子の部屋なのね……』なんて言わんばかりの絶望の目をしているけれど

それにしても何故、私たちだけがこの部屋に？

「なんでー顔してるね。実はね乃木のしゅうかいーなんてのは本当はなかったんよー？」

私が二人とお話したり遊んでみたかったから呼んでみただけだしね」

「俺達を呼ぶためだけに、そんな大層なことをしなくても……」

横で首をブンブン縦に振って、私に同意してくれるシャロちゃん。

あー、首が痛い

必死に同意してくれようとしてるシャロちゃんもラブリー！  
じゃなくて……。

「なんで、私たちが？」

そう、それだ。別に私達である必要はないのでは？

話したり遊んだりするのは、別にわざわざ愛媛から呼び出してする必要はないでしょうし。

それなら近所の人とすればいい。

まあ、それが出来ないから私達が呼ばれたのだろうけど。  
乃木……といえば、世界に有数のブランドだ。

事実その名字が付いているだけの私達も周りからそれなりの目で見られる。忌避の目とかね。

たいした力も持っていない家でそうなのだから、本家の大元となれば更に話は変わってくるだろう。

誰も近づいてはこず、近づいたとしてもその権力が目当てなのが妥当。

この小さな四国だ、以前より人は増えただろう。

それでも時間が経つに連れて人口は減るだろうが。

小さな場所で人が増えるとなれば、仕事もなくなるし食い扶持も消える。

少しでも生き永らえるためにも乃木のご令嬢である、この人に着いていこうとすることも……と思う。

実際そうなったところを見ているわけではないので、本当にそうなっているかは知りはないけど。

そんなわけだから、同じ乃木の子供で同世代である私達が呼ばれる訳なんだろうけど……。うん、ほとんど多分理解できたかも。

「うーん、ただただ気になったのもあるよー？ 私と同じ乃木の人……しかも歳が近いからねー、どんな人なのかなーって気になって。優しい人かなー、楽しい人かなー、会ったら仲良くなれるかなー、どんなものが好きなのかなー、そう考えるだけで夜も寝れなくなるんだよ。だからね、呼んでもらったの」

「そ、そっかあ……はは……ははは……」

やっぱいい、思ってたよりも期待されてる感じなのではないのでしょうかあ!?

しや、シャロちゃんは!?

オオノオウツ!! 既に逝っている! 天へと昇ろうとしている!

ダメだ! 一人だけ逃げらせると思わないでくださいっ!

隣に座っているシャロちゃんの肩を両手で掴んで思いつきり振る。それでも安らかな顔をしたまま、なにも喋らない。

「はあ……はあ。くそっ、一人だけ先に……と、ところで……えーと」

「園子でいいよー」

「じゃあ、園子さんで。ああ、それなら俺も自己紹介とかした方がいいよな。えーと、乃木 翡翠と言いますこっちは乃木 紗路」

「じゃあスイスイにしゃろろんだあー」

早速愛称をつけられるとは……

と、とにかくこの場をどうにか切り抜けなければ……

「あ、あの……なにをしま……っ……じゃなくてっ。するんだ?」

「んー、なにしようかなー。本でも読むー?」

「遊んだり話したりしたいって言ったのに……っ!?!」

「そっかー、でもなあ私の家になにかあったかなー。んーとー」

なにやらゴソゴソとしだす園子さん。

遊び道具でも探してるのか、それとも別の……?」

そこでふと、何故かパソコンが目についた。しかも電源がついたまま。

うん、いけないこと。いけないことだと分かっても、私の中の悪魔と天使が囁く……『ユー見ちゃいなよ』と。

よしっ、見よう。

画面に映ってるのは……小説……サイ……ト……だと？

いやいやいやいや、まさかまさかまさか、そんな筈は……作者名は……

「あらー、見られちゃったかー」

ギシギシと錆が入ったかのように首を動かし、園子さん……いや、私の『敵』を見る。

いや、待ってくれ、まさかだ、一目惚れしそうになった相手にまさか早くもここで……なんとという掌返しか。

「……許さぬおくべきか……許さぬぞお!! 乃木 園子オツ!!」

「え、ええー!?!」

その後、園子さんの親とシャロちゃんの親が止めに来るまで昭和の喧嘩は続いた。

わからない人は、昭和の喧嘩で検索。

## ダンまち×FGO 二次

昔はロキ神、フレイヤ神のファミリアと同格を成すほどの大手ファミリアであった。我等がカーマファミリア、しかしことにもよって主神が欲をかいってしまった。

元々いるファミリアメンバーで我慢をすればいいものを他のファミリアメンバーを欲しがる始末。

私もカーマ様のファミリアの一員であるために、色々と指図は出来ることは聞いてきた。

だが、だ。流石に同格、いや、先程は同格といったがそれ以上のフレイヤファミリアやロキファミリアのメンバーが欲しいと言うとは思わなかった。

流石にこれは勝てないと思ったが、コレでも一応うちの神様である。

我が儘も聞いた、それで戦争遊戯を仕掛けた。

勿論負けた、負けに負けた。一度負けただけでは諦めず何度も何度も挑戦させられ続けた。

正直、思った。この神はダメなのではないかと、駄神なのではないかと。

今では、多くのファミリアメンバーが元々いたファミリアに返されたか、他のファミリアへと改宗し居なくなってしまうている。

そんな私自身も、戦争遊戯に負けた代償にロキファミリアへと半強制的に改宗されてしまっている訳だが……でも、流石に元になるとはいえ自身の主神を早々と忘れられる訳でもない。

ダメダメな神様ではあるけど、可愛いところもあると言うもの……こうしてダンジョンからの帰りにカーマの居る屋敷に足を運んでい

る。  
この屋敷は、うん。1人になってしまったカーマが可哀想に見えてきて私が死ぬ気で、本当に死にかけだったけど……金を集めて買い与えたものだ。



元々カーマが持っていた屋敷は勿論ぶんどられている。前の屋敷よりは小さいが、カーマしか住んでないし大丈夫だろう。

さて、1人で寂しくて泣きそうなカーマ様の姿でも見てみようかな。

「ただいまー」

土足禁止であるために、靴を脱いで屋敷の中に入る。

いつもなら玄関まで怒りながら来るはずんだけど……おかしいな？

なにかあつたか？

屋敷の中を見ても、特段荒れてる様子はないし……。

とりあえず、玄関の前で立ち止まっている訳にもいかないので、探索してみることにする。

まずは、1つ目の部屋……居らず。

風呂……居らず。

キッチン……居らず。

食堂……居らず。

リビング兼住居人のたまり場……居らず。

書斎……にも居ない。

トイレに入ってる様子もなしと……。

うむ、一階には居ないか。2階の自室か？

自室には入ってくるなど言ってたが、さてどうするべきか……行くか、なんとというか好奇心が湧いた。

入るなど言われれば入りたくなるし、押すなど言われれば押したくなる。

それが人の性である。

それでは、いざ出向!!

「今回は、神カーマにドッキリを仕掛けたいと思いまゝす。本人には気づかれてはいけけないので、現場からは小声でお伝え致します……2階に上がりました。カーマの部屋は一番奥です……そーと、そーと」

深夜の泥棒並みにこそそそと廊下を歩いていく。

「おーと、カーマさん。不用心だあ扉が開いております。それでは少し中を確認……思ったよりは片付いているようです。カーテンがしまつてよく見えません。これは困りました……とりあえずドッキリターゲットのカーマさんを探していきましょう。おっと居ましたね、部屋から入らなくても見えます、どうやらお昼寝中のようです。お寝坊さんですねゝ」

こつそりと部屋の中へ入っていく。

思ったより部屋は綺麗に片付けられている

片付けられているからと言って、ものが無い訳じゃない。

あつちをみれば人形が、こつちをみれば人形が。カーマって人形好きだったか？

まあ私には関係ないことか……。

さて、そろそろベットに……「おうふ、何て言う格好で寝てるんですかこの神。私の服なんですけどそれ、どこに置いてきたかと思えば……。まあいいです。綺麗に使ってるようだし、この神服持つてないですし……パジャマ買ったのに。それを使えばいいのに……言つても無駄か、普段からあんな格好してる神だもんね。さて、可愛らしい寝顔が見れたところで物色物色つと。この機会を逃せば探索は出来ないだろう……ってことでまずはダンスから行ってみよう。私だつて男の子ですからねゝ……って何も入ってない。むう、これは今度私が買いに行かないといけないですね。前買ったパジャマは綺麗に畳んで仕舞われてるけども……なんか納得いかない」

ちよつと不満気味な気持ちで、部屋を荒ら……コホンコホンじゃない。探索してみる。

家具は色々あるが、これと言った物珍しいものがあるわけでもない。

ふむう……ん？机の横に鍵穴がある箱が……、んー、やっぱり開くわけないか。

ガチャガチャと蓋を開けようと音を鳴らしてみるのが効果はない。

力付くで破壊して取り出すことも出来るが、止めておいたほうがいいかな。

これは困ったと言うように部屋の中心で立ち尽くしてしまう。

そんなときにチャリンと軽快な音をたてて何かが落ちた。

音が鳴ったほうを見ると、銀色の小さな鍵が落ちていて、これは幸運とばかりに拾い上げて箱の鍵穴に差し込む。

鍵を回せば、カチャリと先程と同様に音をたてて箱の閉まりが開く。

箱の中を覗いてみると一つの手記が入ってた。

「なんだろ、これ？んー、ちよつとくらいなら覗いてもいいかなっ」

ペラペラと、次ページ次ページと捲っていく。

どうやら、日記帳みたいらしい……。ふむふむ、なるほどなるほど。へー……え？んー？うんうん……。

「よし、見るの止めとこう。仕舞つとこ」

即座に箱の中に戻し、鍵を閉め直す。

鍵を落ちていた場所に戻して、ゆっくり、だらしない神の前に戻ってくる。

すうすうと、気持ち良さそうにまだ眠っている。

こう、見てるとイタズラしたくなるのが人の性……ふにふにと頬をつねってみる。

やっぱり柔らかいなあ

「……………暇だ。出るか、カーマ様も寝てるし。それじゃあ、今日は帰りますね」

そう、言ってから私は屋敷を出た。

出たところで、屋敷内からとてつもない奇声が聞こえたりしたけど些細なことですね。



「ふあく、ねむ……」

目を擦ってから、目を開けるが外から射し込む日光で目が眩み細める。

正直、ロキファミアリアの面々には、特に主神には顔を合わせたくないため部屋付きの洗面所で歯を磨き顔を洗えば装備を整えて、窓から飛び降りる。

華麗に四足で着地!!

私はすごいっ!満点だあ!!

さてと、ダンジョンで荒稼ぎするとしますかね……。別にハシヤギすぎて恥ずかしくなったわけではないですよ……。ないですよ?

いつもより若干早い足取りでダンジョンへと歩いていったのであった。

恥ずかしくなったわけではないですよ?



今日も街はやんやんやと騒がしい。

この騒がしさで、どれだけ街が活気付いているかわかるというものの。

私にとってはうるさいものでしか、耳障りでしかないのだけど。

なかったらなかったで、それは寂しいというもの、日常のなかのけたたましさもたまには良いだろう。

そうだ、今日はダンジョンに入る前に『ギルド』に寄っていこう。

どうせ帰りに寄ることにはなるけど、たまには口煩い担当さんと少しは話してみてもいいかもしれない。

ふむ、今日はなんだか気分がいい、調子がいいのかな?

少しウキウキとした気分でギルドの戸を両手で開ける。

「失礼しまーすと」

若干周りから目線がある気がするけど……。多分気のせいでしょう。

受付の方へ一直線で歩く。

お目当ての人が見つかって、顔が崩れ笑顔になってしまう。

あれ？なんで、そんなに嫌そうな顔をするんです？不思議です……。

今にも、ゲツとでも言いそうな顔じゃないですか。

「ゲツ……」

あれえ？

「なんでそんな嫌そうな顔するんですか？ミイシヤさん」

「嫌そうもなにも、実際に嫌です」

「そんなキツパリと真顔で嫌だと拒否しなくても良いのに。なにか、私しました？」

「なにか、しました？……じゃないでしょおっ!? 貴方のせいでも今まで私がどれだけ苦勞を……っ!」

「ミイシヤさん? ここ仕事場ですよ? 落ち着いたらどうです?」

実際に周りの冒険者がなんだなんだとこつちを見ていることだし。

ほら、他の職員さんなんてため息とかついちゃって。

「このっ……。はあ、もう良いわよ。それで何しにきたの……」

「冒険者がギルドに来ちやいけないますミイシヤさん?」

「そういう訳じゃないけどさあ。いつもいつも問題しか持ってこないじゃない」

「でもですよ? その問題のお陰で仕事が上手く出来るようになったじゃないですか。私がいつも行くとエイナさんに嘆いた頃は考えられませんね」

「余計なお世話よお、それでどうしたのダンジョンには行かないの?」  
「いえ、今から行くこうと思っただけ。その前にたまにはボツチで寂

しそんな担当さんと話してやろうかと」

「なんでそんなに上から目線なの!?!そ、それにボツチじゃないしつ!!」  
「嘘ばかり言つて。私ミイシヤさんがちゃんと話してるのエイナさんしか見たことないですよ?ねえ?エイナさん」

「はいはい、そんなにミイシヤを困らせないで早くダンジョンへ行つてらっしゃい」

「エイナさん冷たいですね。私ほんとなんかしたかなあ?」

「そうですね、営業妨害にセクハラ恐喝、ステータス詐称などその他諸々のルール違反……問題ばかり起こしては流石の私も庇いきれないわよ?」

「あー!!あー!!なにもきーこーえーなーいー!!」

「聞こえないフリしても駄目だからね」

「エイナさんはきつと私特攻ついでるよ。大人しくミイシヤさんを苛め……じゃなくて弄り……じゃなくて、激務の励ましは止めてダンジョンに行つてきますね」

「ねえ?何をそんなに言い直したの?ねえ?」

「はいミイシヤも仕事に戻つてね」

「なんか理不尽じゃない?」

「フツ」

「いま鼻で笑つたでしょお!?!」

煩い声を耳を塞いでシャットアウトしながらダンジョンへと走っていく。



上層のアリをプチプチと潰しながら下層へとゆっくり降りていく。別に今はそれほどお金に困ってるわけではないし、カーマ様一人くらい養えるほどのお金もある。

もしものときはこの武器を売って……いや、止めとこう。

こんな売ってあとで何か起きたら嫌だし。  
呪いとか掛けられそう、魔法の扱いとかピカイチだからねあの人。

『ヴヴオオオオオツ!!』

「おろ？こんな浅いところで牛なんて珍しい」

私の方へと突進してくる牛さんを華麗にかわして。そのまま背後から自慢の一品で一刀両断する。

スパリと半分に分かれて、灰のようになって消えていく。

「あつ、魔石まで壊しちゃった。勿体ないなあ」

少し気分が下がってしまった。まあこんなときは歌でも歌いながら歩くに限る。

「うわああああああつ!!」

あら、珍しい。牛の次は丸腰の人が走ってくる。

ダンジョンに丸腰で入るなんてバカなんだろうか？

まあ私くらいなら素手でもモンスターなんてケチヨンケチヨンですけど

……別に魔法があるからとかじゃないですよ？

「たああすうけええてえええつ!!」

「はいはい、いま助けますよ」と。あり？また牛ですか、今日は牛パーティーですかね？」

『ヴウヴオオオツ!!』



よつぽどの恨みでもあるのか逃げてる人を鬼の形相で追いかける牛さん。

なにしたんですかねあの人。

「はいはい、その人しやがんでくださいーい」

「ほえ?」

「ほら、ちゃんと避けないと頭が吹っ飛びますよ」

「は、はい!!」

牛さんの前で、ガクツと目の前で頭を抱えてしやがみこむ逃げた人。

その人の頭ストレスを私の大剣が通りすぎ後ろの牛さんの上半分と下半分を永久バイバイさせる。

んむ、よき具合だ。

まっ、そんな牛さんの目の前でしやがんでたら頭から血をブシヤリと被るわけで、頭から体を真っ赤っかに染め上げることになった。

「おーい、大丈夫か少年」

「少年っていうほどの歳でもないけど、一応。死ぬかと思った……。」  
「いやー、間一髪だったね。私が居ないと死んでたよ。それでなんで、こんなところで丸腰で居るの?」

「なんというかですね、気づいたらここにいたというかなんというか」  
「なに言ってるの?」

「だよね、アベルさんもなんでここに居るのかわからない」

「そこはちゃんと把握しよ?とりあえず、すぐく簡単に説明しとくけどココはダンジョンって言ってモンスターが出るの、大概の人はここに来ちゃダメ。オーケー?」

「オーケー?」

「ならばよろしい。入り口まで案内してあげよう。ここに来るなら冒

「険者になってから来るがいいよ」

「あつ、あのまだ俺以外にも連れが居てですね」

「ふむ？つまり牛さんに追いかけてられているうちにハグレたど？」

「そんな感じ……でも、このままじゃアテネもっ!!ここはマイクラの世界じゃないみたいだし、リスポーンなんて……。」

「んー？何いつてるかはわからないけど。うむうむ、私も一緒に探してしんぜよう。どうだ優しいだろう」

「すごく優しい」

「そうだろうそうだろう。まあ、私は運は良いからねすぐに見つかるさ」

地面に突き刺さったままの大剣をヨイシヨと引き抜いて。ニコリと少年の方へと笑いかける。

若干引いてる気がするのは気のせいだよ。



「はあ、はあはあ。私はなんとか逃げ切れたけど……。というか何なのココ」

壁に凭れながら息を荒げさせている。

少し前まで意味不明の人と牛の合体したような生物に追いかけられたからだ。

「気づいたらここにいたし、マイクラのなか……ってわけでもなさそうだよね」

うわあああああつ!!と叫びながら頭を抱える。

それもこれもあのバカアベルが危ないから止めようと言ったのにあの牛に攻撃するから……やっぱり敵対mobだったじゃん。

「はあ、これからどうしよ。とにかくアベルと合流した方がいいわよね?」

正直、ここから動きたくない気持ちで一杯ではあるけど、その重い腰を上げて動く。

「これから嫌なことしかなさそう……っ」



「へー、じゃあアベルはその二ホン?ってところで動画投稿者として活動してたんだね?」

「むふふ、まあね。これでもアベルさんは人気投稿者だからねっ!」

「スゴいなあ、私にはどんなものかわからないけど、とても楽しそう」

「んー、まあね。楽しいよ、そのぶん辛いこともあつたけどね」

「そうなんだ。そういえば、アテネちゃん?その子はどういう人なの?」

「アテネ?アテネはね、俺の相棒?友人?と、とにかく俺の仲間なんだ」

「なるほど、その子のこと好きなの?」

「ふえ?……はっ!?そ、そんなわけじゃないですのことですよ!」

「ふーん、私には人の恋心なんてあまり分かりたくないものだけど。そういえば私の話は全然してなかったっけ。私はアルト、これでも冒険者の中では強い方なんだよ?」

「それは確かに納得。あの強さを見ちやアベルさんもブルってしちやう」

「アベルって面白いね」  
「それほどでもあるね」

二人で同じように歩を進めて、少し喋りながらアベルの連れを探  
す。

特徴としては、緑らしいけど……ん？

あれは？

「ねえ、アベル？あれってアテネって子じゃない？死にそんな顔で辺  
りをキョロキョロ挙動不審なのがそうじゃない？」

「……そうだ!!アテネだあっ!おーい!!おーい!!」

アベルの声に反応してか一層キョロキョロとしだす緑の人物アテ  
ネさん。

漸くこちらを見つけたのか、パアツと明るい顔をした……かと思え  
ばムスツとした顔に戻った。

「なんか、怒ってるよ?」

「んー、アベルさんにはサツパリだ」

「怒ってるとかそういうの関係なく、普通に助けに行かないとモン  
スターに襲われちゃうぞ?」

「それもそうだ」

「んじやあ、行こうか。アーテーナーさーん」

アテネさんの方へと、大声で名前を呼びながら歩いていく。

本人がボツと顔を真っ赤にしているのが少し面白い。

「ちよっ、誰?」

「ああっ、私このアベルくんを助けたアルトと申します。よろしく」

「んあっ、あつ。うん、よろしく」

「アテネなに戸惑ってるの?」

「戸惑ってないわよ」

「アテネさんはここがどんなところか把握してる？」

「いや、全然？」

「バカなの？」

「ん？喧嘩は買うけど？」

「すみませんでした」

「あははっ、アベルだけじゃなくてアテネさんも面白いね。私面白い人好きだよ、見てて飽きないもん。さてと、アテネさんにも説明しておくよ、ここはダンジョンって言ってね至るところからモンスターが産み出されて、中に侵入してきた人を襲ったりしてくる危ないところなんだ。正直そんなところで丸腰でいたアベルは、頭がおかしいんじゃないかと私は思った」

「えっ？」

「とにかく、それじゃあここからも一刻も早く出なきゃ」

「うんうん、その勢いやよし。おにーさんに付いてくるがよろし。安全なところまで案内しよう。といっても『五階層』だからすぐに着くけどね。それまではゆっくり話ながら行こうよ。私もまだあんまり喋れてないし」

「そんなに悠長でもいいの？モンスターとか来るんじゃない？」

「だいじょーぶだよ。アルトさんは強いからね」

「なんで、あんたがどや顔なの？」

「アベルの言う通り私は強いからね。この武器達が見た目だけじゃないって証明できるよ。かといってここは上層だからそんなに活躍もしないかな、あんまり強くないしね」

「その上層とかってなんなの？」

「ん？ああ、そうだね。このダンジョンは下に行くほどモンスターの強さとかが変わってくるんだよ、だから上の方はたいして強くないかな。私の予想としてはね最下層にダンジョンのコア的なものがあるんじゃないかと睨んでいる。……なんてそんな訳もないだろうけど、そう思ってた方がロマンあるでしょ？」

「うむむ確かに毛ガニのズワイガニ」

「なにそれ面白いねっ」

「この二人、脳内の精神年齢が同じだ」



「ようやく出れたああああっ」

「アベルおつかれー、さてと感傷に浸るのもいいけどまずはその血を落とさないと」

「ハッ!!なんだこれ!」

「気づいてなかったの? バカなの?」

「あ、アテネ酷いつ!!」

「あはははっ!! さてさて、やんやんやんやしないで身体を綺麗にしないと。今から行くところはその格好じや怒られちゃうからね」

「んーむむ、アベルさんの溢れ出るカツコ良さもこれじや半減だしねっ」

「なにいつてんの?」

「ツツコミが辛辣だねー。普段は冒険者しか使わないんだけど、まあ今回は良いですよ。こっち着いてきてシャワーあるから」

「謎の場所の初風呂だあ」

「はあ……」



「ミイシャ…「エイナさああああああんっ!」…さーん?」

ギルドの中に入った途端、横を誰かがスゴいスピードで駆け抜けていった。

流石の私も呆気にとられる。

チツ、ここでミイシャさんを弄ろうと思ってたのに誰だ邪魔をしや  
りやがったやつ。

ギリツと、歯を鳴らしてその人物の方を睨むと先程のアベルのよう  
に頭から血を被った少し小さめの少年が居た。

「俺と同じ格好のやつがいる」

「……………うさぎ?」

「ウサギっぽいねー。まあいいや放っておいて、ミイシャさんミイ  
シャサーン」

イライラとした顔は即座にニコニコとした顔へ切り替えてミイ  
シャさんの方へと歩いていく。

「あれ?思ったより早かったね」

「どうしたのミイシャさん。もしかして私のこと心配してたとかー  
?」

「一応貴方の担当ですから。貴方に関しては心配は必要ないですね、  
私の胃の方が心配です。最近貴方のせいで胃が痛く…………」

「それはそれは大変ですね。それで何でそんな真面目なしゃべり方な  
んです?」

「……………これが素ですよ。アルトさん?」

「えっ、キツモ。なにそれキツモ。お前誰だよキツモっ!!」

「ねえ!?! 嘗めてんの!?! 私のこと嘗めてるの!?!」

「ああ、それですそれ。良かったミイシャさんが変わっちゃったかと  
思ったー」

「本当に……………はあ。……………ん? その後ろの二人誰? 見かけたことない顔  
だけ」

「ミイシャさんの頭が弱すぎるから忘れてるだけでは?」

「うるさい。いやでも、本当に見たことないなあ。二人とも名前とか  
教えてくれる?」

「えつ、あつええと。アベル……です」

「コミコ障を發揮しないでよ。アテネです」

「えーと、アベルさんにアテネさん……冒険者登録はしてない、ファミリアに所属はしてますか?」

「ファミリア?」

「家族?なにそれ……?」

二人が向かい合つて首を傾げてしまっている。

そういえばファミリアはまだ説明してなかった。

「あー、ミイシャさん。今からは真面目に話をするんですけど、二人ともダンジョンで遭難していたところを保護して連れ出してきたんです。だから今日は帰るのが早くなつたわけですね、二人とも気づくとダンジョンの中に居たらしくて前後の記憶がないのだとか。オラリオのことも知らないようですし……ここらへんの人間ではないと思います。不法入国とかでは無いと思いますよ、ダンジョンのなかに丸腰でいる不法入国者とかバカすぎるでしょ?」

「……アルト君、そんなに真面目に話せたの?」

「いちいちうるさいですよ。さつさと二人の冒険者登録でもなんでもしとけ」

「口ワツル!!はあ、でも冒険者登録って言っても身元不明の二人を冒険者登録させるほど私の職位高くないんだよ?」

「先ずはほら、ファミリアとかに入れてもらえるようにしたらいいと思う」

「あやふやだなあ。そっか、ファミリアかあ。ロキファミリアは、アテネは入れてもらえそうだけど……」

「えっ?俺は?俺は?なんでアテネだけは入れるの?」

「んー、アテネは見た目が良いからねー。ロキ様ならもしかしたら入れてくれるかもなあって」

「ふふん、私の可愛さが認められた」



「見た目だけだよ。中はゴリっ「フンツ!!」……ゲブラツ!!」

余計なことを言おうとしたアベルの腹部に見事なアテネのブローが決まり、アベルは奇声をあげて沈む。

「んーと、でもそうだったら。私だけ入るわけもいけなくなるし、ちよつと困るかなあ」

そして何事もなかったように、会話を続けるアテネ。

「何事もなかったように……こわっ」

「何か言った?」

無言の圧力、これが強者ですら敵わないという覇気か。

「いいや、なにも」

「アルト君が押されてる珍しい」

「ミイシャさんうるさい。それもそうか、片方だけは入れても意味ないか……あつ、ちようどいいところがあった」

「アルト君まさか……」

「そう、そのまさかですね。いや、私も本当は嫌ですけど、この際仕方ないでしょ」

「今は気難しいと思うけどなー」

「ままつ、なんとかなるでしょ」

未だにダメージが残ってるのか顔から床に寝転がったままのアベルを肩に背負って

ギルドから出ていく。

「アテネ?」

「どうしました?」

「敬語はなんか気持ち悪いな。ほら、私も敬語じゃないし、敬語外していいよ?。」

「そう?じゃあ、何か?。」

「今から行くところは私が元々居たファミリアの主神のところなんですけど、少し気難しいというか今は心が不安定だからあんまりなんだろう、反抗とかしないでほしいなって。多分苛立つこと言われると思うけど。」

「なんか、ちよつと心配だなあ。それで、ファミリアってなんなの?。」

「んー、ファミリアっていうのは。そうだね、神様一人に冒険者が集まった場所みたいなの。神様達はその冒険者を自分の子供、家族と呼ぶんだけどね。」

「えっ?。」

「どうしたの?。」

「いま、神様って言わなかった?。」

「言ったけど、もしかしてアテネ達が住んでたところは神様とか居なかった?居るには居るけど姿は見えなかったりした?。」

「えっ、あつうん。そんな感じ?。」

「んー、まあ神様も信仰が必要だし、アベルから聞く限り、神様達が姿を出さないほどニホンの神秘性が薄れているんだと思う。だから神様達が見えない……のかなあ多分。」

「そうなんだ。私にはわからないな。」

「んーまあ、とにかくここには神様達が居るから接し方は気を付けてね。さてと、そろそろというか着いたか。ここが私の元・主神のファミリア。カーマファミリアだよ。」

「おっきい。」

「まあね、カーマ様一人にしては大きすぎると私自身最近思ってる。」

「へえー。」

ずっと屋敷を眺めてる訳にもいかないので、屋敷の扉を開けようとしたその瞬間

扉が独りでに開き、屋敷の中からなにやら妖しげな光「……ガッ!!」

何かが頭部に当たり、そのままアベルを背負ったまま地面へ後頭部から激突する。

「アベスツ!?!」

「えっ!?!えっ!?!えっ!?!」

「アアルウトオ……ツ!!今回は本当に許せません、その命をもって罪を償いなさい」

「えっ!?!なに!?!何が起きて!?!アルトに矢が刺さって……ええ!?!」

「あっ、これ矢だったのか。イタタ、あの私でも頭に矢なんて刺されれば死んじゃうんですけど」

「殺す気でやりましたから」

「なんですその私への殺意。嫌ですよまだ死にたくないに決まってるでしょ。そもそも私が死んだらカーマ様どうやって生きていくんです?天界に帰るんですか?」

「くっ!!……殺すなら殺せっ」

「カーマ様……」

憐れみの目で、小さな状態のカーマ様を見る。見てしまう。

「それで、その貴方達は誰です?」

「ああ、そうでした忘れてました。この二人、といっても一人は沈んできますけど、ファミリアに入りたいんだって」

「……ファミリアに……ですか」

「どうです?カーマ様?」

「……嫌です。お断りします」

「何ですか……昔はあんなにファミリアの団員を欲しがってたのに」

「……ツ!!いいえ、いいです。そもそも私のところに連れて来なくてもいいでしょう?貴方の今の主神のところでもどこでも連れていけ」

ばいいでしょう……もう来ないでください」

ボタンツと、屋敷の扉を乱暴に閉められ。  
そのまま屋敷から追い出されてしまう。

「あー、えつと。とりあえず、アベルを休ませよつか。宛は他にもあるし」

「大丈夫なの？」

「うん、まあ。ちよつとだけキツイかなうん。大丈夫だよ」

「そっか……」

悲しそうに、屋敷の方を見るアテネ。  
何か思うところがあるのだろうか。

「ハッ!?ここはいったいどこ!?!」

そんななか空気を読めない起き方をするアベル。

「このっ!!バカアベルツ!!」

「ちよつ!!なんでなんでなんでつゴフツ!!……た、タコス……  
ガクツ」

またもや綺麗に今度はラリアットが腹部に決まり沈むアベル。可  
哀想に……

この二人が居ると、悲しくなるなんてことはなさそうだ。



「バカつ、本当にバカです。何にもわかってない……っ。バカ」



クロスオーバー杯没ネタ      SAOXこのすば      ク  
リス

日々、神に祈りを捧げ欲を禁制し続けるそんな日々。  
バイトと称したこの修道女生活に新たな変化を見せようとしてい  
た。

変化の兆しである、それを手に取る。  
触って持ち上げて見てみるだけで、ワクワクしてくる。

鼓動が早まって、頬が吊り上がってダラしない顔をしているのはわ  
かる。

それじゃあ、いってみましょうか！

「リンク・スタート！」

胸踊る冒険と、ちよつとした恋とかしたりして……なんて楽しみに  
していた筈なのに、筈なのに。

『プレイヤーの諸君、私の世界へようこそ』

「どうして、どうしてこうなっちゃったのおお……っ!？」

私、思わず泣いちゃいました。

▽▲▽▲

どうにもこうにもする訳にも行かず、レベルを上げることには。

私が選んだ武器は短剣、ダガーやククリとかが分類されるジャンル  
武器ですね。

この武器は必然的にヒットアンドアウェイ。相手の懐に入って攻  
撃、相手の攻撃を避けて攻撃を繰り返すのが定石です。

しかし、それをひっくり返してくれるのがこのゲーム特有のシステ  
ム。『ソードスキル』上位ともなれば、竜巻的なのを飛ばせたりするそ  
うです。

今の私の手持ちアイテムは、主にモンスターからドロップする毛皮  
だとか。

手持ち金、ここではコル通貨でしたっけ。それも溜まり始めてきました。

デスゲーム開始のあの日から、寝ずにとは言いませんが精神と体力の続く限りレベル上げに勤しんでいます。

初日はみつともなく号泣してしまいました……。

それも、もう過去のこと。私はそんなに弱くありませんってね。

「おっ、クーちゃん。今日もレベリングかな？」

そこでふと、後ろから声を掛けてくるのは頬の三本線がトレンドマーク。

通称《鼠》のアルゴ。この世界で情報屋を営む彼女は攻略者にとって大変貴重な人材と言える存在です。

そして、この世界で初めて出来た私の親友とも言えますね。

「あつ、アルゴ！元氣してた？」

「ンー、まちまちだナー。それでも情報屋って大変なんだゾ？」

「その割にはニコニコしてるねー？いいことでもあったのかな？」

「強いて言えばクーちゃんに会えたことかな？」

「えっ……あつ、そう……ですか。えへへ」

不意に言われた言葉に、少し照れて素が出てきてしまいました。

アルゴはどんな顔をしているのかと見れば、悪戯が成功したと言うようにニコニコと、とても楽しそうにしていました。

「アルゴ酷い……！私の反応を見て楽しんでるでしょ!？」

「にやハハハハ、気のせいだよ」

「もう酷いなー、ところでアルゴさ」

「ン？どうした？情報なら幾らか貰うヨ？」

人差し指と親指で小さい輪っかを作ってこっちに見せてくるアルゴ。

情報屋からは情報を買ってことなんでしょうね。

「それはわかってるから。第1層のボス戦そろそろなんだってね。アルゴは参加するの?」

「ンー、その程度ならタダで教えるケド。そうだな参加しないかな。そもそも戦闘向きのステータスじゃないんだヨ」

「なるほどなるほど、そっかそっか。ならいいんだけど、私は参加する予定だったから」

「ふーん、気をつけなヨ。ボス戦といっても、そこらのゲームとはわけが違う」

「わかってる、第2層で会ったらまた仲良くしてねー？絶対だよーアルゴ？」

アルゴのトレンドマークの三本髭が描かれた頬を手でこねくり回してアルゴに迫る。

ゲームとは思えない、人の柔らかかさと暖かさを感じて少し嬉しくなる。

アルゴは、猫みたいにうにやうにや悲鳴をあげて、何とか私から逃れようとしています。

悲しきかな。一応ゲームの世界、レベルによるステータス差は覆りませんでした。

その後、数十分程揉みしだいてアルゴがぐったりしだした程度で手を止めることにしました。



なんとも、気まずいことこの上ない現状を打破するには私はどうしたらいいのでしょうか？

第1層ボス攻略、そのための話し合いと人が幾人か集まり作戦に合わせてパーティーも決まっていきました。

そして、私が居るパーティーが問題。

リア充カップルが居ました。

はい？死？死ですか？当てつけですか？近所の人からは美人さんねとかいっつも言われてるのに恋人が来るどころか告白される気配すらない私への当てつけ、なんですか？

嫉妬と怒りは置いておきまして、パーティーを組んだ私達はいまパーティーの1人の黒髪の剣士の借りる部屋に居座っています。

しかも、相手は男性。なんというか、初めての異性の部屋なのにも感じたりしませんね。やはり、リア充だからですか？

またしても、ふつつつと湧き上がってくる憎しみの感情を抑え込み



つつ、いまの内心状態に合わせたかのように部屋にある唯一のソファに乱暴に座ります。

「わ、すごい座り心地いい」

ソファの座り心地の良さに思わず口から漏れてしまった言葉に、黒髪の剣士はニヤリとこちらを見て笑っていました。

「……なに？」

「あつ、ああいや。さっきまで気分悪そうだったから……なんというか」

「……そう」

気分が悪そうと言われて、まさかリア充パーティーに入ったから……などと口が裂けても言えるわけもなく、ただただ素っ気ない対応の悪いことをしてしまい。

何処と無く、私と剣士の間に気まずい空気が流れる。

剣士は困ったように頬をかきながら、部屋の隅を見つめていました。

そこで急に流れる、ドアからのノック音。

私はすわ救世主現れやがりました!?!と少し口の悪い心理状況でその音を聞いていました。

しかして、部屋の主ではない私が勝手に開けてもいい訳もなく、この部屋の主である剣士の方を見ます。

剣士はというと、なんとも言えないような苦虫を噛み潰したような表情をしつつ、なにかに悩んでいる様子だった。

悩む時間は数秒足らずであり、ようやく決まったのか部屋のドアを開け放ちました。

そこに居たのは私にとっては意外な人物。

先日、意味深な別れをしたばかりの鼠のアルゴでした。

どうやら、救世主などではなく私の首に鎌をかける死神のようです。

アルゴはどうやら部屋に入ってきたタイミングで私に気付いたらしく、これまた同様にあちらも意外な人物を見るように目をまんまる

と開けさせていました。

「あ、アルゴ……昨日ぶりだね。あは、あはは……」

「なんでクーちゃんがキー坊のどこにいるんだヨ」

「……パーティーを、組んだからかな？」

「……そういうことを聞きたいんじゃないんだよナー」

「あはは……」

ジトーとした音が聞こえそうな気がする程、薄目に目を細めたアルゴが私を睨んできます。

アルゴはなんだかんだ言っつて優しいから、きっと私のことを心配してくれてるんでしょう。男性とパーティーを組んでるから、とか。

「キー坊、ちゃんとクーちゃんを守れヨ？」

「えっ、ああ……それで、一体何の用だ？」

「話の逸らし方がヘタだナー？まあそれはいい力、話しても」

どうやらアルゴは黒髪の剣士に用があるようで

---

SAOXこのすば

主人公

エリス

アバター名

クリス

ステータス

レベル89

100割り振り

筋力 10

耐久 10

知力 10

敏捷 15

器用 15

運 40

スキル

短剣

隠蔽

追跡

強奪

暗視

疾走

跳躍

急所会心

捕縛

麻痺スタン

装備

短剣デイスコルディア

神姫の首巻き

四葉クローバーの指輪

韋駄天ブーツ

ハイテイングケープ

盗賊の右手

強奪の左手

水流石のピアス

エリス・デイスコル・リーナ

日本にある教会でバイトと称して修道女（シスター）として働く

銀髪の美少女。高校2年生

愛し人はアルゴ こと 帆阪朋

好きな物 ワクワクすること アルゴ

嫌いな物 仕事

性格 温厚で生真面目。頼まれた仕事は断ることが出来ない。そのためストレスが溜まりやすい

しかしその裏、ヤンチャなところがあり男のロマンというのがわかる

熱中するとその1つに突き進むタイプ

昔から運が良かった筈なのだが？

## クロスオーバー杯没ネタ②

蝉も鳴く、真夏の朝。さんさんと輝く日光は容赦なく僕の肌を焼いていた……。

暑い、死ぬほど暑い。

カーテンを締め切つてなお、暑い。死ぬるよこれは……。

部屋にあるエアコンは見事にぶっ壊れて、御臨終なされた。

理由は多分、昨夜の雷での一斉停電。電気製品がいくつかぶっ壊れた。

しかし、なんとか故障した電気製品での唯一の生き残り達の1つの扇風機のお陰でまだマシである。

因みに冷蔵庫もぶっ壊れて、中の食材と腐ってアイスは溶けてた。

これには流石にシヨック、涙が止まらなかったよ。

テレビはなんか生き残つてたから、テレビを観ながら同居人が起きてくるのを待つ。

さて、いまは絶賛夏休み期間中。

夏休みとはつまり、学生にとって喜ぶべきイベント。

学校が休みになるから、うちの同居人に関してはその限りではないようだけど。

頭がおバカさんだと補習があつたりする、同居人に関しては頭の出来というより普段の素行が悪すぎるからだと思うけど。

因みにここは学園都市。日本に存在し、周りとは驚愕の科学力の差を見せつけられる場所。その人口のほとんどが未成年の学生であり、その学生達には秘密がある。それは、誰かしら自身の超能力者であるということ。

レベル0からレベル5まで、力の強さごとに区分分けされたソレは一般人から見れば顔面が蒼白ものなものも多い。

レベル5ともなると、本格的にヤバイ。1人で国を滅ぼせそうな勢いがある。

まあ、僕はその中でもレベル4の力を持ち得ているんだけどねー！  
それでもこの暑さには負けるけど……。

「ていうか、この暑さで良く寝てられるな。あのバカ……死んでたりしないか？」

チラツと部屋の扉の方を見ていると、不意に扉が音をたててゆつくりと開く。

そこには汗をかいている男が、絵面キツツいなあ。

「あ、あつっ……なんだってんだこの暑さはよお……」

ダルそうに部屋にリビングに足を踏み入れてきた、この男。僕の同居人にして相棒的存在、かもしれない。

名を城野 裕也と言う。水流操作系の能力を持つ彼は現在レベル3で一般人よりは強め。

「エアコンがぶっ壊れた。多分お前の部屋のも」

「ああん!?なんでぶっ壊れてんだよ!」

「昨日の雷の停電。多分あれのせいかな」

「雷イ?……まさか、またあの女の仕業か!」

「あの女って、誰」

「ほら、こんくらいの、どこだったけか、トキワトキなんたら……えーと」

「常盤台中学?」

「ああ、それぞれ。そこんとこの、レベル5居ただろ。前もおんなじようなことやりやがってんだぜ?絶対今回もアイツだね」

「ああ、御坂さんね。どうだかなあ、彼女そこまで考えなしじゃないと思うけど、どうすんの?文句でも言いに行くのかな?」

「あたりめえよ!もう、コテンパンのボッコボコにしてやんよ!」

「出来たらいいねー、じゃあ行こうか。ついでにアイスでも食いに行く」

「おっ!いいねー、賛成賛成!」

さつきまで不機嫌そうだった、彼はアイス一つだけでここまで元気になるのだから幸せなものだろう。

僕たちは、女子中学生に喧嘩を売りにいくために外へと出るのであつた。

「しっかし、あのガキ。見つかりやしねえ」

「そうだねー」

アイスを食べながら外をブラブラと歩き回る男二人、外は洒落にならないほどの熱と酷い人口密度のせいで蒸し暑い。

僕は日傘を差して日光を遮って、傘のおかげで人も避けるので裕也よりは暑くない。

裕也に関しては既に汗でびしょびしょになってしまっている。

「見つからないからって常盤台に正面から入ったりしないだね。僕の立場まで危うくなるから」

「……………そんならいわかってる」

「いま、大分間が空いたね？考えてたね？正面突破しようとか考えてたよね？」

「か、考えちやいねえさ……………あ、ああ多分な」

ジツと睨むが、目をそらすばかり。

コイツ……………

「あら、アンタたちそんなところで何してんのよ」

不意に声を掛けてきたのは、まさにいま話のタネとしていた御坂さん本人だった。

彼女は夏休みだと言うのに制服に身を包み、こんなクツソ暑い外でも分厚そうな靴下？ソックス？かを付けていて、見ているこちらの方が足が蒸れてく感じがする。

「てめえ！出やがったな！こんのクソガキ！」

「あらあら、なにになにー？また私に喧嘩売ろってわけ？やめときなさいよ、いい加減。そろそろ丸焦げにされてもおかしくないわよ？」

波紋の呼吸法と心の壁のタッグで学園都市を生き残ることにした  
(仮題)

ジョジョの奇妙な冒険 & a m p ; エヴァンゲリオン  
とある魔術の禁書目録

主人公

城野 裕也 (ジョセフ青年期モデル)

キノ ユウヤ

男 17歳

身長 186センチ

体重 78キロ (筋肉分)

特徴 黒髪、細マツチヨ

能力 波紋水流 レベル3

主人公2

赤潮 葵 (渚カヲルモデル)

アカシオ マモル

男 17歳

身長 168センチ

体重 59キロ

特徴 白髪、赤目

能力 心理領域 レベル4

能力解説

オーバードライブ

波紋水流 (ジョジョの奇妙な冒険参照)

水流操作系の能力。

自身の血流を操作し、波紋を作り出し太陽の波紋と合わせることで  
擬似的に太陽エネルギーを得ることが出来る

その他にも水分を持つものに波紋を流すことでそれにもエネルギーを流すことができる。攻撃方法は主に物理。



A・T・フィールド

心理領域

特殊系能力。

現在、解明は不可能な状態の能力。

先天性能力であり、学園都市に来る前から持ち合わせていたもの。  
学園都市に来てから能力が強力になる。

六角形に展開するバリアのようなものを展開し、相手の攻撃を防ぐ。

バリアの強度は使用者のメンタルに属する。

神様転生杯作品 汚物

神「こやつは、死んでしまったか」

神2「面白い、コイツをラノベの世界に転生させよう」

神3「それはいいな、ならこの『転生したらスライムだった件』の世界に転生させよう」

神4「いいな。なら主人公のスライムと同じ力を与えよう」

神5「ステータスも上げよう」

神6「神にもなれるようにしよう」

神7「素晴らしい」

神「それでは、最後は各々の能力を与えよう。それでいいか？」

神達「ああ、それでいい」

神「それじゃあ、転生させるぞ！」

どうぞ見てってやってください  
自己満足小説です  
面白いものはわからないー

紹介 ページ1

どうもよろしく  
今回からss始めるメギドラです。  
いろいろ設定がぶっ飛んだりします。  
転スラだけでなくいろいろなアニメや小説の二次小説をやっ  
ていきたいとおもいます  
宜しく願います

プロローグ ページ2

俺、(本名)は死んだいや比喻でもなんでもなく、物理的に本当に死  
んだのである。

死んだあとにこんな世界にくるとはおもはなかったけど  
回想

俺「なあー」

「何だ？」

俺がそういうところたえるやつがいたここはこいつをモブAと仮定  
しよう

俺「いやよーなんかなこう面白いことおきかないかなーつとおもって  
よー」

モA「何だよそれ、なにフラグ？」

俺「嫌そういうわけじゃないんだけどフラグがたったんならなんか面白いこと起きんないかなー例えば俺が死んで異世界に行くとか」

俺がそんなことをいうとモブAが

モA「なんだよ中2病か？」

とバカにするので俺は反論し

俺「ちげーよバカ！」

といった

モA「何だそうかまあそんなこと起きんがなー」

俺「わかんねーだろ、おっと分かれ道だじゃあ俺はかえるわー」

モA「おっ、じゃーなー」

そういつて俺はひとりで歩き出した

俺「何だよ何か起きねーのかよー」

その言葉を待っていましたがといわんばかりになんと居眠り運転手がくるでわありませんかだがこの時俺はこの時気付くのが遅くあつという間にしかれた。

このとき俺は色々な事を考えていた

(あー本当に死んじまったよー、はー身体中がいてー)

『スキル痛覚無効を手にいれました』

(ン、何だ痛みが和らいだなー、こんなところで死ぬんだったら人生じゃなくて神生でもいきたかったなーなんてな)

『アルティメットスキル、神となりし者を手にいれました』

(あー腹へった何か食いてーあーそういえばずっと料理作ろう作ろうと思つて作つてないなー死ぬんだったら作つてればよかつた作りてー)『ユニークスキル作成者&amp;料理人を手にいれました』(つてさつきからうるせーよ！くそ死ぬのかこんなにも辛くて寂しいなんて話し相手が欲しい！)

『話し相手ピースキルの作成に失敗しましたおわびとしてユニークスキル大賢者授けます』

(だからうるせーよ死ぬときぐらいゆつくりさせてくれよ)

回想終わり

俺「でっ俺は死んだのにいきてるなんですか？」

『それはマスターが死に転生したためです』

そんなことをいうとどこからか声がしてきた

俺「えっ?」

プロローグ終わり

体の異変 ページ3

俺「はっえっ?」

俺が突然聞こえたというよりは頭の中で響いた感じがして少し戸惑ったあと正気を取り戻した

俺「えっ?だ、誰誰なんだー」

いやバリバリ正気を取り戻してなかった

こたえる者はいない

俺「なんだったんだ?もしかして死んだのも夢で俺は幻聴が聞こえてるのか?」

そんなことを思っていたがどうやらそうでないことを周りを見て理解した

俺「ってそんなわけないよなこの景色見たことねーしな」

そんなことをいっていると俺はある異変に気付いた

俺「:はっ?えっ?なんだこりやー」

見た目がもうほとんど女なのです元の顔が女っぽいわけでもないだからおかしいとおもった

そしてもうひとつ違和感があった草の感触がなぜか直に来るのだ

俺「へっ?まさか、うわーないわー体が女になってしかも裸ってないわーんっ?女?ちよちよとまでよ落ち着け俺まずは深呼吸だ」

スーハースーハー

俺「よし:ガハッやつぱり無いしかも女としてのあちらもないということはこの世界では俺、無性なのか?ま、まあべ、別に困らないしー

ふんだ！あつ自分の姿が女っぽいから言葉が少し女っぽくなってしまったー」

まあとりあえずそういう事はおいておくとしましたまず裸ではさすがにまずいからなにか着るものがあるな

体の異変終わり

スキル達 ページ4

俺「さてどうしたもんかうーん」

『スキル作成者をつかうと良いと思われます』

俺が悩んでいるとまた頭の中で何かがしゃべりだしました

俺「お前は誰なんだ！」

『私はマスターのスキル大賢者です』

俺「大賢者？スキル？」

『ハイ今マスターのスキルは4つありますそこに痛覚無効がはいり5つです』

俺「へー何かファンタジーっぽいな俺のスキルってなんがあんの？」

『1つ目は大賢者私です二つ目料理人です三つ目作成者ですそして四つ目は神となりし者です』

俺「何か最後凄くヤバイものをきいたがいまは着るものかどうかどうすればいい？」

『作成者をつかうといいです』

俺「んー？こうか？」

スキル作成者を使いますか？

yes no

そうでるとおれはyesを押しした

俺「おー何かでた今俺が作れるものか？まあ今は着るもの着るものーおーなんかあつた何々？『シヤツ』おーまあまあ立派なもの作れ

んじゃん作成つと」

スキルで作成すると丁度サイズピッタリとは言わずだぼだぼのシャツというか布が出てきた、ただ普通の布とは違い三つ穴がありそこに手と頭を通した

俺「んーまあ下も隠れるしちようどいいかー、さーてとこれからどうするかねーほかのスキルでも使ってみるか」

そういい俺はほかのスキルを使ったまは料理人これは作成者と相性がよくスキル同士をリンク？させた次に大賢者だが色々わからんが便利なスキルっぽいそして最後のスキルだ

俺「…どうするかつかってみるかー？おい大賢者やいこれをつかうとどうなるんだい？」

『詳しくわわかりませんがそのスキルを使うと神界にいけるよ  
うです』

俺「そうかじゃあいつてみるか！」

スキル達終わり

神界へレッツゴオー！ ページ5

ということをやってきましたじゃじゃじゃん

俺「何か神の世界だけあって凄いい神々しいなー」

俺がそんな呑気なことしていると後ろから大男が迫ってきました

(うわー明らかにめんどくさいパターンじゃん)

大男「おいお前」

俺「はい何ででしょうか？」

大男「貴様名をなんというっ！」

(めんどくさーあつくるしーここは適当でいいだろう)

俺「えーとわたくしめはえー…」

(あれ？どうしよう名前もともとの名前でもいいのか？)

俺「えーと私の名は…」

大男「もういいこつちで調べる」

俺「おい」

大男「なんだ」

俺「俺が言おうとしているときに止めんじゃねーよ殺すぞゴルア？」

大男「な、なんだきさまやる気かつ！」

俺「ああやってやんよー！」

アルティメットスキル 神となりし者

究極能力

発動！

直後俺の周りに炎の矢が数百本漂い始めた

俺「死ねゴラァー」

大男「な、なんだとや、やめろー」

ドーンといい音がして大男はきれいさっぱりいなくなりました

俺「やり過ぎたまあなんとかなるだろう」

神界へレッツゴォー！終わり

大賢者のキャラがリムルと全然ちがってきてる

最強ゲーマー『 ページ2

空「なあ妹よ」

白「な、に？にい？」

俺兄空、童貞、コミュ障、18歳、ゲーム廃人、ニート

俺の呼掛けにこたえた超美人さんは

妹白、コミュ障、ゲーム廃人、引きこもり

だった二人である今では俺達は人類種 イマニテイの王である  
空「この勝負勝てるか？」



白「わかんないけどぜったいにかつ」

空「おう！そうだなさすが自慢の妹だ」

そういうとおれは不敵な笑みで笑った

(本名)「あー暇だ暇すぎて死にそう2回目まあ死には

しないけど」

そういうと俺はまた歩き出した

(本名)「そうだ！違う世界に行こう！」

俺は長い時間と年月を賭けてようやく神の順位の上から2番目まで上り詰めたそこまでの力を得ると大抵の事は何でもできるのだ

(本名)「さーてとどこにいこーかな楽しそうなところがいいよなー」

そういうと俺はちようどいいところを見つけた

(本名)「ここが面白そうだねー」

そういうと俺は一気に空間をねじあげその世界へと飛び立っていった

最強ゲーマー『』終わり

神あらわる？ ページ3

(本名)「さてさーてきたはいいけど面白いやつはいんのかなー？」

なんだこの嫌な力はそうだこういうのはだいた  
い力の源に面白いマンガものがあるんだよねー

俺はそうおもい一気に飛び出した

『』達

ジブ「な、なんでしよう」

空「どうしたんだージブリール？」

ジブ「いえ、すぐく溢れんばかりの力を持った者が急接近してくるのでマスター」

空「そうかーそりゃーやべえな白！避難だ！」

白こくっ

だだだだ

ス「どうしたんですの？」

ジブ「ドラちゃんも早く避難をしてください」

ス「な、なにかあったんですの？」

ジブ「敵が来ます！」

ス「へっ、ひきやああーにげるんですのよー！」

だだだだ

ボタン！

ごくり

ズドーン

(本名) 「はい君がこの嫌な力の原因？」

ジブ 「そうだったらどうするんですか？」

(本名) 「そうだなーとりあえず血でももらおうかな？」

神あらわる？ 終わり

秘刀 吸血鬼龍刀 ページ 4

(本名) 「さーと俺の愛刀の出番だな」

なんですかあの刀からドラゴニアと同じ力いやそれ以上の力が

(本名) 「どうしたんだーびびっちゃったかー」

ジ 「そんな分けないでしょうあなたごときすぐにバラバラにして首をちようだいしますから？」

(本名) 「そうでなくちゃー、ただどこここではそれができないんじゃないかないかー？」

ジ 「くっ！それでは盟約に誓ってのゲームをしましょう？」

(本名) 「わかったじゃあ…」

「アッシエンテ？」

『ルールは単純戦って負けたら負けだ』

(本名) 「こっちからいかせてもらう」

ジ 「どうぞ」

喰らえブラッディーレイン

深紅の雨

ジ「そのていどでございますかく次はこちらから一発で仕留めます？」

てんげき

天撃

(本名)「効かないな」

ジ「なっ、私の天撃を鉄屑ごときに切り裂かれるなんて」

(本名)「決着だ

ザシユツ！」

秘刀 吸血鬼龍刀終わり

(注) この作品は完結していない状態ですしばらく更新されていませ  
ん「？」

神登場！ ページ5

空「やべえなー凄い音だよ」

白「にい こわい」

白がそういうので俺は白が安心するような事を言う

空「大丈夫だ兄ちゃんがっついてる」

白「うん」

ス「なんでそんなに落ち着いていられるんですのよーっ！」

空「これが落ち着いてるように見えるか？」

そういうと俺は何気なく天井を見たとそこにはまるで悪魔の

ような何かがいた

「は？」

それは俺だったかそれとも全員だったかわからないが俺の口からはへんな声が出ていた

・

俺は上から下りてきたただけなのに下にいた人間3人がいきなりは？なんか言い出したよ少しテンション下がるわー

(本名)「おーいお前ら大丈夫かー？」

やっと硬直状態から解けたのかその3人が反応を表した

空「誰だお前はいきなり人の家ん中にはいつといてこんなにぼろぼろにしやがって」

(本名)「んー？あーすまないすまない

いやーここまで壊す気が無かったんよ？」

ス「そつそもそも10の盟約に縛られているこの世界で人の物を壊せるんですの？」

空「……たっ確かにそういえばお前はなにもんだ？」

(本名)「俺？俺はねー神様& a m p ; # 1 2 7 9 2 5 ;」

「はっ？」

またもやおなじような声が壊れ果てた城のなかに響いた

兄妹対決始まる！ ページ6

(本名)「おーい？きこえてますかー？」

空「……はっ！あー、うん聞こえてる」

(本名)「そうかよかったショック死したかとおもったよー」

空「てかなんだよ神って！なんだ神様ってのは一人だけじゃねーのか！」

(本名)「あーごめんごめん実は俺ここの世界の神じゃないんだー」

白「じゃあべつのせかあいのかみさま？」

そつちの黒髪の違って硬直から少し遅めに抜け出した髪が白い口リツ子がいった

(本名)「まあーそういうことだな俺は他の世界の神様でこの世界に遊びにきたってわけなんだわー」

空「そういうことかわかったお前が百歩譲って神だとするじゃあ神ならこの城直せあとジブリアルはどこだ？」

(本名)「いやだね直してほしいんならこの世界のルールにのっとってやろうじゃんか？」

空「それはこの俺達『』を相手にするって事だな？」

(本名)「そういうことまあ今そつち達が俺達って言ったって事はそこの白いのもはいるのか」

空「ああそうだ良いか？」

(本名)「そうかならこつちもスケツトを呼ぼうと 　すまない今から  
きてくれるかOK?わかった  
すまないが少しまってくれないか?」

空「わかった」

数分後

バリガギガリ

ドーン!

(本名)「きたか俺のスケツト妹のリンだよろしくな」

リン「よろしくども」

—————

ヤバイ今回セリフしかないw

今回初登場

リンちゃん

どんな姿か

髪 赤色

目 赤と青

見た目10代前半ぐらい

ある日常? ページ1

カズマ「うがあああああああ！」

アクア「どうしたの突然あつ、とうとうカズマの頭もおかしくなつた病院いく？」

カズマ「だまれ！頭がおかしいのはお前のほうだ！」

めぐみん「どうしましたか？」

ダクネス「どうかしたか？」

アクア「かズマがあ、かじゅまがー私の事本気でわたしの頭がおかしいってー！」

めぐみん「そうですか」

ダクネス「カズマ罵るのなら私にしてくれ！」

カズマ「だまれ！この変態がつ！」

ダクネス「はひゅんっ！」

めぐみん「どうしたんですかカズマそんなにおこって？」

カズマ「今俺達には借金がたまっている、アクア逃げるなよ」

アクア ビクッ！

カズマ「借金がたまっているだからクエストにいつて稼がなければいけないがこのパーティーではバランスが悪すぎる」

めぐみん「バランスなど関係ありませんよ私の必殺魔法、爆裂魔法



をくればば塵一つ残さず消し去ってあげますよ」

ダクネス「私の固さがあればどんな攻撃もカズマ達には行かないぞ」

アクア「しかもこの崇高たる水の女神がいれば勝ちも必然よ、ほらわかったらシユワシユワの一杯でも持つてきなさい！」

カズマ（もうだめだこいつら）

カズマ「とにかくこのままじゃ駄目だメンバーを勧誘する」

めぐみん「どんな人を勧誘するんですか？」

カズマ「まあまずは遠距離がほしいなあそこにチラシを貼っとけば誰かくるだろ」

数時間後

アクア「なんで？なんで誰もこないのー」

カズマ「まあ待て気長に待とうぜ？」

めぐみん「そもそも私という遠距離攻撃がいるにも関わらず他のやつを勧誘しようとするのが悪いのです」

カズマ「はあ？お前一回魔法つかったら動けなくなるじゃねーか！」

??「すまないがここでパーティーに入れさせてもらおうと聞いたが？  
少しいいか」

カズマ「おっ、やっときたな」

めぐみん「ちっ！」

まさか俺は思いもよらなかったこの出会いが俺達の運命を変える  
とは思わなかった

—————

はいどうもーメギドラです

バリバリ初回でエンジン前回のこのすばメンバー  
さあ出てきた謎のキャラこれからどうなるやら

## 転スラ×帝都聖杯奇譚

「どこだろう……ここ」

現在、ボクは原っぱに居ました。

おかしいですね。さっきまでお菓子を食べながら学校から帰宅途中だったのに。

なんでか、こんなところに……はて？

「とにかく、気を落ち着かせてお菓子でも食べて……もぐもぐ」

それにしてもなんで、こんなところに居るんだろう。

もしかしたら異世界なんて、もしくは外国の人の召喚魔術みたいなので呼び出されちゃったとか……わくわくしますね。

あつ、お菓子が終わってしまった。

残念です。甘いのが足りない、このままでは発狂してしまう……近くに街があれば買えるでしょうか？

財布もあるみたい、鞆もありますし。ここから移動しないことにはなにもなりませんよね。

「頑張るぞー」

片腕を空へと突きだして、掛け声と共にボクは新たな地を踏みしめるのであった。



「……おかしいですね。なにもないです」

ずっと歩いているというのに何も無い

そもそもここはどこなんだろうか。本当に街はあるのか、それさえ不安になってきた。

地図があればいいのですけど。

『聖杯からの情報を魔力で出力、地図を作成……完了』

「うわわわわっ?!急に頭の中に声が……」

地図を作成したって言ってましたね………ほんとです。中々慣れない感覚ですけど目の前に地図が見えます……ARみたいですよ」

何故こんな風いきなり地図が出てきたのかわかりませんが、これを頼りに色々回って見ましようか。

最初の目標はこの国ですね、どんな国でしょうか。お菓子があればいいんですけど



あれから数ヶ月が経ちました。国には着きましたが、お菓子などの目ぼしいものは特にはない状況。

お金も日本円は使えませんでした。そのことからここは日本じゃないと言ったことがわかりました。

国名を何度か聞きますが聞き覚えのない国で、恐らくボクが居たところとは違う世界なんでしょう。電柱一つありませんでしたし。

それとその国で女の子を拾いました。捨て子のように最初は放っておこうと思っていたのですが、何故かボクのあとを着いてくるので

引き取ってしまいました。

着いてきて何度かは撒いて、そこに置き去りにしたりしていたのですが……ボクも住むところもお金もまだ無かったので。

それからどうにか国から働きぶちを得て、賃金を得たりしながらなんとか生きたり。

そういえばあの女の子はどうなったのだろうか、また女の子が居た場所へ行くと女の子は倒れていており流石に居たたまれなくなってしまうのでそのまま引き取ることにしました。

最初の頃とは違ってお金もありますし、住むところも得たので仕方なくです。

それで拾ったのはいいのですが、このままではなにかと不便であろうと言うことで自己紹介をしました。

どうやら女の子に名前がないらしいのです、不便なので名前をつけてあげることになりました。

ですがボクのネーミングセンスは絶望的、ならばそうだとボクがやってたゲームのキャラの名前を付けようと考えた結果。

付けた名前は信長にしました。見た目も少しノツブに似ていたことですし。

名前をつけてあげた瞬間に何か酷く目眩と虚脱感が少しありましたが、そのあとは特に不便もなかったので、ご飯を食べらせたりしました。美味しそうに食べててすごく和んだ気持ちに……。

何故かボクのことを母上と呼ぶようになりました。意味がわかりません……。

ボク、男なんですけど？



ノツブはそのあとも可愛くて成長して、少し身長も伸びました。拾った当初は言葉も何かと拙かったですけど、教育して喋れるようにさせました。

ノツブは、教えればなんでもすぐ覚えてとても賢くて可愛いです。ボクのことは母上母上とずっと呼んでますが……。

その国に滞在してから1年が経とうとしているのですが、そこで初めて魔法と言う存在を知りました。

ノツブを育てながら仕事を普通に行っていたらここがファンタジー世界だと言うことを忘れていました。

魔法を使える人が居るらしいとのことなので、話を聞いてから家へと帰りました。

早速魔法を家の外で試してみようと、頑張つて使おうとしましたがコツが上手く掴めなかったのか使用できませんでした。

ノツブはなんか火を出してました。流石ノツブだ。

魔法については一旦忘れることとします。



あれからノツブも更に可愛く育って、口調も大分変わってきました。

オドオドとしたようなしやべり方から勝ち気あるしやべり方……それでもノツブは可愛いので頭を撫でてあげると前のようなノツブに逆戻りです。やっぱりノツブは可愛いです。

そして未だにボクのことには母上呼びです。何故です？

そしてこれまた聞いた話なのですが、スキルというものがあるらし

いのです。

ボクにもスキルがあるみたいなので、どうにか確認しようと思いましたが……確認が出来ませんでした。意味がわかりません

ノツブはなにやら変な声が聞こえたらしく、そこから更に火が炎に変わってたり体に炎を纏わせてました。暑いらしいです。

流石ノツブだなと思いました。



ノツブも大分、大人の女性へと……行かずいきなり成長が止まりました。

ボク的には可愛くていいのですが。身長が低いままだと少し可哀想です。

特段本人は気にしてないようでしたが。

ボクより低くないですかノツブ？

少しノツブの身長をバカにしていたら後ろから蹴られました。

スツゴい痛かったです。女の子の体からどうしたらそんなに力が出るのですか……。

ノツブを拾ってから2年の出来事でした。

本人にも聞きました、些か成長が早すぎないかと。

そうすれば、なんだそんなことかと当たり前前にノツブは自身は悪魔と人間のハーフだと言ってきました。

母は初耳ですよノツブ、そういうことはもつと早くから言ってくさい。

最近母と呼んでくれなくなりました。

母は悲しいです……。これが子離れ……。

△▼△▼

そろそろこの国からも出ようと考えていました。当初の目標はお菓子を買いに来ただけだったのですが……。それが終われば国を回ろうと考えて居ましたので……。

次はどこに行きましようか？

△▼△▼

ノツブが怒りました。怒って家を出て行ってしまいました。

ノツブも一人の立派な大人？となったので一人立ちさせようと思ったのですが……どうやら本人はまだボクと居たかつたらしく怒ってしまいました。

私の気持ちなんて何もわかってない！

なんて小さい頃のような物言いと言われてしまったら引き留めることも出来ませんでした。

どうしましようか……。ボクはどうしたらいいのでしょうか？

△▼△▼

ボクは旅の支度をして荷物を纏めて、家で待っていました。

このままもしかして、信長は帰ってこないのではないのでしょうか。

そう考えると胸が苦しくなって居てもたつてもいられなくなり、家



を飛び出して信長を探しました。

今まで行った場所、お店を走り回り人にも聞き回りました。

ですがどこにも居らず、見た人も居ないと言われてしまい途方にくれて腰を降ろしてしまう

信長を拾ったときは言葉も発せず、食事を見るやいなやかぶりつくような子だったのというのに、今では身長は若干足りないけど大きく綺麗に成長して、女の子なのに近所の男の子に圧勝するし、下手したら大人にだって負けはしない、強い子にも育った。

最近はおクからも離れぎみだったから、そろそろボクの役目は終わったかななんて……。そう、思ってたんですけど……

元々は罪悪感から拾っただけだし

一緒に住む人が欲しかっただけだし

自己満足でしかないんだし

喋る相手が欲しかっただけだし

愛着がない訳じゃない、短いようで長い時間を一緒に過ごしてきた。今では自身の娘同様なあの子が嫌いなわけじゃない

でも、ボクと一緒に居るよりここに残った方がいいんじゃないか……そう思ったり

もう近所には顔は知られてるし、仕事だつてすぐに見つかるだろうし、家だつてあのままあそこを使ってくれたっていい。

でも……。あんな風に言われたら手離したくなってしまう。

ボクの可愛い愛し子……、前までのボクにはなかった存在。  
どうしようもなく、離したくない。

そう思えば、ボクの足は思うくままに動き出した。



私は、ここであの人に拾われた。

あの人は私の命の恩人で、最愛の人……。

恋愛だとか、恋だとかそんなのじゃない。

気づけば1人だった私を……身寄りもない私を拾って育ててくれ  
たあの人のことを本当の母親だとそう感じてた。

あの人は男の人だったけど……。

うっ、そう考えると昔の自身の行動がスゴく恥ずかしいっ！

「……こんなところで何してるんだろ、私」

ずっと一緒に居られると思ってた。

ずっと一緒に居ると思ってた。

なのにあの人は私を……。ううん、違うって本当は分かっている。  
でも、そう思っちゃおう。

捨てられたなんて

本当はそんなわけない……。何か思ってたことだと思う。

あの人は私のことをいつも思っていて行動してくれてた。だから、だから今回も……。

「うっ、ひぐっ……嫌だよ。それでもダメだよっ……！まだ一緒に、居たいよ。お母さん……！」

……このまま、行っちゃうのかな。  
私を置いて……行っちゃうの？



「はあっ……はあはあ。こ、ここらへんの筈でしたけど……。もしや、外れですか!？」

絶対的な自信と、選択肢がここだけしかないこともあり、思わず歯噛みしてしまいます。

ここにいないとなると、本当にもう選択肢はないんですが……泣き声？

そっとな壁の向こう側を覗く。

「ひぐ、ううっ。酷いよ、お母さん……」

はうっ!!お、お母さん!?

か、可愛い……!?

じゃ、じゃなくて。そうじゃないでしょ。

しかし、どうすれば、なんと声をかければ……?

今更ごめんなさいだなんて。言うのもなんか……違う気がしますね?

「このまま泣かせておくわけにも……どうしたものでしょう？」

「おかあ……あつ、違って。母上なんでここにいらっしゃるんですか!？」

「おつと……先に気づかれてしまいましたか」

「な、なんでここに……」

「なんでって。迎えに来たんです。ほら、ノツブたら寂しそうにして  
いるものですから。仕方なくですよ？仕方なく、私はノツブを引き連  
れていくのです。別に私が寂しくなったとかそういうわけでは全然  
なくてですね。ええそうです、そういうわけではなく……」

「なんでそんなに早口……？」

「……ごほん。ノツブ来るんですか。来ないんですか？どっちです、  
今回は貴女に選択を委ねます。ボクが決めるんじゃないやありません。  
貴女自身が、好きなように、望む方を選びなさい」

「私は……勿論、一緒に行くに決まってるよ」

「ふふつ、そつか。そつかそつかあ！ふふふん。じゃあ、ノツブも準備  
して、一緒に行くよ？」

「……うん!!」

## 2話

「ノツブノツブ」

「どうしたの？」

小首を傾げてボクの方を見てくるノツブ。かわいいっ！……  
じゃなくて

「実はですね。こうして旅を始めたわけですが……目的地は決ま  
ないわけですが。ボク的には美味しいお菓子があればいいんです  
けど」

「……」

「なんですか。その呆れたような目は？ 別にいいじゃないですか、  
そろそろ甘いものを食べないと頭がおかしくなりそうなんです」

「母上？ それなら果物とか、食べればいいんじゃないんですか？」

「果物とかの甘さとお菓子の甘さは違うんですー。って違います、そ  
うじゃないです。目的地がなかったわけですが、目的地を決めました  
！」

「どこです？」

「それはですねえ、精霊の住みかです！ そこには精霊女王なる存在  
が居て、運が良ければ精霊を憑かして？ くれるらしいのです」

「へえー、それでもなんで精霊？」

「ボクってば魔力がすごいらしいんです。」

普通の人より多く持つてるみたいなんですよ。

それでもどうしてか魔法が使えないわけです、それなら精霊の力を  
借りれば少しはまともに扱えるのではないかと考えたわけです。

この先、何があるかわかりませんからね。

少しでも強くなれるのならと思ひまして」

「でも……私だって」

「ノツブが強いのはわかってるともさ。でもですよ？ 娘に全て戦い  
を任せるのはダサいんですっ！ ボクだってきらやかに戦いたいわ  
っ！ あと、魔法使ってみたいです」

「母上……」

「だから呆れた目で見ないでくださいっ！ と、とにもともかく、目的  
地は決まりました。これでこの旅もよりいっそうせいが出ますね！」

ぐむっ、そんな音が出るように握り拳を両手で作る。若干ノツブの呆れた目線が横から突き刺さってくるような気もしますが……。英雄は眼で殺す、確かにそうだとボクは思いましたね

「さっ、行きますか」

「母上……」

「む、むぐう……そこまで言わなくても」

「私は何も言っていないけど」

「……行きますよ」

「拗ねないですよ」

「拗ねてませんからあつ!!」

ボクの大きな声が、森のなかで一つ虚しく響くのだった。……がくり



「ひゃーはははははっ!! 皆殺しだアツ!!」

大きな鬼のような種族が山のように積み上がり、その上で子供がなんか笑っています。笑ってるといふより嗤ってるのほうが正しいです。なんですかあれ、怖いです。

「母上……なんでこんなことになって」

「ごめんなさい。ボクが悪かったです。疲れたから気軽に村があるか

ら入ろうなんて言わなきや良かったです……くそおう」

涙を流しながら大変、後悔していました。村の入り口で膝を地につけ、ただただ地面を涙で濡らしていくだけ……なんでこんなことに？

もう殺されるしか道はない？

「おや……？　もしや外の人ですか？」

唾つてる子供とは別方向からゆったりと歩いてくるお爺さん。

白髭に白髪、しわくちやの顔とお爺さんの見本というような姿に少し感心してしまった。

しかし……

「なんでこんなところにござる老人が？」

「一応、ここの村長をやらせてもらっております。あれは日常的なものですのでお気になさらずに……」

「あれが日常的なもの……？」

「スプラッタな村なんですなえ」

ノツブとボクは若干の不安を抱えたまま村の奥へと足を踏み入れるのであった。

先程の光景は綺麗さっぱり忘れることとして、入った村の奥は思っていたより栄えていた。

和風の光景に、近くの森と融合し、それでも人が住んでいるとわかる綺麗な光景だった。

エルフの森みたいな感じだと言えはいいかもしれません。

「すごい……ですね。村というより町ではないですか？　これは……」

「ええ、そうでしょう。代々昔から受け継がれてきた村ですから。人と魔が支えあい、自然が力を貸し生きているのがここです……ここで誰もを受け入れ歓迎します」

「それは、すごいです。自身の種族以外を村へと引き入れることは並大抵の気持ちで出来ることではないかと。事実、単体の種族のみの国などが多いですし」

「ここは国ではありませんせぬゆえ。さあ、旅でお疲れでしょう。此度はゆたりとお休みしてください」

「ありがとうございます。少し村を見て回っても？」

「もちろんですとも」

「心遣い、感謝します」



その少年は、鬼であった。

だが、鬼であるならばある筈のものである角が生えてなかった。

少年は種族の落ちこぼれと蔑まれバカにされた。

少年は怒りに震えた、なぜそう言われなければならぬのか？

角がなければいけないのか？

少年には理解が出来なかった。自身より弱い筈のコイツらにバカにされなければいけないのか？

あるときに、目障りに思ったのか一人の鬼の男が少年を殺そうとした。



だが、少年は男よりも素早い動きと苛烈な攻撃により粉碎され、一撃のもとにこの世を去った。

それからというもの、少年を殺そうと何人もの敵が少年を襲った。少年に休む暇はなく、ただただ襲われる日々に駆られた。

1人、また1人と殺し殺し殺しつくし殺しつくしたそのあとは、呆然と血塗れで立つ少年だけだった。

少年の心は壊れてしまった。悲しい物語



「ノツブ！ お菓子ですよお菓子！ 美味しそうです！ 買いましょう！ 今すぐに買いましょう！」

「母上、少しは落ち着いて。」

大人になるというのに忙しない……自覚をもって行動して」

「ぐっ！ それを言われては仕方ないですよ。少し落ち着きます……」

「それでよろしい。それにしても今日は一段とウキウキしてませんか母上？」

「んー、まあそうですね。私の故郷に似た街並みですから……それでこんな綺麗な場所とかなかったですけど。もっと科学が発展してビルがどどんとってますけど」

いつしかの自身の故郷を思い出しながら、少し思いにふける。

「……そっか、母上は故郷に帰ったりするの？」

「どうかなあ……帰りたくないっていったらそれは嘘になっちゃいますけど」

「……そう……なんだ」

「でも、ノツブを置いていたりはしませんよ。もし、帰ることがあっても一緒にいきましようっ！ ……あつ、でも両親になんて相談しましよう」

「そっか、そっかあー」

「どうしたんです？」

「ううん、なんか嬉しくなっただけ。母上が……お母さんが私のこと見捨てたりしないってわかったから」

「ノツブ？ ボクにとってはとっても大事な娘ですよ。そんなこと心配しなくても大丈夫です……ボクが死ぬまでずっと一緒にいますよ。嘘ついたら針千本ですっ」

「うん、ならその言葉は絶対に信じるからね？」

「ふふふ、可愛いですねボクの娘はー！ うりうりー！」

「あー！ あーあー！」

わしわしとノツブの頭を荒く撫でると、少し心が和らぐ気がした。



村の中の市場を少しノツブと見回っていたところ、見覚えのあるものを見つけた。

「刀がある……和風だからこんなのがあっても不思議じゃないのでしようけど」

うーん。良し悪しがわからない……

値段は……高いですね。今後のことを考えても良し悪しも分からないものを買うのは流石に止めておきますか。

でもなあ、ですけどお……

「おおーっ!!」

ノツブが如何にも、これ欲しいっ!! って目をしているんですよ……。

どうしましょうかこれ、いや買うって言う

選択肢以外に他はありませんけど。

「おじさん……見た目が立派な安いものって売ってますかね」

ごめんねノツブ。それでもお母さん、お金がないんだよ……

「おお? そうか、妹さんに買ってやるんだな。いい兄ちゃんだな。それならこれとかどうだ、うちで一番安いんだけどよ」

「妹ではないんですが……1つ2つ3つ4つ……7つ……。高いですね」

「やっぱりかあ?」

「桁が多すぎますね……この際何でもいいです一番安いのかかってあります?」

「おー、そうだなあ。これ以下つてえなるとく……んー、厳しいなあ。うちには買わせるもんがねえよな」

「そうですか……」

「まあまあ兄ちゃん、落ち込むなって。この村の奥にあるでつけえ枯れてる大樹があるんだけどよお、そこに刺さってんだよ」

「まさか、刀が?」

「そうだそうだ。今まで誰も触れ続けられなかったもんだ……どうだ

？ 妹さんのために死ぬ気でいっちょ体張ってみつか？ 兄ちゃんよ？」

触れ続けられない、大樹に刺さった刀

しかも大樹は枯れ果てている、と。

危ない匂いしけませんねこれは……でも、うん。チャレンジしてみることが大切ですよ

「おじさんありがとうございます。少し覗いてきますね……いくよーノツブ〜」

「えっ！ ちよつと。待って母上ー！」

その大樹の元へと小走りで向かっていくのだった。

「あんなナリで母親だったかあ。てえへんそうだなあ……」



何時からだったか、忘れた

種族の特性か、それとも自分に原因があるのか……何時からか思考がまともにも出来なくなるときがあった。

背後から頭のなかに直接なにかを流し込まれるような、そんな気分

に陥る。

気がつけば、目の前には多くの倒れ付した者の山が出来ている。記憶はある、自分が何をしたか何をしていたか、しっかりと頭のかなかに残っていた。

初めて、生物を人を殺したときに感じたのは、恐ろしいほどの歓喜と快樂。

自身の手で相手を殺った。その行為に楽しさを見いだしていた。殺す奴は強ければ強いやつほど楽しかった。

何もないと思っていた自分自身に、とてつもなく大きなものを持っていたと錯覚したほどだ。

だから俺は、今も今からも今すぐに強いやつを殺して、殺して殺して殺して殺しまくる。

此度の相手は、お前だ……。

「ハハハッ！ ハーッハッハッハッハッ！」

愉しくて仕方がない、腹からグツグツと噛いが混み上がってくる。槍を握る手も強くなるというものだ



「これが……大樹に刺さった日本刀。触るべからず崇りが起きる……小さい文字で触るなら自己責任だ☆って書いてある、誰だこんなふざけた感じに書いた人は」

流石のノツブも横で苦笑いになっている。ボクも苦笑いになる前に真顔ですなこれは……とりあえず行動に移さないとどうしようもないですし……抜きますか。

「ノツブ、とりあえずお母さんが先に抜いてみます。なんかこれはヤバイって思ったら即座にその場から離れてくださいね？」

「がんばれー母上ー！」  
「んむ、オーケーです」

ザツと、砂利を踏み鳴らしながら大樹の前へと立つ。  
ふんつと鼻から一息吐き出し、力を入れる。

ここで怯えて、ヘタレても仕方ない。覚悟を決めて両手で刀を握る。

……特にはなにもない？ 握っただけなら大丈夫なのかな？

それならばと、いざ抜きにかかろうとした、その瞬間……いつぞやのあの声がまた聞こえた。

『……聖杯からの情報供給、所有者からの情報提供……統合完了。情報の照らし合わせ……完了。触媒となり得るものを確認しました……十分な魔力量、霊力地を探したのち召喚を試みることにします。

……召喚予定の英霊……クラス・アーチャー

真名 織田 信長。聖杯からの一定の魔力量の支援……新たな魔術の会得の準備が完了致しました。所有者の任意による魔術回路の開発を次回行います。現在の魔術回路数……ゼロ。次の開発で増える魔術回路の数予定……3。少なすぎる、聖杯からの魔力支援を更に求める……否認。承諾した、今回はこれで我慢をする……所有者の意識が此方を向いた、どうやら気が付いたようだ。どうせ理解できない、今回は放っておいて構わないと判断。今回の結果報告を終了する』

……え、いまのなんです？

待つて待つて待つて、情報量が多すぎる。

前はそんなに喋らなかつたですよね？

しかも何か軽く貶された気がするのですが……まあ、謎の声を聞き限りこれを抜くには賛成のようですし。一思いに抜きますか。

長すぎる謎の声と情報量の多さに少し戸惑いと困惑がありつつも、今はこの刀だと腕に力を入れ全体重を後ろへとかける。

そしてそのまま、その勢いで腕を自身の方へ向いて力の限り引くつ  
!!

バキバキッと何かが割れるような、そんな音を耳にしながら力と体力の続く限り引つ張る。

そして漸く、その刀が抜けた。

刀が抜けると大樹は更に枯れ、真つ二つに割れた。それはもう綺麗に清々しいほど真つ二つに……ええ？

「ノッブー！ 抜けたー！ 刀抜けたよー！」

「本当に抜けるとは思ってたなかった……」

「えっ!？」

寂しいことを言われてしまったけれど、お母さんめげないもん。

しかし、この刀……触媒だとかなんとか。

今ではもう分からずじまいかな？

「抜き身のままは危ないですね、さっきのオジサンにお願いすれば鞘とか見繕ってもらえませんかね？」

「それにしても……怪しい光ですね」

キラリと黒光りする刀、なにやら怪しい雰囲気……捨てようかな。

「さて、やることも終わりましたし帰りますかノッブ……」お母さんっ!! ……どうしたんですか急に大声なんか出し……えっ?」

急に足がふらついて、力が抜けてく

あれ？ おかしいな、なんだろうこれ……

あれ？ あれ？ 目の前がぐらついてる、おかしいなあ。不思議です……ね。

目の前で大切な人が倒れていく。

私を救ってくれた、今では親同様なあの人が、鮮血を散らしながらドサリと地に伏せた。

「あ……っ、うあ……あつ……アアアアアアアアツ!!」

人の声に似ても似つかぬような、雄叫びをあげてその人を抱き上げる。

「おいおいおいおい！ この程度で死んだらつまんねえだろう！」

さも当然のように、そこにいるソレを睨み付ける。

歯を噛みしめ、自身が痛いほどに手を握りしめタラリと血が伝う。

「お前が……お前がやったのか……」

「ああん？」

呆けたような顔を……しやがって。

コイツは、私から大切な人を奪った……ああつ、絶対に許さない……っ！

母の身体をゆつくりと地に横たえさせ、母が持っていた刀を手に取り



る。

不気味な見た目によらず、思ったよりも手に馴染む。  
これをどう扱えばいいかわかる。

「なんだあ？ 殺ろうつてえのかよ……いいぜ！ 良いじゃねえか！！  
楽しそうだよなあ!? ……簡単に死ぬなよ！」

「……ゴミが……」

私は刀を、相手は槍を構えて……ぶつかる。  
金属音と打撃音が周りに幾度となく響く。

私の顔には余裕なんてものは浮かんでない、反対に相手は嗤いながら私に向けて攻撃してくる。

明らかに劣勢、私は戦闘経験は一度もなく相手は何度も殺し殺されを繰り返してきたんだろう。

そんな相手に敵う道理は……ない。

だからと言って、この腹が煮えわたるような怒りを消すことなど出来ようか。

必ず、ぶっ殺してやる……っ！！！！

「ほらほらほら！ ……どうしたどうしたアツ!! ハハハハハツ!!」

圧倒的な力量差に押し負けそうになる。けど、私だって負けてられない。  
ない。

刀から突如炎が噴き出し、警戒したのか一度相手が後方へ跳ぶ。

刀から噴き出した炎は周囲を燃やしながら、怒りと復讐の炎は私の

身体さえ巻き込んだ。



……暗い、どこかゆったりとした水の上に浮かんでいるよう。

意識を手放せばすぐにでも深く沈んでいってしまいそう……ああ、ダメだ。沈んじゃいけない気がする。

ここで……ダメだ……すごく眠い。ダメ……かな、ここで終わっても……だつてすごく楽なんです。

あー、もう……ムリです。ここで――。

水上で身体をその流れに委ねて、ゆっくりとゆっくりと瞼を閉じよう……そうしていた。

ああ、でもやつぱりここで終わっちゃうやダメな気がするんです。僕にはまだやらなきゃいけないことがあった筈なんです。

それでも力が出ない、足りない。

力が欲しい……立ち上がる力が、誰かを守れる力が欲しい

ここで、立ち上がれないなら……お前は用無しだ。



「かは……っ！」

相手の蹴りがモロに鳩尾に入る。

体内の空気が一気に外に押し出され妙な声が出る。ゴロゴロと地面を転がり、横たわる。

いまにも吐いてしまいそうなほど気分が悪い。もう、限界に近い……本当に……クソ……せめて相討ち……。

「元気がねえなア？ どうしたどうしたあ！ そんなもんかよ？ あア？」

ベラベラと……でも、これ以上は私も本当に限界……。

立ち上がろうとするものの、膝をついてしまう。

息は荒く、不安定で肩が上がったり下がったりしてる。

もう、すぐそこまで相手は来てる……

「ああ……ごめんお母さん……」

最後の痛みを我慢しようと、目をギュツと力強く瞑る。

だけど、一向に痛みも何も来ない……もしかしたら、私が目を開けた瞬間に殺されるかもしれない……あれこれと考えて不安になってしまい、それでもゆっくりと瞼を上げれば……そこには先程まで私を追い込んで殺す間近だった相手は居なくなっていた。

不思議がつて、キョロキョロと見回すけど何処にも見当たらない……それどころかお母さんの身体まで無くなっていた。

さつきまでの攻防が嘘だったかのように、その場は静粛としていた。

緊張から放たれたのと極度の不安に、足に力が入らず尻餅をついてしまう。

何が、どうなっているのか全く理解できていないのが解る。

ああ……でもいまは……もう休みたい……

最後に聞いたのは何かかが落ちる音だった。



「この程度か……まだまだだな。コイツもこの身体もどちらもだが」

彼の姿をしている、何かは地から遠く離れた上空でその首を掴み、物思いに耽っている。

掴んでいたそれが、動かなくなったのを確認すると手を離しそのまま落とした。

「いつか、この身体を貰ってやるときのために調整を施してはいるが……チツ、これじゃ何も出来ぬな。しかし、そうだな、さつきのアレは戦力には役立つか？ 英霊共の一体でも降霊して……そうだな、デ

ミかそれくらいならここでも出来るか……肉塊に近い状態だが……  
まあどうとでもなるだろう。色々と試したいこともある……ちよう  
どいい実験台だな」

「ブツブツと一人言を言えば、ゆつくりと地へと降りていった。

## 東方Project二次 ②

昔々、あるところに小さな白い蛇が一匹居りました

白い蛇は人から、吉兆の印と言われ見つけられるとそれは大変追われる身だったのです

白い蛇は体質上、日が出ている頃は身体が鈍く動けませんでした

そんな状態ではまともに食事にもありつけないこともなく、その小さな灯火は消えかかって居ました

人に環境に怨みを懐いた蛇は、怨みを持ったままとうとう死んでしまいました

怨みを持った死んだせいにか、蛇はその姿を自身が望んでいた大きなものへと変えていました

それからと言うもの、人間を殺し、ときには自身を追いたてていた子供達を親の前で嘲笑いながら自身の糧として喰らっていました

蛇は殺戮と悪行の限りを繰り返し、場所を転々としました

場所に寄っては神様と崇められ、また別の場所では化け蛇と恐れられていました

そんななか、1人の娘が蛇の前に現れたのです

娘は言いました、そんな生き方で辛くはないのですか、と蛇はその娘の言葉に激怒していつものように食い殺そうとしました

ですが、何故かいつものように身体が上手く動きません

何故だと疑問に思っている蛇に娘は言葉を続けます

そんな貴女を見ているのは嫌だと、幸せになつて欲しいと

娘は言葉を言い続け、言うことがなくなつたのか口を開けては閉めを繰り返し、嗚咽のように息を溢すばかりでした

その間も蛇の身体は自由が聞かず動けぬままでした

娘の言葉は何も蛇には届いては居ませんでした。蛇にあつたのはただ娘を喰らうという意思だけ……他には何もありませんでした

娘は息を吐き出すだけとなつていた口から、漸く一つの言葉を顔を染めながら蛇に言いました

貴女はとっても綺麗な

蛇はその言葉に怒り狂いました。蛇にとって外見を誉められるのはとても嫌なことだったからです

白く綺麗な美しくもしなやかな身体は、赤く宝石のように光り輝く目は、そんなものがあつたせいで、人から追われ、下卑た目で見られる日々……全て人の道楽の為に産まれてきてしまったような自身の外見を誉められるのは蛇はとても嫌つていたので

前にも同じように誉めてきた人間は居ました、ですがそれも蛇を捕まえ殺すための時間稼ぎ、蛇は大きくなつてからずっと同じ言葉を言われ続けて、そんな人間も食い殺していたのです

そんなときに同じ言葉を吐くこの娘に酷く苛立ちを覚え、動かない身体を無理にでも動かそうとしているのです

そんな蛇に娘は少しずつ近づきその身体に触れ、今まで言ってきた

言葉より短い一言を蛇に言いました

ごめんね

蛇は何故、娘が謝っているのか分かりませんでした

気味悪く感じ、蛇は動かない身体をどうにか動かせ娘を退かせようとしていました

身動きする度に、娘は自身より何倍も大きな蛇を両手いっぱい抱えて抱き締めました

安心してくれと、大丈夫だと娘は言いました

そんな娘に蛇は気味悪さを感じながらもどこか気を許していました

落ち着いた蛇を見た娘は、ここにいる事情を語りました

近くの村に住んでいた娘は、一つの噂を聞いてそれを村の長に話したのです。近くの洞穴に大きな化け蛇が住んでいるぞと

村の長は半信半疑ながらも、村の一人の屈強な男を洞穴に向かわせました

蛇もその男を知っています、娘が来る二月ほど前にここに来た気がすると、ですが一々自身が喰らった人間の顔など覚えているわけもないので、本当にその男だったのかは知りません

それから少し間を開けて人がドンドン来るようになっていたのを感じ出しました

屈強な男から、綺麗な女へと、そのあとはこの娘でした

どうやら話から察するに、今までの男や女たちは蛇への供物らしく確かに供物を与えだしてから蛇は洞穴から少しも外には出ていません



そんな蛇に供物を与えれば被害はないと村の人間たちは思い込んでいる様子でした

娘は自身が話した噂のせいで村から供物を捧げられる日々に耐えきれず、とうとう自分から供物へと立候補したようでした

そして、この洞穴へと足を踏み入れた娘は洞穴の主である蛇のその瞳を見て、恐れと同時に恋慕を抱いてしまったのです

怒りと怨みを孕んだ瞳の奥のどこかに辛さとどこか泣きそうな弱々しく見える蛇を見た気がしたのです

だから蛇が可哀想だと、辛そうだと、そう言ったのです

それを聞いた蛇は、娘を喰う気も失せ娘を放って奥へと引っ込んでいきました

翌日、怠い身体をゆっくりと起き上がらせて蛇は洞穴の入り口の方へと進んでいきました

ビククリすることに、娘は未だに村へと帰らず入り口のところで一人眠っていたのです

蛇はそんな娘を見て呆れて笑い、食ってやろうかとも思いましたが、止めました

自分のような化け物の住み処の前で呑気に寝ていられる娘に興味を抱いたので

このまま入り口のところで娘を置いておくにも面倒なので、自身の尾で娘の身体を巻き付けながら奥へと運んでいきました

娘の目が冷めたのは少しあとでした、寝ぼけて居るのか、目の前の蛇に気づかず、そのままぶつかってしまい、少し痛かったように蹲ってしまいました

た  
漸く目がしつかりと冴え、頭が働きだしたようで現状を理解しました

そんな娘を蛇は呆れて見ました

た  
娘は蛇の方を向き、何が嬉しいのかにへらと笑い蛇に抱きつきました

少し鬱陶しくありながらも抵抗はしませんでした

う  
蛇は洞穴から出ていくことにすると娘に伝えました、娘は慌ててどうしてなのかと聞きます

それを見てまた蛇は呆れた目で娘を見ます、蛇は娘に言いました  
お前を村に帰せは出来ない、だけどお前を喰う気に私はならない。  
また違う人間が来ては面倒なことになる…と

娘は蛇の話を理解できないようで蛇はまた呆れた様子です

蛇は思いました、人間はバカだと思っではいたが…この娘は筋金入りだと。特大級の阿呆だな

そんな風に娘を見ていました

つまりは蛇が娘に言いたいのは、村に娘を帰すと面倒になるので、蛇が洞穴を娘と共に出てついてこいと言うことでした

娘に蛇も何とかわからせて伝えると、娘は喜んだように目を輝かせて、共についていくと大声で高らかに叫びました

それを鬱陶しそうに思えるも、何も蛇は言いません

そのあと二人は洞穴を出て様々な場所を転々としました

目立ちすぎるのも良くはないかと蛇は身体を昔ほどの大きさに縮ませ娘の腕に絡み付きました

その頃から蛇の悪行も成りを潜め、獣の肉を喰らうのみとなりました

そうして娘と共に生きていて十数年経った頃、娘は女へと変わり大したものも食べていないのに身体を大きく変えていきました

その変化に少し蛇は嫉妬しつつも、いつも通り娘の腕に巻き付きながら、娘と軽い会話を楽しんでいました

この時間の間で、一番変わっていたのは娘ではなく蛇でした。前のときより性格はまだ怨みはあるものの丸くなり娘を可愛がり、唯一気の許せる人間として認めていたのです

そのときには既に蛇の噂や話は消えほとんどの人が蛇のことを忘れかけていました

そうしてささやかな幸せを掴み取り、人生を過ごしていた一人と一匹はハッピーエンド……そんな訳にもいきませんでした

娘の腕に絡みついている蛇を見て、怒りに目を染めた男が居たのです

その男は蛇に自身の妻と子供を食い殺されていたのです

その見覚えがある蛇に男は近づき、蛇が絡みついている腕を持ち上げました

娘は驚愕に表情を染めると、すぐに男は蛇だけを摘まみとり娘を投げ捨てました

そして最悪なことに、男は一人だけではなかったのです男の合図を聞くとドンドンと他の男達が集まってきていましたどこから湧いたのか、何人もの男達が娘を囲いました近くの浮浪者か、汚い服を来て身体からは悪臭が臭う

蛇を摘まみとつた男は蛇を見てニヤリと嫌らしい顔をして、即座に蛇に持っていた刃物で身体を刻み始めました

また最悪なことに、今は朝で、蛇はこの頃身体の老化を感じ取っていました

その為身体は上手く動かず、男達に囲まれている娘の元へと行けませんでした

蛇も男と同じように怒りに目を曇らせて睨みつけました

娘はどうとう男達に襲われ、時折男達の隙間から見える娘は衣服を剥がれ素肌を晒していました

止めてくれと懇願しても止めない男達は我慢ならんとドンドン娘に襲いかかりました

穴とい穴に自分達の情欲を注ぎ込み

娘はそれを泣きながら抵抗していました

蛇はそんな娘を助けることも出来ずに、ただ男に身体を切られていくだけでした

ふざけるなど男を睨み付けるが、男はニヤニヤと笑っているばかりで

何も喋りません

何時しか娘の声は泣き声の合間に喘声が混じり、厭らしい水音と肉と肉を叩き合うような音が男達の方から聞こえてきました

音が全て止み男達が去っていき、蛇は男から手放されました

蛇は娘へと急いで何とか駆け寄るが、娘は既に事切れていました

その事実には蛇は怒りよりも哀しみで自身の枯れた身体をどこから出てくるのかその瞳を大量の涙で濡らしました

蛇を切りつけていた男は、ニヤニヤと笑って最後に　いい気味だな　と言ひ蛇の頭を叩き潰しました

蛇は死んだあと、どこかでまた娘と会えることを望みました

次の瞬間、目を開けると自身の身体が娘に似た姿へと変わってしました

全てが一緒ではありませんでしたが、ほとんどのものは娘のものと一致しており、変わっているのは髪の色とその瞳の色だけです

蛇と会った頃の少し幼い身体付きの娘を水面越しに見て、また蛇は泣きじゃくりました

泣いて泣いて、泣いて。もう涙が出なくなってしまった頃に蛇は動き出しました

何をするのか、それはわかりきっていることです。復讐、それだけを想いに歩き続けました

自身と娘が死んだ場所に戻ると、娘の身体を今にも喰らおうとしていた獣が居ました

ああ、ふざけるなと蛇はその獣を蹴り殺しました

蛇は自身の前の身体を拾いあげ、それを喰らいました

次に娘の遺体を見つめ、その汚れてしまった身体をどこから出したのか自身でもわからない水で綺麗に洗い流していきました

このまま娘を置いていく訳にはいきませんし、置いてはいきたくありません

それならばどうするのかと蛇は思いました

そして一つのことを思い出しました。娘は元々、自身への供物だったのだと

ああそうだと喰らっても別にいいのだと、蛇はその硬く冷えきった娘の遺体を、骨も残らず全て喰らいました

出したであろう涙も既に枯れきっており

娘を食らいながら嗚咽を漏らすだけだった

蛇は娘を喰らった途端に、身体にドンドンと力が湧き出て今にも力の本流に押し負けて蛇の身体が限界を言いそうになっていました

このままでは、また死んでしまうと思った蛇はその本流を力任せに使いました、すると目の前の地形は大きく変わりまるで凶災のあとのようにでした

蛇はその力を使い、娘の身体を汚し殺した男達を蹴り殺しにして己を殺した男はゆっくりと足から徐々に切り落としていきました

蛇は復讐が終わると、胸に穴が空いたような空虚な気持ちでただ座り込んでいました

一人の人間をここまで大事に思っていた、そんなことを昔の自分に言っても信じてはくれないだろうと呆れた顔で笑いました

そのあとは何をするでもなく、ひたすら同じように歩き回り徘徊するだけとなった

そんななか、あるときに蛇の目の前に紫色の衣装の似合う娘が不思議な隙間から蛇を覗きこんでいました

娘はこう言いました、貴女はとても醜い

蛇は怒り狂いました、娘と同じような姿をした自身に醜いと宣う紫娘に怒りのままに攻撃を仕掛けました

ですが全て不思議な隙間に吸われ、どこかに消えていつてしまいました

娘は言いました、私と一緒に来ないかと

それに付け加えて言いました

貴女は醜いけれど彼女はそうではないのでしょうか？と

蛇はそれにそうだと言いました

一緒に来いと言われましたが蛇に行く気はありません

無限の命を手に入れてしまった蛇はこのまま何処かでひっそりと引きこもる予定だったのです

娘はその蛇の様子を見て残念そうに言いました

あら残念、貴女は醜いけれど磨けば輝く宝石なのに

そのまま腐って生きていいの？とそう言っただけ娘はその小さな手を蛇へと差し出しました

蛇は少し悩みました、その娘の手を取るのか取らないのか

何故なら少しだけ、少しだけその紫が娘と重なったからである

ですがやはり断ろうと蛇が思ったそのときに、蛇にだけ何処からともなく声が聞こえました

蛇はその声を聞くと、呆れた顔をしてその娘の手を取りました

娘は花が咲いたようにニツコリと笑って、よろしくと言ってきました。蛇も少し不機嫌ながらもよろしくと伝えると

二人はその隙間へと飛び込んでいきました

二人が居なくなつたあととはそこに誰かが居たなどと信じられぬほどに、何もかも先程の空気感さえも消え去っていました

めでたしめでたし

## 2 話以降

遠い昔、私は紫に誘われ幻想郷作成の手伝いをした

本来の目的とは違うだろうけど、紫のことだから

たまたま擦れていた私を拾ったら、案外役立って棚からぼた餅みたいな感じだろうか

そういうわけで、この幻想郷を作りあげた一応我が主人を少しだけ讃えながら貶していく

紫とは何度も意見の食い違いで喧嘩した。今では黒歴史として笑い話に出来るくらいだが

因みに喧嘩するさいは、日本が海に沈むどころか粉碎されるんじゃないかと心配されるほどだった

まあ、あのときは心配する人間など周りには居なかったが

今は藍が止めてくれたりしている。藍というのは私のあとに紫の式になった狐だ、頭が良くて 少し頭の出来が悪い私は何時も助けて



もらっている

かといって私が紫の式なのかと聞かれると微妙だが  
親友みたいなものだろう、だから私には八雲の性は与えられていな  
い

ただの白い蛇さんだ。住むところがなくて紫のところに厄介して  
いるだけなのだ

昔のことを吹っ切れたかと聞かれると、どうだろうか  
今でも人間は嫌いだし、ぶち殺してやりたいくらいだ

特に男は大嫌いだ、情欲にまみれた下卑たあの目を見るだけで手が  
出そうになる

だから、万が一幻想郷でそんな間違いが起こらないようにするため  
に、そういう系統の道具は幻想郷には入れないように対策はしてい  
るし、入ってきたとしても即座に粉碎する

使おうとした男などは勿論血祭りにあげる。正当防衛だ何が悪い

あとはそういう能力持ちも入れないようにする

少し話が逸れたか、あの娘について吹っ切れたと言えば嘘になる  
今でも若干引きずっているとは私も思う

今でも思う、何が悪くてあの娘が傷つけられたのだと

そんな一番辛かった時期を支えてくれたのが紫で、だから喧嘩して  
もこうして一緒に居るわけだ

幻想郷での私の役割は、主に雑用だ。紫の元に来てからや、藍が来  
てからは随分と頭は良くはなったが、それでも二人には劣る。人間に  
負ける気はしないが……

藍が忙しいときに、忙しいやつに頼むのは間違っているだろうと思  
われる、細やかな仕事をしたり、妖怪や精霊達とのコミュニケーショ

ンを取ったりしてくるのが私の役目だ。あとは結界の修理や、幻想郷に力で解決しないといけない案件のときは私が一番に出る  
それくらいしか私には出来ないしな

案外、幻想郷というものは良いもので私のような妖怪にとっては暮らしやすい

人間が居なければの話だが

人間を食うことを娯楽としていたが、別に絶対的に必要な行為ではない。普通の飯を食べば生きていけるし、人間を食わないと死ぬなんてことはない

というか私程度の悪行など幻想郷では可愛いものだろう

「シロ〜？・どこ〜？」

幼子特有の高い声の主は、次代博麗の巫女の継承者の霊夢である  
今代の巫女が死ぬまで、ここで修行中だ。霊夢の修行を見るのも私の仕事の一貫だろう

そして人間の中でも私が気を許すことが出来る唯一の子供だ

人間の幼子は良いものだ。少し小うるさいが、未だに純真無垢な間は何でも吹き込める

女の子なら尚良しだ。男の子供は駄目だ、目も当てられん  
あれはただの野生の猿だ。間違っては居ない表現だろう  
成長すれば情欲の限りにヘコヘコとメスに腰を降る愚物だ

さて、ずっと声を無視するわけにもいかんだろう  
応えなければ

「霊夢。私はここだ、どうした何か用でもあったか？」

「あつ、いた。今日こそは貴女に勝つわよ!!」

指を私に指し、身体が小さいながらも大きく見せようと少し背伸びするその様子にクスリと私も笑ってしまいが、これも既に日常の一部となったものだ

霊夢が挑戦し、私が承ける

「随分と大きな口を叩くようになったものだ。なら良いだろう、少しその口を黙らしてやる。掛かってこい」

「ぐぬう、ぜえつたいに今日は勝つんだから!!」

大口を叩いたわりに、アツサリと今回も勝負の決着が着いた  
勿論、霊夢の負け私の勝ちだ

数分足らずで見事に両手両足を拘束されてしまっている  
拘束されている本人は、悔しさと怒りに目に涙を集め顔を赤くしている

「それじゃあ今日も負けた霊夢には罰ゲームだな」

「容赦ない……」

「ああ、私はバカだからな容赦なんて難しい言葉は知らないんだ」

「悪魔め」

「残念だが、私は蛇だ。ほれ今日はこれだ」

私が手に持つのは白い何かの鳥の羽

これをどう使うのかと言うのだが

「しかし、霊夢は何故そんなに脇や腰を首もとを晒しているんだ？」

「ちよ、まっつて嘘よ。そんな酷い」

「私はバカだからな容赦なんて知らないだ。覚悟しろ」

「い、いやっ!!…あふっ、や、止めてくすぐった、あははっ!!い、からあ。あははははっ!!やめうふっ」

明らかに、撥つて下さいと言わんばかりのその服装に

羽をサラサラと厭らしく、その白い肌に這わせる

それにあわせて霊夢は大声で笑い、止まらない

そのあとも10分ほど続け、終わった頃には霊夢は肩で息をして拘束されたまま宙で脱力していた

拘束したままでは可哀想だと思い、すぐに屋敷内に降ろす

タイミングを狙ってきたのか、私の背後に不気味な悪趣味なスキマが空いた、気がするので

思いつきり後ろ目掛けて水を噴射する。ハイドロポンプさながらの威力だ

勿論相手も簡単に受けるわけもなく、其のまま水を返してくるので風で外へ跳ばし、冷気で凍らして

即席の器に氷を砕き、4等分にキツチリ分ける

シーズンである夏場では無いが、かき氷の完成だ

「紫く、台所にシロップあるから取ってきてくれる?」

「既にここにあるわ」

両手で、シロップの入った入れ物を指で挟みこちらに見せてくる紫

「準備がいいことで。藍にも——」

「藍は今は出てるわ。それは私が頂いちゃいましょう」

「そうなのか。なら仕方ないな、霊夢ほら起きろ食い物だぞ」

「食べ物!!」

「現金な奴だ。好きなを選んで食べる」

目をキラキラとさせながら、シロップを見る霊夢  
あつちは取りこつちも取りと忙しい

「貴女も変わったものね。最初の頃より見違えたわ」

「それはそれは、それでも綺麗な宝石まではいかないがな。それを言うなら紫、お前こそ変わったじゃないか。昔はチンチクリンでペツタンコのツルツルだったのに、性格は前から大して変わらないけど」  
「ちよつと失礼じゃない!？」

「本当に変わったな。特にその胸、豊胸手術でもしたのか？」

「してないわよ!!」

「そうかあ」

紫の大きなものと私自身のものを見比べると、少しやるせない気持ちになる

蛇の頃はこういう感情はなかったのだが、いかんせん周りが大きすぎる

藍もそうだし、紫の友人の幽々子様も大変大きいものをお持ちだ

あの娘もこういう気持ちがあったのだろうか、しかし胸は大きくても人間に見られるだけだ

何も困ったことはない

「しかし、何か起きそうな予感がするな。最近外が荒れている様子だ」

「ええ、分かっているわ。そのときは貴女も手伝ってくれるでしょ?」

「はあ、分かった。親友のためだ何だって手伝う」

「ありがとう」

幻想郷に吸血鬼が襲撃したのは一月後の話だった

私は今、とても厳しい選択を強いられている

今日の晩御飯が 魚か肉か……私は一体どうすれば……

「早く決めてください……どうせ作るのは私ですから」

藍が私に選択を迫る。しかし、いやしかしい

魚も良い、焼き魚、煮魚、刺身などなど

肉だってレパートリーは増える

「よし、肉にしよう。肉だ……っ!!」

「はいはい、紫様……は寝てますね。分かりました今日は肉ですね……里に買い物に行きますか、手伝ってくださいますか?」

「ふむ、里には行きたくないが……はあ、仕方ない食事もそうだが、藍には逆らえないしな」

本当に気乗りしはしないが食事の為ならば仕方ないと思う……思う

「ねえ?シロく、どこに行くの?」

「ん?ああ、霊夢か。たいした用事ではないからな。ここで待っておくといいい」

「むう、私も行きたい……」

「駄目だ、それにお前にはやってもらわないといけないことがある……」

「やらないといけない……こと?」

「そうだ、霊夢、お前にはここを守ってもらわないといけないのと

……紫のお守りだ。本来なら私か藍がしないといけないんだが……惜しくも今は出来ない。つまり今これを遂行出来るのは、霊夢：お前だけだ」

「私、だけ……うんっ!!いいわ!!やってあげる!!」

「そうか、それは良かった。藍、というわけだ早めに帰ってきてくるとしよう」

「そうですね……紫様もその間に起きてしまうやもしれません。早めに帰った方がいいでしょう」

「ああ、そうだ。早めに帰らないとな」

「それじゃあさっさと行きますか……」

「霊夢、大人しく待ってるんだぞ。待ってたら藍の美味しく飯が待ってる」

「ご飯っ!!うん!!絶対に待ってるっ!!」

霊夢の頭をワシヤワシヤと強めに撫でて、そのまま藍の出したスキマへと足を踏み入れ、里へと出る

そして私の開口一口目が……

「チツ、塵どもが根絶やしになってしまえ……いや、今から私がする」

「落ち着いてください……ほら、早く行きますよ」

「この下郎共が、消えろ滅びろ……」

「はあ、霊夢にはちゃんとした態度なのにどうして他の人間達にはそうなのですか……」

「私にも私なりの理由があるんだ、藍：お前だって昔の話はされたくないだろう……それと同じだ」

「うっ、確かにそうですね。過去のこととは詮索しません、その代わり今回はっきりと我慢してください……人里が滅ぶなどなんてことがあれば、怒る者も居ますし、何よりバランスが崩れてしまいます」

「まあ……分かってはいるが。これは、本能のようなものだよ……いや呪いの方が正しいかもしれないが……ともかく肉だったな、おすすめの肉屋を知っている。行くぞ……」

「何故そのようなことは知っているの？」

「紫、行かなくてもいいのか……？」

「ええ、まだ大丈夫よ……とは言えないわね、妖怪の殆どがこちらについてしまつて……はあ、本当に面倒ね」

「博霊の巫女を出したらどうだ？」

「いや、あの子じゃ勝てないわ。いくら強くても人間なもの、歳には勝てないわ」

現在、幻想郷には吸血鬼達が現れ、襲撃されている

氣力を失つた妖怪共もこれ幸いとあちら側へついてしまつてい

る  
氣力を失つた妖怪など、恐れるに足りぬが だからと言つて無闇に殺しては周囲への被害が増える

自然が消えてしまうのは私的に惜しい

一応これでも元は自然の生き物だ、森の中、湖の畔、風が吹く野原  
全てが居心地いい

それをクレーターだらけにしては幻想郷を吸血鬼から救つたとして意味がない

「ふむ、とにかく相手がどんなものか分からなければどうしようもないだろう……よし、私が見に行くとしよう」

「…あら？珍しいわね、貴女が幻想郷を気にかけてくれるだなんて…」  
「別に幻想郷を気にかけてるわけじゃない。私の氣に入った場所が破壊されないか、それだけが心配なだけだ」

「……ふふつ、素直じゃないのね。そう、ならお願いしようかしら」  
「ああ、そうだな。行つてくるとしよう……ああ、それと」

館から今まきに出ようとしていたが、そういえば言い忘れたことがあると思ひだし、立ち止まる



「なにかしら？」

「友達が困っているからな……その、あれだろ？友達っていうものは助け合うって聞いたぞ？」

「……ふえ？」

「……それじゃあ行ってくる」

呆けた様子の紫を見て、少し恥ずかしくなり館から少し足早に出ることにした



「……」

「紫様、何を呆けているのですか？」

「……えっ、あつ……ああつ!!ごめんなさい、そのあれよ。シロが私のことをその……」

「なんです？」

「友達ってちゃんと言ってくれたのよ。中々ないことよあの子が素直になつて言ってくれること……!!」

「はあ、そうですか。あの人も面倒な人ですね……それじゃあ私は仕事に戻りますので、紫様も早く切り替えてくださいね」

「え、ええ、分かってるわ。これも幻想郷を守るためなもの……しつかりと強く持たなくてわね。さて、賢者としてやるべきことを遂行しに行きましょうか」



「はあー、随分と多いことだな。見るに弱者ばかり、一人二人だけ突出した強さか。あれを潰せば戦意も消えるか……？ 駄目だな、こういうのは私には向いてない」

とりあえず潰せの私には合わない」

ジツと、遠くに佇む吸血鬼を睨む

特にこのまま出来ることがあるわけでもない　ひとまず紫の元へ  
と私は帰ることにした